

震災文庫 7-74

# きのう・今日・明日

— We Love KOBE 阪神大震災と学校事務職員の1年 —



1月17日 長田区新長田周辺

00095123591

# 目 次

会長挨拶	1	
座談会「あの日、あの時、私は…… 阪神・淡路大震災を振り返って」	2	
福住小学校 木村 信哉 「神戸からの電子メール」	23	
室内小学校 藤井由紀子 「あの日の私」	44	
	「震災を振り返って」	48
菅の台小学校 佐々 真実 「大好きな神戸に」	50	
本山第三小学校 樺浜 康代 「余波」	57	
有野東小学校 大南 禮子 「支援体験記」	61	
成徳小学校 大里 啓三 「ガンバレ！ KOBE」	64	
渦が森小学校 山口 仁美 「その瞬間」	66	
甲緑小学校 山本嘉代子 「阪神大震災に思う」	68	
多聞東小学校 北野 公昭 「未曾有の経験」	72	
月が丘小学校 西岡 寿子 「メモリー」	74	
本山第二小学校 斉藤 啓子 「1月17日のあの時のこと」	78	
小束山小学校 菊池 幸子 「赤い月」	80	
千歳小学校 和田 訓子 「1月17日 それから…」	82	
泉台小学校 柳川 桂子 「阪神・淡路大震災」	83	
西舞子小学校 山崎 和子 「阪神大震災・今思うこと」	86	
山田小学校 山田キヨ子 「震災と膨大な事務処理」	88	
西高丸小学校 弘内 玲子 「育児休業中の震災体験」	90	
太山寺小学校 中川 幸子 「平成7年1月1日」	92	
小束山小学校 八尾 信子 「雑感」	93	
夢野小学校 辻井 裕子 「地震のこと」	94	
道場小学校 小西 京子 「1月17日の記録」	95	
伊川谷小学校 小川 久人 「伊豆大島近海地震から17年目の震災と東京訪問」	96	
住吉小学校 福元 雅子 「当時を振り返って」	100	
長楽小学校 水島 直美 「震災を機に」	100	
御影北小学校 増田美由起 「地震…自身…自信なし」	101	
雲雀丘小学校 市枝 賀子 「何も出来なかった…」	101	
会下山小学校 河内 節子 「1年が過ぎて…」	102	

多聞台小学校 松井 智子 「今、振り返って」 .....	102
枝吉小学校 仲野 浩 「大震災の思い出」 .....	102
桜の宮小学校 田中 恵子 「阪神大震災で思ったこと」 .....	102
長田小学校 浜田 和彦 「阪神大震災を体験して」 .....	103
高羽小学校 安部 里美 「思うこと」 .....	103
志里池小学校 嶋田 和子 「愛」 .....	103
(写真) 本庄小学校の記録 .....	104
【特別寄稿】鷹匠中学校 宮松 克育 「大震災について思うこと」 .....	105
六甲アイランド小学校 鈴木 仁美 「語り継ぐ明日へ」 .....	108
(写真) 空からの記録 .....	112
編集後記 .....	114

#### 写真提供

本庄小学校  
 本山第二小学校  
 本山第三小学校  
 渦が森小学校  
 室内小学校  
 志里池小学校  
 多聞東小学校

#### 航空写真提供

バード・アイ

## 原風景は記憶の中に……

神戸市立小学校事務研究会長 高岡 秀行

1995年1月17日、午前5時46分。今でも記憶の中に蘇るあの恐ろしい一瞬。「阪神・淡路大震災」。観測史上かつてなかった、震度7という激震がこの神戸を襲いました。震源地の淡路島北部をはじめ神戸市は壊滅的な被害を受けました。また、明石、芦屋、西宮、尼崎、宝塚ほか県下各地に大きな被害をもたらせ、一瞬にして5,500名を超える尊い命を奪いました。

まだ充分明け切っていない早朝、真っ暗ななかで人々は倒れてきた家の下敷きになったり、中に閉じ込められたりしました。私たちが生れ、育ち、生活をしていた路地や空き地、駄菓子屋さんのあった町並みなど、原風景はもろくも崩れ去ってしまい、今はもう無くなってしまいました。家族や親族を失ったり、家が倒壊し生活の場をなくするという被害を受けた仲間もたくさんいます。このような非常時に全国各地から、たくさんの温かい励ましとご支援をいただきました。また、ボランティアの積極的な活動には大変高い評価がなされました。

被災地での不安と不自由な生活の中で、私たちの職場である学校は、通常の教育の場とは違った役割を果たさざるを得ない状況になってしまいました。そして、私たちの仕事もそうした通常とは違った仕事を余儀無くされる事となり、さらに年度末ということから、本来の事務とも重なって大変混乱した状況となりました。私たちは学校職員として、神戸市の一市民として、その使命を果たそうと精一杯の努力をいたしました。また、私たちは学校が避難所として開放され、地域の方々を受け入れたことによって、少なからず地域とのつながりがより広がり、社会的な認識をより一層強く感じる事ができたという貴重な体験をいたしました。

震災はいつ発生するか予測がつきません。誰にでも、どこにでも起こり得る可能性のあるなかで、学校事務職員として私たちが、「見てきたこと」「してきたこと」「感じたこと」などの震災体験を、記憶が鮮明に残っている間に、生の声として記録にとどめておきたいと考えました。私たちがともに体験したこれらの出来事とおして、多くの人々の心の温かさを感じることができたことも貴重な体験です。私たちはこの思いを今しっかりと胸に抱きしめて、未来に向かって夢を描いていきたいと考えています。

原稿をお寄せいただきました皆さん、編集に関わっていただいた皆さんには、短期間にもかかわらず大変ご苦勞をお掛けいたしました。お陰をもちまして、このたび「きのう・今日・明日」を発刊できる運びとなりました。被災地神戸市の学校事務職員の生の記録文集として、後々までも語り継いでいってほしいものです。

神戸の街も次第に活気が戻りつつあります。一日も早い復興を願っています。

1996年2月

## 座談会

あの日、あの時、私は…

# 阪神・淡路大震災を振り返って

平成7年11月1日（水） 神戸市総合教育センターにて

出席者	荒木 真喜雄	神戸市総合教育センター研修課
	中塚 真千子	神戸市立稗田小学校
	大西 好子	神戸市立若菜小学校
	山口 矩生	神戸市立真陽小学校
	宮松 克育	神戸市立鷹匠中学校

司会 鈴木 仁美 神戸市立六甲アイランド小学校

記録 嶋中 真理子 神戸市立菊水小学校  
菊地 幸子 神戸市立小東山小学校

司会 今日はお忙しい中、ありがとうございます。今日ご参加いただいた5人のうち、おひとりはお元学校事務職員であり、今は教育センターの指導員となられた荒木さんです。荒木さんは行政職の公務員として、避難所業務や震災に係る学校に携われたとお聞きしています。あと学校や地域で被災の大きかった所に勤務しておられる小学校事務職員の方3名と、中学校から特に震災について大きな功績を果たされたとお聞きしています宮松さんに特別に参加していた

だいています。では自己紹介を兼ねて、学校名、震災時の状況、差し支えなければご自宅の被災状況をお話しただけだと思います。

1月17日 午前5時46分

中塚 稗田小、中塚です。幸いにも昨年西区に転居していたため、すごい振りで起こされましたが、とりあえず子供たちを1室に集めて待ちました。地震というのはわかりましたが、真っ

暗で、何がどうなっているのか訳がわからない状況でした。明るくなって、子供たちの学校はどうなるのか気になりまして東町小へ聞きに行くと、先生が来られていまして自宅待機ということでした。うちは1階だったせいか、テレビが落ちたり、棚の上のものが多少落ちたりはしましたが、大した被害はありませんでした。

一番にしたことは、6時半くらいになって私の母のところに電話したことです。(どちらの方ですか?)兵庫区です。大丈夫だったというので安心して、今度は御影の主人の両親に電話しましたが、繋がらなかったんです。誰も出ないんです。状況がわからず心配してたんですが、その後は兵庫区の方にも電話は通じなくなってしまいました。それで主人が車で行けるところまで行ってみるということで御影へ出かけたんですが、車が全然動かない状態で、途中で兵庫区の方へ行くことにしました。朝9時過ぎに出かけたんですが、私の母を連れて戻って来たのは、もう夕方の4時頃になっていました。夜暗くなってからもう一度御影へは引き返しましたが、両隣はすべて1階がつぶれた状態で、死者が出たような状況でした。うちの家は何とか建っていたので、近くの学校から捜しに行きました。一番近い御影高校へ行きましたら、その体育館に両親は避難してまして、主人は夜中に両親を連れて帰ってきました。

翌日は今度は他の親戚の確認をしましたが、長田にいる95歳過ぎの祖母と連絡がとれずに行きました。祖母たちは、家が壊れたので宮川小学校へ行ったんですが、避難所は老人にとって居りにくかったようで、叔父の車の中で過ごしたようです。何とかおばあちゃんだけでも引き取っ

て欲しいと連絡があったようで、三木の方からも親戚が車で来たんですが、1時間たっても歩いて10分のところが行けない状態でした。結局、主人が自転車で長田区まで連絡に行った方が早かったですね。

私の方は急に家族が増えて、翌日食べ物を買に行ったんですが、近くのダイエーは入場制限してましたし、何とかやっとな入れても本当に物が無いんですね。野菜売場を回って何も無かったからと思ってレジに並んだら、後から来た人が野菜を持っていたりするんです。店側も考えて、時間をずらしてパンを出したり、野菜を出したりしていたようで、うまくその時間にはまらなければ何も手に入りませんでした。それでもうちは幸い水道が1度止まっただけで、あとガスは一度も止まらず、電気は当日夕方には点いていました。水道も電気もそんなに困らなくて、1回だけ水を汲みに小学校へ行ったり、中学校へ行ったりしたぐらいです。

大西 若菜小、大西です。自宅は灘区の楠丘町です。朝ドーンとすごい音がして、車がぶつかったかなと思った直後カーッと揺れたので、始めは何かわからず、子供が起きてきたのでとりあえず初歩的な方法ですが、子供を抱いて布団にもぐりました。大きな揺れが収まってから主人が1階へ見に降りました。暗かったのでよくわからなかったのですが、とにかく物が散乱していて、足の踏み場がありませんでした。家は昨年11月に新築を購入して住み始めたところで震災にあってしまったのですが、壁にひびが入ったり、擁壁は痛みましたが、家自体が潰れるということがなかったので、一応家族は無事だったんです。ただ明るくなって外へ出ると凄まじ

い状態で、近所は全部全壊していて、斜め向かいの家にある立体駐車場の上段の車は、滑り落ちてぶら下がっていました。外はガス臭く、かなりガス漏れしているようでした。でもみんな外に出ていて、電柱が斜めに倒れかけているのを避けながら、できるだけ広い所へ集まっていました。車は車庫の中で無事だったんですが、道路は波打っているし、石垣や塀が倒れてふさがってしまって、車が出せる状態ではありませんでした。私の住んでいるところは、中国自動車道の西宮北インターチェンジから六甲山トンネルを抜けて六甲山を下りてきたところになるのですが、下りてきて最初に見る被害の激しいところだったようで、車に乗った人がわーっと声を上げながら、ちょっと見物していくように通り過ぎていくのが、印象的でした。神戸市中がこの状態だと思ったんです。勤務地はもちろん電車も動かないし、今日は絶対学校は休みだと思って、全く問い合わせをするという気持ちの余裕もなくて、避難所になっているなんてすっかり頭から消えていました。自分の家族や親戚の安否の方が優先しますし、第一でした。当日電話は一切鳴らなかったし、電気・ガス・水道は全部ストップです。電気は4日ほどだめで、水道は2月12日に復旧し、ガスは3月17日にやっと出るようになりました。その間、水とガスの無い状態で生活していました。それよりも私が一番困ったことは、保育所が避難所になったことです。（お子さんはいくつですか？）5才と4才です。2人の子供を保育所に預けていたんですが、灘区全部の保育所が避難所になってしまって、子供を保育所に預けられなかったことが一番痛かったですね。実家が近かったのです

が、母が筆筒の下敷きになって怪我をしてしまったので預けられなくて、学校が気になってきたんですけれど、子供が預けられないし、どこにも連れて行きようがなかったんです。それで4、5日たって四国の主人の実家に預けに行きました。でも普段慣れていないからもたなくて、毎日泣き泣き電話が掛かってくるんです。10日程してもうたまらなくなって、その頃やっと実家の母も子供がみれるくらいまで回復したので、子供たちを迎えに行きました。2月の第1週か第2週だったと思います。保育所の再開は2月20日で、約一ヶ月全然みてもらえなくて、悔しい思いをしました。（保育所は公立ですか？）公立だったために余計にみてもらえませんでした。保育所再開といっても保育所での全面再開ではなくて、児童館を借りての再開で、保育所では4月になって一室あけてもらって、完全再開は8月のお盆頃でした。辛かったですよ、やっぱり働く女性としては。それが一番困りました。（家には住めてましたか？）住めてました。でもね、最初の夜は不安だったのと、近所に誰もいなくなって、真っ暗な中にいる、それが心配で、鷹匠中へお世話になりました。でも鷹匠中も安心していれる状態じゃなくて、武道場に入れていただいたんですけれど、照明器具が今にも落ちそうにぶら下がっている状態で不安でした。その日はパンと果物か何かが少し配給されたようですが、それと水と。けれど数が足りなくて手に入りませんでした。水は容器がなければもらえなかったですね。それがわからなくて、当時貴重品というとなんのかってすごく考えて、水筒も持って出ました。

宮松 鷹匠中の宮松です。自宅は鈴蘭台なんで

すけれど、山の斜面に建ってしまして、隣は半壊その隣も半壊、うちだけ一部損壊、また逆の隣も半壊、半壊という状況で、屋根の瓦がかなり落ちていました。外へ出るとガスの臭いがあるというので、その辺を走り回りました。何度も学校へ電話するのですが誰も出なくて、7時頃になって音楽の女の先生が出ました。今から行こうと思っていると言うと、こちらは地獄やから来なくていいと言われて、とりあえず両親の安否確認に走って行きました。両親は新長田なんです。家は大丈夫だったんですが、4、5時間後に火が回ってきて全焼。両親はどこにいるかつかめなくて、何かあれば二葉小学校にということ約束してましたので捜しに行くけれどいない。周辺もかなり燃えていましたので、今度は駒ヶ林中へ行くけれどいない。また真陽小、長楽小と、この4校を走り回ってました。志里池の方の公衆電話しか通じないので、一時間おきに自宅に電話を入れながら、二葉小を中心に4校と志里池の間を何十回と往復して、ようやく夜中の11時過ぎに両親は見つかりました。その途中、畳で遺体やけが人を運ぶ作業をしながらで、ようやく見つかった両親を連れて帰ってその日は終わりました。

2日目にも朝学校へ電話をしましたが、自分の家の瓦が落ちて、隣の家をかなり壊してましたので、その修理で一日終わりました。

3日目の朝一番に学校へ行くのに、5時に家を出ました。交通機関は全く動いていないので、学校へ行けば今度いつ帰って来られるかわからないので、途中嫁さんを実家へ帰して、学校へ行きました。学校へ着いたのが10時頃で、一番最初の仕事が棺桶を作るという状況でした。学

校の職員全員がいろんな作業に走り回ってました。

荒木 教育センターの荒木です。一般的に西区は被害が少ないといわれていますが、(ご自宅は西区ですか?)はい、西区の玉津です。私の住んでいるところは昔は湿地帯で、地盤が弱く、明石川と伊川が合流する三角州のようなところにあります。西区では一番被害がひどいところではないかと思います。10年位前に建て替えまして、多分前の家のままでしたら家は潰れているし、相当な被害があったと思います。私は地震が来ても台風が来ても、大概寝ていたら通り過ぎるだろうと思っている男でしたが、当日跳び起きたのと同時に、家族に各部屋のドアを開けると、脱出のための通路を確保しろと大きな声で叫んだのが第一声で、後は声にならなかったです。

私に幸いしたのは、近所で飼っている孔雀が午前3時、4時に鳴くのがうるさくて2階から1階の玄関脇の部屋で寝起きするようになっていたことです。他の部屋は家を建て替えた時に備え付けの箆筒にしておいたのですが、私が寝起きしていた2階の部屋は箆筒が3本並んでいて、孔雀の鳴き声がいやで玄関脇の部屋に逃げ込んだおかげで、大きなけがが無かったと思っています。今も時々孔雀の鳴き声が聞こえますが、あの鳴き声のおかげで助かったなと思います。私は玄関脇で犬を飼っていたんですが、犬は鎖で繋いでるし、玄関に鍵を掛けていたのに地震で開いたんでしょうね、外へ逃げていました。犬は飼い主の恩を忘れないといいますが、飼い主をほっといて逃げていました。(笑)

隣の家猫は1月帰ってきませんでした。その

点うちの犬は前をチョロチョロしていましたから、まだかわいいところがありますね。

ただ職場のことが気になりましてね。うちの方は水道だけがだめで、電気・ガスは始めからついていました。電話も一応繋がるんですが、回線が大混乱しているのかセンターには繋がらなくて、たまたま近所に囑託でセンター勤務の方がいて、その人と連絡をとりました。すると今連絡がとれたということで聞きますと、余り無理をするな、センターから連絡するまで待機しろ、というような指示だったということで、2日待機しました。その間、雨が降っても大丈夫なように応急措置として屋根にシートを被せました。3日目になって30年ほど乗ったことのない単車を人に借り、したことのないヘルメットを被って、ポチポチとセンターへ向かいました。センターへ着いたのが10時頃です。丁度その時、これからの対応について会議を始めたところでした。

山口 真陽小学校の山口です。自宅は東灘区の本山でして、激震地区、高速道路の倒れた所です。僕は地震がやたら怖くて、荒木さんのさっきの話やないんですけれど、地震というとか何か逃げ道を考えないかんと窓を開ける癖があるんです。地震当日寝ていまして、家内の「地震や！」という一言で起き上がったとたんにもう立っておられない状態の揺れと、同時に筆筒が右肩へ倒れてきて筆筒と一緒に倒れてしまったんです。そのまま寝ていたらまともに筆筒が落ちてきて、どうなっていたかわからなかったけれど、起き上がったために肩口に受け止められて押し潰されたような形と同時に、もう叩きつけられたように家が潰れてきました。一瞬のうち、あっやっ

ぱり俺の建て売りの安物住宅は一発やな、という思いでした。それほど呆気無く、何秒とかからんうちでした。その時僕はワーッと叫ぶだけだったけれど、家内は布団被れとか何か叫んだらしいです。息子はその声を聞いて、出かけた布団をまた被ったということです。僕も誰もが声を掛け合ったら何とかみんな大丈夫みたいなんですけれど、一面真っ暗で動けないんです。もがいてもがいて、やっと筆筒から逃れて立ち上がっても動けないんです。部屋の中は散乱していて、何がなんだか真っ暗で。手探りで一生懸命探って、電気の線があってこっちがこれなら窓はこっちやと、またそこから探って、そうしているうち息子のほうが先に部屋にやってきました。娘は一番奥でなかなか出られなくて、声は聞こえるんですけれど娘のいるところまで行けないんです。何とか家具が散乱している中を無理矢理進んで、やっと娘の手をつかんだ時は泣きそうになりました。

不思議なものであの連休の時家を修理してまして、ドアを取り替えたばかりだったんです。階段はゆがんでいしましたが、そのドアはバンと開いていまして、そこから何とか外へ出ることができました。真っ暗な中、やっとかさ出て見たら、辺り一面全部全壊。本当びっくりしましたね。何でこんななっているんやろって。立っている電柱なんか一本もなくて、足の踏み場もないような状態で、ガスの臭いがするわで。これはいかんとみんな近所声掛け合って、すぐ近くの福池小学校へ避難しようと、辿り着いたんです。学校はやっぱり閉まっていた。みんな学校になんとか入って、部屋を片付けて、ふと気がついたらけが人だらけなんです。そし

て自分を見たら、革靴にパジャマ姿なんですね。何や変やなとか寒くなってきて、着るものなんか取りに家へ戻ったんです。また壊れている家へ入るのが物凄く怖くてね。余震も来るしね。どうにか入って服や毛布なんか持てるだけかき集めてね。また学校へ戻って、人にも貸してあげたりして、みんな着替えてホッとしたら、おふくろや義理の父は大丈夫かなと思いついたんです。家内にはここを頼むと言って、自分は中央区の方へ自転車で走ってみようと思つた。するとあれだけ混雑していた国道2号線の住吉川のところで、兄弟3人とバッタリ出会ったんです。むこうは心配して見に来てくれて、こちらは大丈夫やとわかって、中央区へ走ってみようということになって、中央区のおやじも大丈夫やとわかったんで戻ってきました。そこから僕は記憶がないんです。その日の夕方、車で家族全員を連れて、六甲小学校へ避難しているんです。その六甲小学校から先の記憶はあるんですが、何で車で六甲小学校へ行ったんか、おふくろが六甲小学校のそばに住んでいたということはあるんですが、どこをどう通って行ったんか、記憶にないんです。

その日は給料日やったんが何やしらんけど給料給料とすごく気になってまして、六甲小学校の職員室へ入って行って最初に聞いたんが、真陽小学校の事務の者ですけど、給料のことで何か連絡が入っていますか、ということやったんです。そしたら何言うてるの、いまそれどころやない、という感じでしたけれど、僕にしたら何でそんなこと連絡ないの、何でそんな情報入って来てないの、という思いで、県から何か来ていませんか、何も来てません、でしゃあな

いし、何かあったら一応ここにお世話になりますので連絡ください、何でもしますからと伝えて、2晩泊めてもらいました。学校には翌日電話連絡できてこちらの事情を話したら、しっかり六甲小学校でできることをしてください、家が大変なら25日の職員会までは家の片付けをしてください、と言われたんです。それで家は全壊やったんですが、何とか助かる家具を運び出したりしたんです。大阪からも友達が来てくれて、運び出してくれるのはいいんですけど、持って行くところがなくて。結局自分の住むマンションが借りれたのが3月末で、それまでどこも本山近辺なんか全然なくて、家内と中学生と小学生の2人の子供は、家具と一緒に八鹿の方へ疎開させていました。

司会 ありがとうございます。聞いているだけですごいなあと、呆気にとられます。お話の中にも出ていましたが、大変な家の被害があった中で一番考えられたのは、自分や家族の安全そして家のことだったと思います。人間として当然のことだったと思います。次に働く者としては気になったことは、やっぱり仕事のことだったんじゃないかと思います。

皆さん不自由な中、いろんな手段で行かれたと思いますが、一番最初に学校へ行かれたのは、宮松さんは3日目。山口さんは？

山口 僕は19日、3日目。

大西 私は遅くて5日目。

司会 男の人はお子さんのことがないから、その点は出やすいですよ。

中塚 余震はあるし、全く違う生活をしていた両方の親がみんな来ていて、出られなかったですね。

司会 最高総勢何人でしたか？

中塚 最高13人。それは一時期でしたが、主人の方は何日かたって出勤しましたけれど、やっぱり私は動きが取りにくかったですね。私は学校へ電話しても全然繋がらなくて、夜中にしたらとも思ったんですけど、それも申し訳ないと思って控えたんです。それで連絡のつきやすい須磨区の人に状況を聞いたりしていました。そうしているうち23日に教頭先生から連絡が入って、明日職員集合するから来れるようだったら来てください、ということでした。それで家族で相談して、車で出かけることにしました。ちょっと早目ということで6時に家を出ましたが、着いたのは10時半でした。

### 保育所も避難所に

司会 大西さんから先程保育所の話が出ていましたが、お子さんを預けたままだったんですね。

大西 震災当日はずっと子供を連れて歩いて、鷹匠中へ避難していたんですが、電気は来そうにないし、食べるものもなくて、主人の姉が北区の鹿の子台にいたので、とりあえずそちらへ行ったんです。

司会 車でですか？

大西 車は何とか出せたので、ブロックどけて行ったんです。私はなかなか電話が掛けられなくて、やっと3日目に電話が通じて緊急避難先だけ伝えて、避難していました。20日の夜に校長先生から電話が掛かってきて、明日臨時職員会をするけれども無理しなくてもいいから、と言って下さったんです。けれど、うちは少人数

小規模校で、職員数がすごく少ないんです。男女合わせて16人しかいなくて、人手が足りないというのは聞いていたので、何としてでも行きたいと思って、21日に主人に子供を頼んで、遅ればせながら職員会へ行きました。一旦行ったら帰れる状態じゃなかったですね。全職員でも16人しかいないのに、そこへ1,300人程避難してたんです。もう呼び出し放送だけでも休む暇がなくて、その日は私だけ灘区へ帰るつもりでしたので、時間が遅くなってもかまわないからと、泊りはしませんでした。夜9時頃まで学校にいました。学校へ行くまでは、学校のことは忘れて、自分のことばかり考えていたんですが、行くとなぜすごい状態なんですよ。学校の仕事はもちろんできる状況じゃなくて、ボランティアもいなくて、その頃が一番ひどい時期だったと思います。北区や西区の応援職員が来てくれたのが27、8日頃でしたから、それまでの10日間ほどが一番手が足りなかったです。

司会 区役所とかの派遣もなかったのですか？

大西 派遣もまだなかったです。職員の中にはそれぞれ個人的な理由で出勤できない人もいるから、出勤できる人はほとんど休まず出勤しないと人が足りなくて、もう全然回らなくて。だから女の人でも時間の許す限りいてという感じでした。私も子供がインフルエンザで熱を出していましたけれど、主人に休んでもらって、21日から4日ほど続けて夜9時頃までいて、家族とは別居していました。

司会 一人であの怖い家へ帰って寝ていたのですか。

大西 いえとても一人ではあの家では寝れないので、実家へ行っていました。実家から子供た

ちへ時々電話しながら、これではだめや、子供がいたのでは全然仕事ができないと思いました。保育所へもギリギリまで何度も問い合わせたのですが、無理ですと冷たく言われました。もうこれは見通しが立たないと思ったので、四国へ子供を預けに行きました。そして帰ってきたら、状況が全く変わっていたんですね。応援職員が来てくれるようになって、随分楽になっていたみたいで、これは失敗したかなと思いました。

### 職場へたどり着いたその後

司会 鷹匠中も随分ひどかったとお聞きしています。宮松さんが出勤されてからのことをお話ください。

宮松 学校の被害は、見れば入りたくないという状況でした。廊下は地割れで真っすぐ歩けないし、プールの水は震災当日の昼頃には抜けてしまいました。先程の話に出た武道場は、平屋建てですので潰れはしませんでした。天井から電灯が落ちてきそうでした。当然、電気・ガス・水道全くありません。

僕が行ったのは3日目なんですけれども、職員数43名のうち全壊が8名、半壊が8名、一部損壊が11名という状況ですから、出てこれない職員が多くて、職員10名程が常に動いているという状況でした。当時避難者の方は800名程おられました。僕らとの意識の違いで、僕らも被災者やといくら説明しても分かってもらえないんです。僕らは役所の人間で、避難者を助けに来ているんやと思われているんですね。だから毛布が届いても800名全員には渡らないから見えないように隠す、それをまた見る人がいる。

すると何でおまえらだけで取るんや、というような感じで、常に避難者と職員との間でいざこざがあるんです。僕が行った時も同じようがありました。それで僕はハンドマイク使って「この人も奥さんと子供を稗田小学校において来るんや」とか全部説明したんです。それでも何かんや言うてくるので、それならそれでいいと、緊急物資がきても泊りの職員5人程で全部処理する。夜中に1,000食のパンが来ても全部ストックしておいて、とりあえず避難者には声を掛けないこととしました。翌日、学校長と教頭に、僕らも被災者であること、施設管理者として抑えてもらわないと困ること、学校の先生というのは子供の安否確認が第一なのに物資の搬入や配布に追われているのはおかしいなど、僕が説明しながら話をしました。校長も教頭もよくわかってくれて、各教室へ説明に回ってくれました。僕らも被災者であること、学校の施設を守る管理責任があることなど、30分程ずつ時間をかけて話をしてくれました。そうして校長・教頭と相談して、教室ごとに班分けをし、班長を決め、班長からの命令系統を作ることを決めました。そして20日に班長に集合してもらい、緊急物資の仕分けや分配の方法、時間帯、今しなければならぬこと、例えばトイレがないので裏の方にトイレを作ろうといったことをハンドマイクを持って話をしました。

司会 その頃、まだ応援職員は来てなかったのですか？

宮松 最終的に応援職員はほとんど来なかったんです。北区から応援職員が来たのが1度だけでした。

司会 避難者の班決めということから全て、学

校職員が対応してきたのですか。

宮松 1階のトイレ掃除は1班で、というところまでは指示して、後の運営は班長会議にまかせました。最初の3日間は僕が前に立ってやりましたが、学校職員はお手伝いはするけれども、メインには立たないこととしました。そうして職員は週番という腕章を付けて、学校のことは腕章を付けている人に聞けばわかるようにしました。そうして1週間ほどの間に自治組織を作ったので、教職員が自治組織と一緒にやっていく形ができました。

司会 自治組織を作るにしても、こういうふうには自治組織を作りましょうというイニシアティブは、学校、特に宮松さんが中心になってとられたとお聞きしています。

宮松 結局冷静に学校を見ることができたのが事務職員の僕だったんです。学校長は市教委や県教委、地域と繋がりを持つ必要があるし、先生は生徒のことで走り回っているし、僕は一歩下がって見ることができたんだと思います。僕は一番最初に教頭先生に職員の勤務状況の記録をとることを依頼しました。お金の裏付けの無い勤務は、基本的には無いと思っていましたから、忘れないうちに誰が来ているかチェックして欲しいと。何月何日と書き込める弁当注文用の職員名簿がありましたのでそれを使って、初日から教頭先生にお願いしましたので、勤務についての把握はうまくいきました。自治組織は大きく3班に分かれていて、20日・21日・22日の3日間で一通り回りましたので、その日以降は僕でなくても他の職員でも十分対応ができましたので、交替することができました。

司会 山口さんにも震災3日目からのことをお

聞きしたいと思います。

山口 18日に何とか連絡がつかしましたので、19日には学校へ行きたいと思いました。交通機関が何もないので、とりあえず車で出ました。走れる道があったかなという感じで、信号もほとんどなくて、どこで止まっていいのかわかりませんでした。サイレンばかり鳴っているんですね。救急車・パトカー・自衛隊。とにかくどこで鳴っているのわからないという中を3時間程かかったように思います。何とか学校へ行ったところ辺りは火災で、真陽小の近くは特に焼けていました。

何かものすごく車が怖かったな思い出します。行く道、帰る道が同じところが通れないんです。通行止めになっていて、必ず次の日違う道、昨日ここ通れたのにと。学校の近くまで来ているのにここから先へは行けませんと。真陽小の職員や〇〇やと言って通してもらいました。そのうちだんだん車の量が増えてきて、しまいには5時間くらいかかるようになってきたんですね。それに渋滞、渋滞で途中寝てしまうんです。疲れてきているのか、こんなところで交通事故なんか起こしたら最悪やなど、自転車に替えました。自転車に替えたら時間短縮できるんですけど、車道と歩道と関係無く走らないかんし、夜は真っ暗な中を走らないかん状態で、道のデコボコが全く見えないんです。何回パンクしたか分かりません。そんな状態がずっと続きました。

学校へ行ってからは自治組織といったことには関わりませんでした。普段から自治会とかPTAとか、地域と学校が密着していて、そういった行事も多いんです。当初からすぐ管理職と自

治会と区役所の人とで対策本部ができていました。

司会 区役所の方は当初から派遣されていたのですか？

山口 そうです。校長先生をはじめ、うちの職員も電話の呼び出しなんか一緒に仕事していました。当初1,600名くらい、一番多い時で3,000名くらいの人が避難していましたから。

司会 職員は何人ですか？

山口 県費18人です。廊下・階段・事務室・校長室みな避難所でした。空き部屋なんて一つもありません。そんな中、唯一給食調理室だけが職員の集合場所で、誰も中へ入れないようにして、職員会や職員の連絡をとりました。

司会 事務室にも避難の方がおられるのですか？

山口 僕が行った時には事務室に3人寝ていて、びっくりしました。人が寝ているだけでなく、物資か何かわからないものまであって、それらをどけているだけで人が寝ているんです。端末機なんてとんでもない。校長室にも同じ様に何人か寝ておられましたね。空き部屋どころか足の踏み場も無いくらい、廊下にも人が寝ていました。

司会 学校施設そのものには被害はなかったのですか？

山口 ほとんどなかったように思います。これもやっと9月15日に避難所解消になった後、見回ったときには、多少ひび割れ等はありませんでしたが、ほとんどと言っていいくらい被害はありませんでした。すぐに対策本部ができたり、2月6日から3月末まで自治労から1週間ごとのローテーションで10人ずつ応援が来てくれたりしましたし、テレビで有名になったためか、ボラン

ティアがあふれるほど、ボランティアに仕事を振り分けるのがしんどいくらい来られました。当初はボランティアの数もそれほどではありませんでしたし、職員はもちろん避難所の仕事にかかりっきりでしたが、せっぱ詰まった感じはありませんでした。地域の自治会やPTAの方々の力が大きかったなと思います。

宮松 うちへ区役所の方が来たのが1月30日でした。

司会 区役所と言っても他都市の応援の方が来られたのですね。

中塚 北九州市の行政の方が来られましたね。

山口 学校勤務は長田区で、帰ったら灘区の六甲小学校へ避難するわけです。六甲小学校の震災当日なんて物資も何も来なかったです。夜中に来た物資はダンボール3つで、これをどういうふうに分けるかと言っても、見せられない状況だったんです。そのとき真陽にはある程度物資が来ていたように思います。地域によって物資なり応援なりあって、行くところへはどんどん行っているし、来ないところは全く来ていない状況でした。

司会 ボランティアも救援物資も目立つところへはどんどん行っていたようで、テレビに出るとワーッとボランティアが集まるというような状況でしたね。

山口 職員も一度来たら帰れないという状況で、伊丹から来た先生も1週間くらい泊まり込みとかね、帰れない状況が続くんです。

司会 今度は荒木さんからセンターの災害対策会議以降のお話をお聞きしたいと思います。

荒木 そうですね。まず会議の主題は今後の研修をどうするか、ということでした。当然、中

止せざるを得ないのですが、それをどういう手段で伝達できるのか、という話が出ました。いろいろ考えましたが、結局連絡不可能という判断に立ちました。本来は研修担当の指導主事が連絡すべきところですけど、文書を出しても取りに来てもらえる状況でないから、それは不可能ということになりました。しかし、私にしてみても見学や講師をお願いしているのをほったらかしにするわけにはいかないので、各担当指導主事が通じない電話を半日も掛け回ってようやく通じるという状況で、対外的には後に礼を失うことのない対応をкаろうじて取りました。

もう一つ大事なことは、教育委員会の対策本部が教育センターへ来るということでした。市役所の2号館は潰れましたし、3号館もどうも危ないのではないかという予測でした。ましてや教育委員会は8階にありましたから。センターにもそこそこの被害はありましたが、土台はまだ大丈夫ということで、急拠センターを通常業務ができるように回復せよという命令が出されました。これが大変でした。

司会 それまではどんな状態でしたか？

荒木 足の踏み場も無いほど書類は散乱してるわ、みんなひっくり返ってムチャクチャでした。

司会 それはいつ頃までに回復せよと言われたのですか？

荒木 早急に回復せよと。

司会 荒木さんが出勤されてすぐですか？

荒木 そうです。エレベーターは当然ストップしてましたから、階段を使って、地下から10階まで各研修室、各担当を中心に人数を割り振って片付けました。通常通りですから、例えば本は並べりゃいいんですが、通常は背表紙を揃え

てこうでしょう、裏を向いていたら通常ではないとやられました。2階の視聴覚センターには何百本と貴重なフィルムがあるのですが、釘付けの棚ごと倒れたというので、フィルムを移動させるため腰が痛くなるほどフィルム缶を運んだりもしました。一番困ったのが606号室です。事務職員が中心に使用するOA研修室ですが、足を踏み入れたとたんゾッとしました。机上の端末機もプリンターも、もの見事に全部下へ落ちていましたし、後の資料室は中の戸棚が倒れて、ドアが開かなかったんです。これをひとりで片付けないかんか、とあきらめていたら手がすいたみんなが来てくれて、がんばろうやと励ましてくれて、きちっと片付けてくれました。こんなふうには1月24日までブツ通しで片付けました。結果的に教育委員会の災害対策本部は、センターへは来ませんでした。けれどもそのおかげでセンターの整理も早くできたというのも事実です。

### 灘区役所災害対策本部支援へ

荒木 606号室の片付けが終わって、ホッとしたのと前後して、24日午前中から個別調査がありました。車を持っているか、自転車か自動二輪なのか、緊急の場合はどのような勤務対応ができるのか、それぞれ自己申告しました。そしてその日の夕方遅く全員集合がかかりまして、明日1月25日から灘区役所対策本部支援に入ると言われました。

司会 それは研修課全員でということですか？

荒木 それは教育センター職員全員でということなんですが、センターを守っていく職務もあ

りますから、研修がなくなって仕事の無い研修課が中心になりました。その中で指導主事は教育職員ということで学校派遣，学校支援です。我々行政職に準ずる者は，区役所支援です。その2種類に分かれました。

司会 荒木さんは行政職に準ずる者ということですね。

荒木 灘区の区役所災害対策本部へ行きました。当時、研修課の指導主事が学校支援で、何で僕だけ区役所支援なのかと感じました。

司会 ズーッと灘区役所ですか？

荒木 そうです。神戸市のマニュアルには近くの事業所に勤務するということになっているんです。最初はそれで対応していたらしいのですが、指揮命令系統がうまくいかないということで、部局ごとに行政区を割り当てて、教育委員会は灘区役所支援ということになったということです。

灘区役所に行きますと、教育委員会の課長級と係長級の人が居られまして、我々がどこの課から行ってもその指揮命令系統に従う，ということを経験して教育委員会として取りました。

司会 教育委員会の指揮命令系統に入るのですかね。

荒木 その人が灘区災害対策本部と連絡を取って、その結果僕らに指示するということです。その方がより効率的に行政が稼働していただく、という案だったようです。

司会 稼働しましたか？

荒木 結果的にはそうらしいです。

司会 鷹匠中へ灘区役所支援が入ったのは1月30日でしたね？

宮松 神戸市の職員は来られず、一番最初は北

九州市の人でした。

司会 稗田小は灘区役所の管轄でしたね？

荒木 北九州市が一番早かったと思います。僕が灘区役所に派遣されて最初にしたことは、区民ホールの地下駐車場で灘区避難民3万食の出し入れやったんです。

司会 避難食ですか？

荒木 24時間勤務で、お弁当、水、その他モロモロを出し入れするのですから、合計6万食です。

司会 何人くらいでやっておられたのですか？

荒木 約20名くらいです。そのうち行政職は15名程です。教育委員会の各課から来た人間ばかりです。あと会社名の入った腕章を付けた企業のボランティアが来てましたね。自衛隊も既に来ていました。

司会 そのボランティアの方も教育委員会の指揮命令系統へ入るのですか？

荒木 いや入りません。

司会 荒木さんは学校支援へは行かれなかったのですか？

荒木 行きません。行ったのは各学校の対策本部です。学校とは関係が無いんです。

司会 それも教育委員会の指揮命令系統の上ですか？

荒木 その頃になったら区役所の指揮命令系統です。

宮松 区役所から1名、他都市から1名というふうに途中から来られるようになりましたね。

司会 対策本部にですか？

宮松 対策本部にで、学校にじゃありませんね。

中塚 うちの学校イコール対策本部でしたから学校へ来られました。3月27日にやっと区役所

の対策本部ができたんです。それまで職員室に職員がいて、そこが対策本部でした。

司会 では中塚さん、対策本部とか避難者の自治組織とかは稗田小ではいかがでしたか？

中塚 震災当日は2,000名を越え、2日目には3,000名を越えていたようです。ですから超満員ですよ。どこに空き部屋があるかなんて全く把握できませんでした。後になって図工室・理科室・音楽室・管理員室・PTA会議室が空いていることがわかりましたけれど。

私が行った時には既にいろいろな係ができていまして、各教室ごとに班分けもして一覧表ができていました。45班まであって、運動場も稗田公園もそれぞれ1つの班でした。稗田公園が一番人数が多くて、稗田公園を含めて3,500名くらいになったのですが、稗田公園も学校への避難として最後まで物資など同じようにしていましたね。職員室が対策本部のようなもので、職員室の後の方は自衛隊の医療班が仕切りをして常駐していました。職員室の前にある電話は受付として稼働しなくてはいけないので、校長先生・教頭先生が一番後の机の辺りにいつも座られていました。他の職員は毎日違うところで、空いたところへ座っていました。

物資については、同じもので同じように分けるといことが、かなり難しかったですね。給食室で食料物資の受け入れを行っていたのですが、外から見えるんです。見ると、どうしてあれをくれないんだと言われるのです。数が揃わないと配れないことが最後まで大変でした。

職員はローテーションを組んで毎日職員室でスタッフミーティングを行いました。

司会 それは職員だけでですか？

中塚 そうです。物資係からとか、班長会係からとか。それがいつまで続いたのか、3月27日に区役所の対策本部が放送室にできるまで、職員室が代わりをしていましたから。区役所の応援として北九州市の方が2名来られて、電話受付してくださったんです。ものすごい電話量でしたから、それだけでもずいぶん助かりました。また1月末から教育委員会から2人が交替で24時間体制で来てくれたのと、2月始めから大阪の高教組が交替で、来てくれるようになりました。昼に来て、泊まって次の昼に交替するというローテーションで来てくれたので、その頃から職員は夜ずーっと起きていなくてよくなりました。

荒木 区役所支援の話に戻りますが、1月24日に灘区へ行け、と言われた時、言葉に言い表せないんですね。内心ドキッとしました。西区でも一番明石市寄りですから、自宅からセンターまで何時間かかって通勤していたか。途中地下鉄で板宿から歩いてセンターまで2時間かかっていましたから。歩いている途中何が悲しいんか、涙がポロポロ出た記憶があります。何で神戸こんなになったんやろかって。

司会 被害の激しかった所を通っていたのですね。

荒木 そうです。結局、行政は行けと言われたら、自分で方法を工夫して行かざるを得ないんです。それで灘区へは朝4時に起きて、5時に車で出発。藍那へ出て、小部峠から再度山を下りて、山手幹線を通って行きました。当分帰れないと思って、寝袋と毛布、着替えを3組くらいにぎりめしを2日分用意して行きました。

1日は車で寝たんですが、これでは体がもたな

いと思いましたが、深夜にかけて帰って、また早朝車で出ることにしました。途中から物資の配給方法が変わって、ここでは用がないから、と僕は灘小学校へ行くことになりました。

司会 それも灘区の災害対策本部としてですか？

荒木 全く学校とは関係無しに、灘区の災害対策本部として行きました。地域住民やボランティアと相談しながら、物資の配給やいろいろなことを計画させてもらいました。

司会 マニュアルはあるのですか？

荒木 ありません。「灘区災害対策本部」という腕章を巻いて行きましたら、たいへんな目に会いましたけれどね。私が行った時には既に住民組織もボランティア組織もできていましたので、今さら区役所対策本部員です、と言って何か立案できるような状況ではありませんでした。いかに住民やボランティアの要望や苦情を灘区災害対策本部へスムーズに伝え、実現させるか、ということが仕事でした。

司会 具体的にはどんな要求を、どのような形で実現させるのですか？

荒木 それを実現できなかったのです。1つの例ですが、湯を沸かす大きな茶瓶が欲しいと要望したんです。これには2週間かかりました。その間に灘小には北九州の人が1週間交替で支援に来られていて、その人が帰って宅急便で送ってくれたのが結局先に着きました。中でも一番困ったのが、カット野菜の配布です。野菜不足を補う主旨はいいのですが、それを配る手立てがないんです。小さなビニール袋を要求されたのですが、それが手に入らない。仕方ないので、大きなビニール袋に何十人分です、と言って渡しました。カット野菜にはその都度泣かされま

したね。

司会 役所として対策本部の腕章を付けて行っても、解決できる問題は少なかった、何をしたらいいのかも、その場で考えていくという状況ですね。

荒木 物資要求ができるものとできないものがあるけれども、それらが整理できていなかったんです。3月の始めになってから物資要求一覧表というのができました。

### 避難所その一方で事務職員の仕事は

司会 今までのお話で学校や避難所の動きが、非常に大変な状況にあったことはよくわかりました。しかし、その中に私たち本来の事務職員としての仕事が見えてきません。一番最初に事務職員の仕事として意識したのは、1月17日の給料日、給料の支給をどうするかということだった、と思いますが、それ以降、事務職員としての仕事はどうであったか、ということをお話してください。大西さん、いかがですか？

大西 職員数が少なかったもので、そちらの方に奔走していましたね。委員会からFAXが来ましたね。○日迄にこれをしてください、って文書がFAXされてきて、初めて自分の仕事に時間がとれる状態です。

司会 給料は別にして、一番最初に事務職員としてした仕事は何ですか？

大西 端末機の操作点検が一番先だったと思います。

司会 いつ頃でしたか？

中塚 2月の6日か7日にしてください、でしたね。

大西 うちの学校は配慮してくれて、事務室と校長室と職員室は避難所からはずしてくれてたんです。ただ、物資が入っていましたので、端末機のところへ行ける状態じゃなくて、2月6日までに直して欲しい、と言ったのを憶えています。2月6日に初めて端末機にさわりました。指示が無かったら、やはり動ける状態じゃなかったです。本当にご飯を食べる時間もなかったんですよ。みんな2時3時になって、交替しながらやっと食事ができる、という状態でしたから。

司会 学校事務職員と、例えば教員とか管理員とか、仕事の区別は感じておられましたか？

大西 全然無かったですね、最初のうち。

山口 最初のうち、全く一緒ですね。

大西 いわゆる職員としてという動きしかできませんでした。学校事務職員としての仕事のできる状態ではないし、時間的な余裕もなくて、あの指示が来るまで全然動けませんでした。

山口 僕の一番最初の仕事らしい仕事というのは、2月分の電算入力でした。応援に来てくれていたどこかの学校の事務の方が、電算入力しましょうか、って言うてくれたんです。えっ、そんなことせなあかんのか、何の指示も無いのに、またあとで訂正せないかんのも困るし、来月までほっとこう、と決め込んで、一切指示があるまでしないつもりで電算をパスしました。そういった情報が正式に全く伝わって来ないんですね。電話は当初パニックやったし、職員室にFAXがあっても、職員が誰も入っていない対策本部になっている職員室に、山口様ってFAXが届いても、どこの山口さんかわからへんわけです。期日なんてあって無いようなもので、僕のところへは書類が届かないんです。FAX

なんかは1つも届かなかったんです。

それと端末機のテストせいと言うたって、キーボードが無いんです。捜しまくって、やっと校長室のその辺にあった言うて、見つけてきてね。何とか事務室は空けてもらったんですけど、事務室は物資置場、紙オムツが一杯詰まっていた。

司会 今、山口さんから情報の話が出ましたが、事務職員にとって忘れられないのは、オンラインの文書システムが利用されたことですね。毎日開くよう指示が出ていましたけれど、いかがでしたか？

宮松 あれを使わなければ情報が伝わって来ない、という状況がありましたね。

中塚 校長会で文書を校長先生がもらって来られたんですが、管理課等に関することは一切わからなくて、結局その文書を見せてくださいとお願いして、全部目を通したんですよ。すると、仮設電話の番号を管理課報告とか、端末機の操作点検とか、誰に指示を与えるでもなく、そのまんまなんですよ。だから私は自分ができることをの中からピックアップして、報告したんです。

うちの事務室には7名程の家族が、机や端末機を奥へ移動させてできた狭いスペースに寝起きされてて、端末機のテスト期間までに空けて欲しいとお願いしました。教頭先生や班長会の係の先生を通してお願いしたのですが、これがなかなか難しいんです。何回か係の先生から話をさせていただいて、じゃあ今度のお休みには、と言いながら、やっぱりまだ移動していませんかったりしました。私も無理は言えないなと思いつつも、テストができないと困るからとま

た交渉して、ようやくテスト当日の朝、事務室を空けてもらうことができて、テストだけは辛うじて済ませることができたんです。それからも大勢の訪問者がある、色々な仕事をされている、そんな声が聞こえてくる中、自分だけが事務室で座って仕事をすることはできませんでした。2月の終わり頃にならないと、自分の仕事ができなかったです。勤務表か何か提出するよう、言ってきましたね。教頭先生が職員の勤務状況について把握できないのはわかっていたから、自分で表を作って、こんなふうにしたんですが、と教頭先生に相談して処理しました。職員が全員集まることはないし、決まった机がありませんから、ファイルボックスに職員の個別ファイルを作りました。その中に見舞金とかについて事務だよりの印刷した文書を入れて、郵便物もそこへ入れるようにしました。各人が必ずそのファイルを見るようお願いして、いない人へも必ず伝えられるように処理していきました。

司会 他にもこのように工夫したという例はありませんか？

宮松 とりあえず扶養している親が亡くなれば当然何らかの給付がある。勤務したら手当が出る。そこだけは僕らがおさえなあかんと思ったんです。それで家族に亡くなった方はないか、けが人はいないか、という確認と、共済組合・厚生会・共済会・組合からと、給付にしても、貸付にしても、いろんなどころから文書が流れてくるのをできるだけまとめて、もし全壊やったら罹災証明書のコピーが5枚いる、と一覧表にして、職員へ配りました。それと組合のKTUの号外も校正しました。

司会 組合の号外は随分役に立ちましたね。

中塚 組合からの情報で本来は仕事はしないんだけど、教職員課からは何も言ってこないの、こういう勤務になるであろうから取りあえずこうしてくださいって伝えました。

荒木 組合からはFAXか何かで来たのですか？

宮松 号外だけは郵送しました。

山口 一番最初に情報が入ったのが組合からですね。我々としても組合の資料を元に仕事するわけにはいかないけれど、他に頼るものが無くて、頼らざるを得ない状況で、助かったという部分もあるんです。

宮松 市教委には文書にしにくいところもあります。神戸教組としても文書にできないこともあるけれど、匂わすことはできるやろうし、いろんな形で情宣できるやないかと、結構うまく流せたんじゃないかと思ってるんですが。

荒木 行政はおそらく中央官庁との連絡で追いまくられていたんじゃないか、と思います。引切りなしに照会の電話が入っていたようですね。

### 一番欲しかったものは情報

司会 私たちには指示が無くて仕事ができなかったという話がたくさんあるのに対して、荒木さんは指示が無かったが仕事をしていたと、その辺の違い。やっぱり事務職員は指示を待って仕事をするものなのではないでしょうか？

宮松 学校の中で、ものがどこにある、何がどのくらいある、ということが一番よく知っているのは事務職員です。そういう意味で事務職員が一番強い立場にあったと思うんです。例えば避難者がトイレトペーパーがないから買いに

行ってもいいかと聞きに来る。校長に相談したら事務室へ聞きに行けというわけやから。

司会 どこの業者に頼むかということも事務職員が知っていますからね。

宮松 そうそう。水道についても、学校の外までは水道局がしてくれるけれど、敷地内は学校でやれ、と言われる。それを工事でできる業者を知っているのは事務職員やし、今までの付き合いで無理が言えるのも事務職員やし。そこで指示を待たないかんことはないと思う。指示が無いからできないんじゃないかと、自分で判断していかないかんと思う。電算出さないかん言うても出せるはずもないし、そこで今月教育業務20日を出すなら出せばいいし、後で精算すればいいわけやから、その判断は事務職員がすればいいと思う。

司会 それぞれが判断していかなければならない立場にあったし、またそうして来たということですね。

宮松 何でも基本的には指示が無いとできないものはないと思う。職員が学校へ来ている、来ていないの判断は僕らがすることか、と言えば、それは違うと思う。管理職の判断やと思う。それに対するアドバイスは、僕らがしたらいいと思う。

司会 教員にしても、避難者のお世話をこうしなさい、と指示があって動いていたわけじゃない。もっと自立した職業人として動いていたし、また事務職員もそうであったということですね。

宮松 今しないといけないことは、今したらいいだけの話で、事務職員が指示がないからできないというのはおかしいと思う。

山口 もちろんそうなんよ。指示は待てど暮ら

せど出なかったから。ただ僕は防災指令3号のあたりまで神戸市は何も考えていなかったのと違うかな、という思いがあるんよ。

司会 実際そうでしょうね。

山口 地震が起きたらどうするというのを神戸市は、これまで何も考えていなかったのと違うかな。我々が何で一番苦しんだかと言うと、後追いで仕事をしていったことやと思う。特殊業務手当にしても、服務についても、何も決まっていなかった。決まっていたかどうか知らないけれど、我々には何も知らされていなかった。それでもって我々は後追いで仕事をしていった。判断するにしても、やっぱり判断材料がないと。一番欲しかったのは、情報やというところで、僕が一番ひっかかっているんです。

宮松 基本的には僕もそうやと思うんです。でも今回の場合、全部特例なんです。今までに無いことやから、結果的には後追いになったけれどね。これからこれらを教訓としてマニュアルができてくるやろうけどね。こんな大きな地震があるなんて誰も想像していないから、もしそんな事態まで想定したものがあれば、逆にもっとしんどかったと思う。あれは、逆に追っていったから楽だった部分もあると思う。例えば条例にそこまでのことが書いてあったら、もっと大変やったと思う。

司会 教育懇話会から7年10月に中間報告が出されていまして、その中で防災における学校の位置付け、神戸の防災・震災教育の提言がなされています。実際には今までこうやってきたという事実と、こうあったらよかったというこれからの提言とに分けられるんじゃないかと思います。

これからの提言ということで、教訓を生かしてどういふものであったらよかったか、という方向へお話を進めていきたいと思ひます。

宮松 例へば水害があつて、書類が全部流されたといふことがあるかもしれないし、いろいろな状況があるじゃないですか。それらすべてを想定した完璧なマニュアルや条例の制定は無理なんですよね。だから少なくとも今回のような震災がもう一回起きた時にね、どこまでその条例や法律のフォローを僕らができるか、といふことじゃないかな。

司会 現実この中間報告には、学校のできる支援は一週間が限度と書かれています。

宮松 いくら8月20日から避難所から待機所に変つたと言つても、避難者がいなくなるわけじゃない。現在も稗田小にもおられるんですよ。鷹匠中もそうです。

司会 避難所として一週間じゃなくて、学校職員が行う支援が一週間です。だから一週間で防災組織のような体制作りが必要だと提言されています。

大西 学校職員におんぶされない体制作りですね。

司会 たまたま今回の震災は子供たちの在校時間じゃなかったから、教職員は児童・生徒の安全確保に時間を取られず、避難者のお世話ができたのであつて、もし子供たちの在校時間であつたならば、あれだけのことができたかどうかかわからない、と書いてありました。

中塚 私も読みました。実際にはそうかもしれないけれど、現実としてそれだけじゃすまないと思ひます。

大西 無理でしょうね。パニックがパニックを

呼んで、といふ状態が目に見えて想像できますよね。

荒木 僕の想像で言うのですが、神戸といふ都市は洪水対策や治山等については、過去に苦い経験があるから、相当なマニュアルができていたと思ふんですよ。でもこんな地震が来るとは予想していなかつたらうと思ふんです。学校が緊急避難所になる予想を完全に越えてしまつたといふことですよ。だいたい学校が緊急避難所になるといふ想定は一週間ないし10日間なんですよ。ところが今回の震災で予想を遥かに越えてしまつた。

最近知つたことなんです、神戸市の災害対策のマニュアルの中に、震度5以上の地震が神戸市のどこの区で起きて、神戸市職員全員はいかなる方法を講じてもお勤せよ、といふのがあるんです。

山口 新聞にも載っていましたね。

荒木 私は知りませんでした。

司会 神戸市防災計画と言ひましたね。私たち学校が避難所に指定されていても、それを目にしたことがないんですよ。あれはこんなぶ厚い本ですよ。

大西 防災指令が出ていることもですが、近くの学校へ勤務しなければならぬことも、その時は知りませんでした。出勤できるようになつてから、勤務校へ出勤できない場合は近くの学校でもいいと聞いたんです。近くの学校へは避難しに行きましたが、お手伝いには全然行かなかつた。

司会 鷹匠中が緊急避難場所でないなんて知らなかつたでしょう？

宮松 鷹匠は指定された避難所じゃないんです

よ。

**大西** それも知らなかった。学校だから当然避難所だと思ってました。

**山口** 僕は知らなかってもいいと思うよ。ただ震度5で自動的に防災指令3号が発令されて、全員出勤というのを神戸新聞の夕刊で見たんですよ。職員は誰も知らんのですよね。こんな大きな地震が起きて、大方一年が過ぎようとしているのに、未だそういった指示が現場には届いていない。それでいて学校は相変わらず避難所の看板を掲げてるわけですよ。これだけ痛い目に会っても何も対応できていない、というところが理解できへんのです。総てがまだ進んでいないというか。それやのに新聞にはどんどん発表されるのがわからへんのです。

**司会** 神戸市民としてもわからないところがありますよね。

**荒木** 私たちは神戸市のどこの行政区でも震度5以上の地震起きたと報道されるということがあれば、即出勤とされています。

**山口・大西** でも我々学校現場では一切言われていない。

**司会** それはどこで言われたのですか？

**荒木** うちのセンター会議の中で言われました。

**司会** 学校の会議の中で、服務についても勤務についても防災指令についてもはっきりとした明示がなされたところはありますか？

**山口** うちの2月28日ですね。学校の記録に、防災指令3号の勤務について回覧とともに口頭で伝達、と書いてますわ。

**宮松** うちの早かったんです。携帯電話を取りに行ったのが1月30日で、それからすぐやったん違うかな。

**山口** 防災指令3号の解除については、3月の職員会で文書と口頭で校長から話がありました。みんなで知らん間に3号出て、知らん間になくなったな言うて、よく冗談言うもったんですよ。

**宮松** 防災指令については校長からはっきりと聞いたんやけれども、それはそれやと。今、来れないんやったら来なくていい。それは職免になるか、年休になるか、何らかの形で処理する。ただ明日来れないというのやったら、今日言うってくれとは言われました。うちはローテーションを組まないで、来れる人がするという状況やったから。

**山口** うちもローテーション組んだというのも、来れる人の中で泊り当番を組んだんやけどね。

**宮松** 夏休みに日教組の全国事務研究集会で発表させてもらいました。その中で他府県から出る質問というのが、どこまで今進んでいるんや、ということなんです。

**山口** 防災計画なり、マニュアルのことやね。

**宮松** そんなに進んでへん。市教委の代理者やないから言う必要ないけど。うちの学校にも仮設校舎ができたけど、ガス無い、水無い、水が来たのが7月です。それまで毎日水の出るところまで汲みに行って、みんなの飲む分をポットか何かに入れよったわけやから、仮設校舎ができたからみんなOKというわけやないんやと。仮設校舎にもソフトがいるのに、そんなんさえもできてない。防災の考えなんて何でできるねん、という主張をさせてもらったんです。山口さんが今憤りを感じているのは、僕は非常によくわかるし、僕も同じです。実際、市教委はできないんでしょうね。

**山口** 復興計画なりマニュアルなり、今まとめ

ている途中なんかな。

荒木 たまたまうちの管理職研修として、昨年11月の全市校園長会で、総務部長から危機管理について、管理職は日頃から絶えず思いを馳せないかん、という講話があったんです。それが年越えたとたん震災があったわけですが、管理職には少しは危機管理について考える時間があったんやないかなと思います。

司会 いろいろお話ししていただきましたが、是非話しておきたいということがありましたら、どうぞ。

### 子供たちにも大きな負担が

中塚 子供たちがものすごく可哀相だったと思います。

山口 避難所になった学校の子供というのは、ストレスがムチャクチャ高かったと思うわ。

中塚 まず学校がいつ始まるのかわからない。ようやく始まっても、うちは1週間に1回集合なんです。明日のことがわからないから、親から問い合わせがあっても、今はこういう予定ですが先のことはわかりません、としか答えられないんです。全部それなんです。1週間後にも週1回集めるのかというと、水曜日くらいに週2回になったり、来週からじゃあ週3回にしようか、と変わるんです。3教室しかないから、午前と午後で学年を分けて1時間30分ずつ取りあえず授業をしました。授業になったかどうかは別にして、それが最後まで続いたんです。一番問題になったのが遊び場でね。運動場にはテントもあるし、自家用車もかなりありました。自衛隊のお風呂もあったでしょう。自衛隊がい

てくれたから助かった部分もあるんですけど。3月31日で自衛隊がすべて引き上げて、その時点で運動場は空きました。けれど、教室が使えないから4月以降も子供たちは、一度登校して15分歩いて原田中学へ行って、授業が終わったらまた稗田へ帰ってきて解散する毎日だったんです。終業式には低中高一人ずつ子供が1学期の反省や思い出、2学期へ思うこととか言うんですけど、その中で5年生の子供が、稗田へ来て、原田中学へ行ってすごくしんどかったと発表していたんです。可哀相だったな、学校の子供たちみんなしんどい思いをしているなあって思ったんです。

司会 若菜小も今校舎を間借りしていますね。

大西 これは震災のためではないのですけれど。震災当時、講堂の天井が落ちたんです。そのため避難者を講堂へ入れることができませんでした。それが結果的には良かって、応急措置をして、卒業式も入学式も講堂で行うことができました。校舎はもともと古かったのですが、壁の亀裂が壁の内側深いところから入っていて4年と5年の教室が危ないと言われました。渡り廊下も亀裂が入ってはずれました。特に貯水槽の傷みはひどくて、水道は1週間くらいで復旧したのに何度も断水して、8月のお盆頃にいきなり亀裂を生じて大噴水、大洪水を起こしていました。

司会 避難者の数が多かったのも、子供たちには随分負担がかかっていたのでしょうか？

大西 小規模校なので6教室あれば一応全校一斉授業ができるのですが、その6教室を空けてもらうのが難しいんです。交渉して少しずつ別の部屋へ移動してもらって、ようやく3階だけ

を空けてもらいました。音楽室も音楽準備室も普通教室として使用して、ギリギリの状態が続けました。

## 人間対人間の助け合い

司会 今回の座談会は記録がねらいですので、あったことをありのままにお話していただければ十分なのですが、避難所の最前線で携わってきた者として何かありましたら。

荒木 震災直後、当時世界中の報道の中で、あれだけの大災害があったのに、神戸というのか日本人はというのか、暴動もパニックも起きなかった、という報道がされていました。そのところには日本人の勤勉さや民族性とかいろいろあると思うんですが。僕は灘区の学校3つ回ったんです。3ヶ月の間に小・中・高と。事務職員を含めて学校職員の対応がすごく良かったんです。どなたも僕は教育者やからとか学校職員やから、区役所の対策要員と違うから区役所へ行きなさい、とは言わなかった。その場その場でいろんな形で対応されていたのを見ていました。逆に区役所の職員が話をするより、学校の教職員が話してくれた方が住民の皆さんにはスーッと耳に入っていく場合もあるんですね。

司会 地域と共に実践してきたという気持ちもありますよね。

荒木 小さなトラブルはたくさんあったと思うけれど、大きなパニックにはならなかった。これは学校の職員の力が大きかったんじゃないかと思います。僕が3ヶ月回らせてもらった中でつくづく感じたことです。皆さんも大変だったと思いますが。

宮松 今まで開かれた学校というのが、うちの場合開かされてしまったわけですが、これからも開かれた学校の事務職員として対応していけるかな？ というのが一つあります。今日の話聞いても、鷹匠中の教職員やなかったら何も思わなかったやろうし、取材が来ても事務職員やとはっきり言うて話をさせてもらってきたし、だから事務職員としてこれから開かれた学校に対応していけるかどうか、というのはこれから非常に大きな課題やないかと思います。

荒木 あってはいけないことですが、もしまた災害が起きたとしても学校が避難所になるでしょうし、これからますます学校が避難所としてどういう機能を備えていくのかというような計画提言も出てくる可能性もあるでしょう。ということは、学校はより地域社会に近く、そこに勤務する教職員の皆さんですから、これまで以上に大きな役割を求められる時が来るんじゃないかと思います。結局、人間関係ですからね。人間対人間がお互いどう助け合っていくかというところですから、皆さんに対する期待は大きいんじゃないかと思います。

司会 本日は本当にありがとうございました。以上で終わらせていただきます。

(編集校正 菊水小学校 嶋中真理子)



# 神戸からの電子メール

福住小学校 木村 信哉

## はじめに

今回の震災では、ほとんどあらゆる情報手段が閉ざされてしまった中で、PC-VANやNIFTYといった大手のパソコン通信によって、家族や知人の安否が確認されたという報道を耳にした事もあると思います。そして、私自身もまたその当事者となりました。

ここに収録した文章は、私と東京都杉並区立の養護学校事務職員「本川氏」や全事研の「学校事務電算化委員会」の仲間たちとの地震直後の電子メールでのやりとりです。本川氏が、9月1日の防災の日に知人たちに配布するべく再構成したものを、今回投稿するに当たってさらに私が編集を行いました。

本川氏とは10年来の間柄です。また、最近では平成3・4・6年度の文部省の委託研究「学習用ソフトウェアの開発改善等」に全事研の学校事務電算化委員会のメンバーとして参加（本川氏は全事研ではなく「日本教育工学振興会」会員として参加）していました。

本来、電子メールは委員同士の連絡やプログラム交換を目的として行われていたものです。非常時であったとは言え、このような目的で使用する日があるとは、私たちの誰も想像しなかったことです。また、このやりとりも私たちの小さなグループ内の私的なもので、公開を前提としたものではありません。従って、表現等に違和感を感じる部分が仮にあったとしても、ご容赦を願います。

電子メールは今も続っていますが、一応夏休みを一つの区切りとしました。その「時点」でのそれぞれの意見としてお読みください。

随分長い読み物となってしまいましたが、貴重な機会を提供してくれた研究会に感謝します。

## ☆お見舞い

「本川氏」から「木村」宛

1月17日 10時53分

お見舞い申し上げます。

今朝、三宮辺りの惨状がTVに映し出されて、非常に驚いています。

知り合いが洲本実業高校にもおり、そちらも心配ですが、貴方の方はいかがですか？

とりあえず、お見舞いのメールです。学校も古いのでそちらもどうなっているかと……それでは。

## ☆木村さん大丈夫？

「本川氏」から「元全事研電算検討委員（以下元委員）」宛

1月17日 20時53分

朝のニュースを見た時点では、亡くなられた方が1000人を越える大惨事になるとは思っていませんでした。ただ、地下鉄の駅が電気が消えているが電車が走っているかどうか分からないという状況が報告されていたので、かなりの大規模な地震だと思っていました。

取り合えず朝の時点で地震のお見舞いのメールを出しておいたのですが、帰宅してその惨状が明らかになり、東海沖地震が心配される関東

地域に住む者としてとても他人事には思えない気持ちで、TVの映像を見入っている次第です。

木村さんは大丈夫なのでしょう？ 彼の学校は老朽化した学校だと記憶していますが、学校も心配されるところです。避難場所にでもなっているのでしょうか？ お見舞いを申し上げるとともに、何らかの形での援助が可能であれば各位と協力していきたいと考えております。

#### ☆神戸地震見舞について

「丹治氏（元全事研電算委担当理事）」から  
「元委員」宛 1月17日 18時40分

1月17日早朝の地震は、神戸を中心に物凄い被害（死者2000人にもなろうという）をもたらしています。午前と午後に内田さん、野村さん（それぞれ元電算委員）から連絡がありました。木村さんの様子について本当に心配です。

御自身・御家族については、無事であると思いますが、お住居や職場のことで多忙を極めている中では、とても電話差し上げることも出来ません。とりあえずMAILでお見舞と、出来ることを手助け差し上げたいと思います。MAIL自身は電子私書箱ですので、電話・FAXと異なり直接木村さんには御迷惑とはならないと思います。但し通信回線は、現在大変混雑しています。

#### ☆木村さんの無事を祈る

「山田氏（元電算委員）」より「本川氏」宛  
1月18日 20時14分

MAILを送っていただき、大変ありがとうございました。木村さんの安否が非常に気になるのですが、本川さんの方で何かわかりましたら、また教えて下さい。

何の力にもなりません、木村さんの無事を

祈っています。

#### ☆FAXは通じました！

「丹治氏」より「元委員」宛

1月20日 7時24分

1/19早朝に、神戸市立福住小学校にFAXを入れることが出来ました。但し、返事は頂いておりません。電話、電気は通じたようですが。

現在、返事するような状況ではないかと思えます。

これしか分かっていません。

☆「山田氏」がNIFTYの「地震関連掲示板」に登録した文書 1月21日 10時20分

灘区福住通りの神戸市立福住小学校事務職員木村信哉さんの安否がわかりましたら、メールをください。

#### ☆木村氏の安否確認

「山田氏」より「元委員」宛

1月23日 17時46分

ご無沙汰しております。

ニフティサーブを利用して、神戸の木村さんの安否がわかりましたので、お知らせします。奥様が福住小学校に勤務されている〇〇さんという方から私に届いたメールを下記に転載します。とりあえず元気だとのことですので、一安心です。

それではまた、連絡いたします。

#### ☆福住小学校の情報

「芦屋市在住：〇〇氏」より「山田氏」宛

1月23日 11時28分

山田様、〇〇と申します。芦屋市に住んでおります。妻が、福住小学校に勤務しております。木村様には、お世話になっているようです。芦屋市も、甚大な被害で、現在、大阪の私の実家

に避難しております。妻は、ようやく今日から福住小学校の方へ出向くようです。到着するのは、いつになるかわかりませんが、状況は、できるだけ早くお知らせします。

☆福住小学校 木村氏 続報

「芦屋市在住：〇〇氏」より「山田氏」宛

1月23日 15時51分

山田様たった今、妻より現地入りの報告が入りました。木村さんは、元気だそうです。ご安心下さい。ただ、パソコンが動かないそうです。かわりにメールを……ということで、メールさせていただきます。

(以下略)

☆山田さんの努力に感謝・木村さん無事に安堵

「本川氏」より「元委員」宛

1月24日 7時16分

木村さんが無事であるとのこと、ひとまず良かったと思います。

彼とはポートアイランドにある港島小学校に勤務していた頃からのつきあいです。10年近くになります。まだ神戸の電算システムが動く前の港島に1回、現在の福住に2回おじゃましています。遠隔の地にいるとはいえ、彼とのつきあいは長くまたご厚情をいただいています。その意味で今回の山田さんからのメールは、非常に嬉しかったです。5千人を越す犠牲者、そして体力的にも精神的にも限界にきている30万人の被災者、その中で木村さんはあの包容力で復興に全力を傾けられていることと思います。無事を祈ってきたわけですが、これからは彼のそうした活動にかけながら応援していきたいと思えます。

私の学校でも教職員やPTAが、街でも、そ

して勤務先の自治体(杉並区)でも義援金活動が始まっています。いま私たち旧電算化検討委員にできることは何か思い浮かぶことが具体的にはありません。さしあたり私は山田さん経由のメールで感じたのは、木村さんのコンピュータを回復させてあげたいということです。2月に研修会を東京で行いますが、その謝金は少なくとも木村さんへのカンパにしたいと思っています。今はそれくらいしか思いつきません。もう少し事情が好転したら今はあまり使っていないパソコンを送ることも考えられますが……。

とにかく山田さんの努力に感謝し、何より木村さんの無事を喜びたいと思います。

☆無事です

「木村」から「山田氏」宛

1月24日 13時22分

山田様

芦屋の〇〇氏からMAILのFAX送っていただきました。ありがとうございました。家のコンピューターが使えなくなり、学校のコンピューターは床に投げ出されながらも健気に動いてくれたのですが、FENIX(※ニフティに接続するための受付電話—木村注)も神戸ポイントは故障らしく、今大阪経由でアクセスしています。皆様にご心配をお掛けしました。そして、ありがとう。

住む家は失いましたが、夫婦二人に猫1匹無傷で無事です。とは言うものの、私は数カ所に名誉のかすり傷があります。瓦礫に埋まった人を素手で掘り出したときのものです。

報道の通り、プロであるはずの行政は全く機能せず、素人である私たちは、命辛々逃げ出した5分後には、覆い被さるブロックを、瓦を、

柱を、速く速くと声を掛け合いながら手で取り除き、わずかな隙間から人を掘り出しました。一つ間違えば、掘り出されているのは自分だと震えながら。全く遠くの行政より近くの他人です。

今は、西宮市に避難していますが、このあたりも被害が大きく余震に怯えています、いえいえ私ではなく猫が。

家も、コンピューターも、お気に入りのオーディオセットもCDも、本も絵も、ダイビングのビデオも何もかもなくなりました。

でも生きています。カネで買えるものは多く失いましたけれど。カネでは決して買えないモノ、命と皆様からの温かいメッセージ、を得ました。ありがとうございます。本当にありがとうございます。

今は、学校も避難所で大混乱（体育館、教室はおろか玄関ホール、事務室の戸の前まで布団が占拠している有り様）しており、時間が取れませんが落ち着きましたら顛末記などアップしたいと思います。乞うご期待。取り急ぎ。

☆連絡有難うございます。

「丹治氏」より「木村」宛

1月26日 6時32分

災害に遭われた中での通信、家財の損失の中幸いにも御家族とも無事であったとのこと、何とも複雑な思いです。

いろいろな疑問が沸いてきます。現在のお住まいの状況は？生活費は？着替えは？通勤方法は？授業再開するというのが被災された方々との調整は？職員・児童の被災状況は？etc。

昨日東京都教育委員会からの文書（FAX）で「被災児童の転入に際しては教科書給与証明がなくとも、直ちに支給する旨」の通知があり

ました（あっただけです）。通常の避難訓練など全く役には立たないことは十分に分かりました。

当分MAILのみにします。（元電算委員の皆様にもそのようにお願いしてあります）。

くれぐれも過労になりませぬように。

（以下略）

☆頑張っ

「二見氏（元電算委員）」より「木村」宛

1月26日 9時44分

木村さん、ご無事で何よりでした。地震の翌日から丹治さん、本川さんからメールを頂いていました。何もお手伝いできなくて済みません。災害復興にご尽力されている様子を読ませていただきました。涙が出るようです。報道機関は毎日毎日大震災のことばかりです。木村さんの毅然としたお考えに脱帽です。

とにかく頑張ってください。

☆コンピューター

「本川氏」より「木村」宛

1月28日 20時22分

さぞご不自由でご心労な日々を送られていることと拝察します。

そうは申しても、遠隔の地にいる私にとっては各種の義援金の募集に僅かばかりのものを送る程度で、具体的に何ができるというものでもありません。どうか、率直に何が足りないと言ふような申し出をしていただければ何某かの努力をいたしたいと考えています。

こんな時期に何をコンピューターとお思いかとは存じますが。当座の各種業務の手助けになればと思い以下の品を用意しました。（機種列挙略）

まだ、郵便や宅急便の事情が好転せず送付は直ちに困難かとは思われますが、もしメールが読め、送付が可能となっていたら教えてください。たいした機種を用意できず、力不足でごめんなさい。

#### ☆阪神大震災顛末記

##### 「木村」より「元委員」宛

1月30日 11時55分

起きる予定の時間は過ぎたけれど、連休明けの気のゆるみか、それとも5時過ぎからいつになくうるさく鳴く猫に睡眠の邪魔をされたせいかな、ベッドの中でぐずぐずしている時にそれは起きました。

ゴンとかドガンとかいうような鋭くはないけれど大きな音がして、いきなり体を引きずり降ろされた、あるいは突き上げられたような感じがしたと思うと、家全体が激しく揺さぶられて、ベッドにしがみつかなければ振り落とされるようなすさまじい動きになりました。あっと言うまもなく、とてつもなく激しい物の壊れる音がし、立っているものはすべてなぎ倒され、戸棚は開いて中のものは飛びだし、部屋を仕切る戸ははじきとばされ、廊下へのドアはゆがんで開かなくなっていました。

一瞬のようでもあり、とんでもなく長い時間だったようでもあった揺れがおさまるやいなや、とにかく「もう一度揺れたら終わりだ!」と、立たない腰と折れそうになる膝に無理矢理力を入れて起きあがり、真っ暗闇の中すくむ足に無意識にスリッパを引っかけて、倒れた何かを踏み越えて隣の部屋でうずくまる猫を鳴き声を頼りに抱き抱え、1階に降りました。

階段を足探りで降りると、靴や置物が散乱し

た玄関で何かがポッと光ってすぐ消える。近づくともた光ってすぐ消える。もしかして火が出たか? いや玄関に火の気はなかったはずだから、何かの異変かと、おそろおそろ近づく内にハタと気がつく。これは通称「お迎えライト」で、外から帰ってきた時等動きに反応して数秒間点灯するライト。急いで拾って、消えては振って照らしながら階段を引き返して懐中電灯を取りに戻りました。

明かりを手に再度1階に降りると、驚いたことに家が激しく傾いていて玄関のドアが開かない。肩から思いっきりぶつかってみるけれどビクともしない。振り返って右の部屋に通じるドアに手を掛けるがこれも、大きく傾いていて開かない。裏口に通じるダイニングのドアもノブさえ回らない。窓は、鍵がはずれて開いてしまっているが、格子が邪魔で出られそうにない。家の傾きが大きくなりつつあるのか「ミシ」とか「ビシ」とか音がする。今にも余震がくるかも知れない。こなくても、すぐにも倒壊するかも知れない。ほとんど反射的にダイニングのドアを思いっきり蹴った。

案外簡単にドアは蹴破れたけれど、懐中電灯で照らした室内の散乱は、これ以上の混乱はないほどで、あらゆる家具は倒れ、あるいは投げ出され、押入は戸が外れてどこかに飛んでしまい、冷蔵庫は前に傾いて、食器も食物も書籍も、すべてのものが床に投げ出されていて、文字どおり足の踏み場などありません。しかし、裏のガラス戸もはじきとばされていて、ライトは隣との境のブロック塀をダイレクトに照らしています。「出られる」、迷うひまもためらう余裕もあるはずがなく、踏み蹴散らしながら裏口へ。

ところが何と、隣の家の1階が完全に崩壊して下がってきた2階が邪魔をしてブロック塀になかなか上がれない。上がればここから出られる、上がれなければ閉じこめられる、と必死で試み、結局腹這いのような格好で、何とかブロック塀に登り、そのまま四つん這いで進み、駐車場に降り、通りに出ることができました。地面に足が着いたその時、生きているという実感をようやく感じることができました。

外に出るとすでにガスの臭いがしていました。また、街灯の消えた町は不気味ではありましたが、それでも家から外に出ることができた安心感は何物にも代え難いと思ったほどです。しかし、まだほとんどの人影が見えません。あまりに急激な振動で、崩壊を免れた建物も著しく傾いていたりして、ドアが開かないらしく、出口を探すのに必死の様子でした。隣に声を掛け、向かいに声を掛けて内と外とで無事を確認している内に、ようやく脱出できた人たちが通りに出てきました。左隣の夫婦は寝間着に素足で震えていました。向こうに見える人はやはり寝間着で、ほとんど倒壊した自宅を呆然と見ていました。裏手では、私たちと同じ時期に引っ越してきた2階建ての家が、まるで真上から100トンもの鉄槌で叩きつぶしたように完全に崩れ、路上に駐車していた車を押しつぶしていました。その内、「ここには誰それが埋まっているはずだ」という声が聞こえて、私たちも駆けつけ、原形を全くとどめない木造住宅の崩壊の現場に驚きながらも、素手でブロックをどけ、瓦を除き、柱を持ち上げ、隙間とも言えないようなわずかな空間に閉じこめられている人を引っ張り出しました。

ようやく、あたりが明るくなって、視界が拡まるに従っての惨状はよくご存じの通りです。ただ、近所に限って言えば、昨日までの姿を知っているが故に、余りの変わり果てた姿に涙が出そうでした。路面はめくり上がり、大きな亀裂があちこちにあり、電柱は根本から折れ屋根をつぶして道を遮り、電線は垂れ下がり、ほとんどの石垣は崩れて、大きな石がごろごろと転がり、ブロック塀の多くが倒れ、道路は瓦礫で塞がれて、付近を歩くこともできない有り様でした。その中を成す術もなく寒さに震える人々が、呆然と廃墟を見ていたり、誰かあるいは何かを探すのか、力無く歩いたりしています。中には顔や手や脚にけがをした人も少なからずいます。

私は、今まで不思議でした。テレビで見たりする例えば紛争地域のけが人たちのあの悲壮さが。今回ようやくわかりました。無一物で放り出されたけが人は、流れる血を拭う何物をも持っていないのです。あるいは、拭うことさえ意識にないのかも知れません。覆う物のない傷口から流れる血は、顔を、腕を跡を残しながら流れ、地に滴るのです。中には重大なけがの人も居たのかも知れませんが、大丈夫かと声を掛ける他は誰も何もなし得ません。

信じたくなくても事実は事実です。今にも倒れそうに「く」の字に傾いた家を見、屋根に瓦を積み重ね窓ガラスの割れた車を見、足下はと言えば素足にスリッパ。手には懐中電灯以外は何もありません。安否が気になる人は多数いますが、パジャマのポケットにテレホンカードや小銭をいれておく習慣があるわけでもなく、電話のかけようもありません。しかし、無力になっ

ている暇もありません。明るさと暖かさが増すに従って、先の不安よりも、今やれることをというわけで、脱出したのと逆のルートを辿って、一人で家の中へ引き返し、1階のものはあきらめることにして、傾きの増した階段を上がって毛布といくらかの衣服と仕事用の鞆をとり、玄関から靴をとって急いで外へ出ます。

停電すればテレホンカードは使えない。小銭が一杯になれば公衆電話は使えなくなる、ということに気付くのは私たちだけではなく、すでに電話の前には長蛇の列で1時間半待って、ようやく各方面に連絡が取れ、同様に被害を受けたけれど、かろうじて建物は残っている西宮の親戚のところに取りあえず身を寄せることになりました。そうと決まれば、多少の危険があるとしても、家の中から当座の衣類等は持ち出したい。長居は危険だからと、小刻みに家の中に入って、寝具等を車に詰め込み、猫も乗せ、さあ出発という段になって、何と瓦礫で八方の道がすべて塞がり、幹線道路にどうしても出ることができません。家からは脱出することができましたが、今度は地域に閉じこめられた訳です。

再び途方に暮れる私たちに、向かいのお宅から、中庭に火を燃やしていますから暖まってくださいとのありがたいお誘いがあり、結局その夜は、その中庭で過ごしました。夜明けには手水鉢の水が凍るほどの寒さの中、余震の恐怖に怯えながら、収まらない火事の炎が夜空を焦がし、緊急車両のサイレンが鳴りっ放しの中、3家族7人と犬2匹猫1匹がバーベキューこんろと七輪の火を頼りに、文字どおり身を寄せ合い、一睡もせずに過ごしました。

夢であって欲しいと願いつつ、一夜明けても

事態は一向に好転せず、外部からの機械力は届きそうにありません。消防車も救急車も自衛隊の車両も何も私たちの身近にはやってきません。このままでは、今夜もまた野天で過ごさねばならないのかとあきらめかけた頃に、聞こえるのです。キュルキュルというキャタピラーの音が。小型のブルドーザーが1台瓦礫を自らが通れるだけの幅に押しつけながらやってきます。そして、1時間ほど作業して倒壊した家から一人救出し、あとは見向きもせず、もと来た道を引き返していってしまいました。もう少し幅があれば何とか乗用車も通れるが、このままでは、どうしても狭い。しかし、とにかく出たい。じっくりと見てみると瓦礫に乗り上げ、突起物に当たって車が傷ついたとしても1カ所を除けば、何とか通れそうな気がする。しかし、その1カ所は1階が完全に崩壊して、まさしく2階が1階になってしまったアパートで、柱や鉄骨がかなり道を塞いでいる。時刻はもう午後4時であり、外部から次の何かが来ることは考えられないし、暗くなってしまうとこの狭い中を通り抜けるのは不可能になる。急ぎ、そのアパートの所に行き、柱を右に左にと揺すりながら動かし、鉄骨を少しずつ少しずつ横にずらし、散乱した家財道具などを脇にどけわずかに隙間を拡げました。この潰れた1階には、人が埋まったままかも知れないと思いながら。

ほとんど10cm刻みで車を前進させ、幹線道路にたどり着いたときには全身は汗びしょりであたりはもう暗くなっていました。とにもかくにも、天下往來の自由を得た喜びは大きいもので、西宮まで8kmの道のりを9時間かかる大渋滞も苦になりませんでした。とは言うものの、

幹線道路の混乱は想像を絶しており、当然信号は消えていますから、交差点は我先にと進入する車やバイクで身動きもなりません。歩道は各所で倒壊した建物によって遮断され、歩行者も自転車もバイクもすべてが車道を通ろうとします。その車道は緊急車両がけたたましくサイレンを鳴らし、それでもよけられない車などをマイクを大音量にして注意しながら逆走する。救急車両を通そうと少しでも間隔を開けると、その隙間に人、自転車、バイクが頭を突っ込んでくるという有り様で混乱の極みです。深夜にようやく西宮に到着しましたが、ここもその建物はかろうじて立っているけれど瓦は全部落ちていて、あたりは倒壊した建物だらけという何とも心細い限りです。しかし、ようやく屋根の下で眠ることができました。

行政の対処の遅さは報道以上です。信じられないでしょうが、1日目(17日)には食料も水も毛布も何も配布されませんでした。地震の規模や被害の状況を知らされることもありませんでした。そもそも夕方まで救援に来たらしい人を見かけることさえなかったのです。2日目(18日)の午後になってようやく乾パン(平成4年製造,平成7年3月期限,5枚115g)が一人に一個で2回ほど配られただけです。水は、避難所の中学校の自主的な判断で、給水槽の水が2日目の午後に配られました。それも、避難所の中に居なくては何がどのように配られるのか分からないのです。私たちは、避難所の中にはいませんでしたが、たまたま人が集まり始めているのに気付いて、校庭を1周する列の後ろに並び、乾パンを1個もらい、次に水が配られるらしいことを知ったのです。私たちは向かい

のお宅の容器を借りて水をもらいましたが、列には、紙コップ一つ、湯飲み一個あるいは缶ジュースの空き缶一つしか持っていない人もいました。当然です、一瞬にして崩壊した家から何が持ち出せたというのでしょうか。生きていて、自らの脚でこの列に並ぶことができるだけまだまだ、とでも思わないと救われないような光景でした。トイレにいたっては、校庭に穴を掘り、ベニヤ板を横にして下半身部分だけを囲ったものが、女性用なのです。男性用はありません。

救援も、初日の午後3時くらいに警察官かも知れない人をチラと見かけましたが、誰かが「あの瓦礫の下に人が居る」と訴えても、何をやる風でもなくいつのまにか居なくなっていました。その日の夕方近くに建築関係者らしい数人が手動の工具を持って、瓦礫の下から一人救い出しました。すぐ隣の瓦礫の山の下にも人が居る、と誰かが言いましたが「この道具では無理だ」とか言ってそのまま立ち去りました。この人は、前述のブルドーザーによって翌日救出されました。まとまった人数の救援隊を見たのは2日目の午前9時ぐらいで、和歌山県の田辺市の消防隊員で、彼らも装備が十分ではないらしく、状況調査は行ったようですが、具体的な救出作業を行った様子はありませんでした。自衛隊員を見かけたのは私たちが地域を脱出する直前でした。

頭上には、うるさいほどにヘリコプターが飛び交っていました。1日目の近くの市場あたりの大火の際には、ヘリの機体が炎の赤さに照らされるほどの高さの所を何台も何台も何時までも飛んでいました。安全な所から、ただ見下ろすだけの彼らは、一体何なのだろうかと思いつ

つ、しかし私も当事者でなければ、彼らが見せ、語りかける内容に頷いているのだろうとも考えました。

今回の件で学んだことは多分多くあるべきなのでしょうが、今は思いつきません。ことが起こってからの学者の訳知り顔の解説にはうんざりしています。うちの猫でさえ、ことの起こる45分くらい前には異常を察知していた(?)とすれば、彼らは猫以下です。現代の科学でさえ予知が不可能なのは周知のことですから、あたかも被災者の地震への準備不足が、災害を招いたと取られ兼ねない発言は慎むべきでしょう。どこかのニュースキャスターが、最低3日は自給自足できる覚悟と準備を持ってないからだと言い、隣の知事が、被災者は自分で飯を炊いて喰えだのと言ったそうですが、こんな時にこそ人の人らしい値打ちが計れるものかなと、1日半ぶりにもらった紙コップ一杯の水をこぼさないように、こぼさないように寝間着姿のまま歩く人の姿を、同じ列に並んで見た私としては思います。また、通称「とんちゃん」は、「早朝の出来事」「初めての経験」だからと国会だか記者会見だかで言ったそうですが、天災が時を選ぶなどとは聞いたこともありません。ましてや、プロそれもトップならば未経験の事柄にこそ、知識と決断力を生かして今要求されている行動をすべきであって、経験を積んだ事柄にしか反応しないのでは、パブロフの犬です。

さて、正直なところ西宮も余震や、水道・ガスの件もさることながら、しばらく人が住んでいなかった所なので生活に少々不便が多く困っています。しかし、まあ避難民ですから今は、避難生活を楽しもうと思っています。23日から

は、鉄道代替バスが動き始めましたので、往路2時間復路3時間の超満員バスで出勤しています。学校の所在地である灘区も被害の大きな所で、学校は当然避難所です。丁度本校は改築中で、体育館と管理棟、9教室ほどが12月26日に改築を終えた所で、残りはプレハブの校舎が建ったところでした。プレハブ校舎は地震で大分痛めつけられましたが、新築の部分はさすがに外部は無事で、ここに避難者が集中しています。児童数の倍以上の1500名近くが避難してきますから、先日もお知らせしましたように、建物内は足の踏み場もないほどで、事務室の前のコンクリートの床にも布団が敷かれています。すぐ近くの学校では、事務室の中にまで避難者が入り込んでいるそうですから、本校はましといえまします。従って、出勤といっても自分の仕事をするわけにもいかず、ボランティアや教員と一緒に避難者のお世話をしています。大体、市役所が大きな被害を受けておりコンピューターも動いて居ません。県庁も同様で、書類のやりとりもできませんから仕事らしい仕事のしようもないのです。

始発のバスで出勤する代わりに3時くらいには退勤しており、学校で朝飯、昼飯と済ませ、晩御飯を貰って帰り、おまけに、防寒衣も、カセットコンロも、靴下下着までも避難者と同じようにもらって、ちゃんと生活しています。お風呂は、知り合いを渡り歩いてしのいでいます。最近は何をするのも列で、通勤のバスは、大体40分位並びます。そろそろ銭湯も水の出る地域では回復しているそうですが1時間待ちとか2時間待ちとかだそうです。先日は、仮住居の申込に並びました。何と書類を貰うのに1時

間、受け付けるのに1時間、それで確率は1%以下だそうです。今日は、家屋の取り壊しの申請に行こうと思っていますが、昨日は4時間待たされたそうです。スーパーなどの営業も場所を駐車場などに移して部分的に始まっていますが、まだまだ並んで買う状態です。生活にかかる時間が多くなる分他のことができなくなるのですが、「生きているんだなあ」と結構充実感があります。と、考えるようにしています。

状況が落ち着くにしたいが、自分自身の被害の大きさに今後の心配も増していますが、いいこともあるさ、と開き直っています。そう言えば、あきらめていたコンピューターですが、すべてのマニュアルと本体はクラッシュしてしまいましたが、多分ハードディスクの内容は取り出せるかも知れません。慎重にはずしてみるつもりです。オーディオセットもスピーカーだけは使えるかも知れません。CDも何10枚かは拾いました。自家製の梅干しも無事でした。被災現場を片づけながら、何本か無事だった自家製ビールで乾杯しましたが、ちょっと苦い味でした。

40数年生きてきて、今回ほどみじめで悲惨だったことはありませんが、同時に電子メールを拝見したあの時ほど嬉しかったこともありません。ありがとう、皆さん。

#### ☆木村さんのメールに衝撃！

「本川氏」より「木村」宛

2月1日 13時19分

木村さんのメールは衝撃的でした。沢山の人の見てもらいました。私のNIFTYの友人達には直ちに原文のまま転送しました。学校では、印刷をして配布しました。

NIFTYで送ったJ A P E T（日本教育工学振興会）に出向している富士通の部長さんもみんなにメールを回覧していると電話をしてきました。木村さんのメールの感想は、改めて衝撃を受けたの一言につきます。

（中略）

最後に私の友人からのメールを紹介します。

『顛末記ありがとうございました。如何に地震が恐いか又準備すべきものは何かがよくわかりました。この方は文章がうまい。引き込まれるように読ませていただきました。神戸生まれとしてこの思い忘れまいと思います』。

#### ☆電子メールの反響（一例）

「久山氏（日本教育工学振興会）」より「本川氏」宛

パソコン通信により、木村先生の便りを載せたら、各地から便りが届き、ニフティ社からも、フォーラムに載せてよいかとの連絡もありました。木村先生の記述が建築関係者には大変興味のある情報であったようです。災害後の建物の破壊状況から多くのヒントが得られるようでした。木村先生にも連絡したら、掲載することを快く承諾してくださいました。何かの役に立つならばとの返事でした。

また、会社関係者からも、あの事故の状況の中であれほど克明に記述できるのはたいへんな記憶力と文章力だと評価しておりました。木村先生にも宜しくお伝えください。

☆お元気でしょうか。

「本川氏」から「木村」宛

2月8日 10時2分

避難生活も長期化するにつれ、疲労も蓄積され極限状況になっているのではないかと心配で

す。昨日東京小学校支部と東京都公立小学校事務職員会の共催の研修会の打ち合わせで丹治さんと会いましたが、話は木村さんの話題に集中しました。特に木村さんの持病が悪化しないかと心配しています。

(中略)

また、研修会の様子などメールします。

P.S.木村さんの電子メールによるレポートは私の知る限りでも（理振関係者以外）50人以上の方が読んでいます。中には職場で回し読みしている事務職員もいます。文章の素晴らしさからでしょうか、生の実状が迫ってくるものがあり、改めて被害の大きさに思いを寄せてみなさんいらっしゃいます。

#### ☆西宮から近況報告

「木村」から「元委員」宛

2月10日 5時58分

早いもので地震から3週間が過ぎました。相変わらず混沌とした環境ですが、それなりに安定しつつもあるようです。福住小学校では、避難者が名簿ベースで1000名を割り、夕食ベースで700名、昼食ベースで400名程度になりました。今週から学校再開に向けての環境整備ということで、避難者の生活空間は体育館か教室使用を基本とし、廊下や玄関で過ごす人はほとんど居なくなりました。事務室前の住人も体育館に転居していただいたので、事務室への出入りも寝ている人を起こしたり、布団を片づけていただく必要がなくなったので、心理的に随分楽になりました。

教委のコンピューターも8日から時間限定で稼働が可能となりました。役所との文書連絡は、未だにいつ着くのかわからない郵送のままです

が、徐々に増加しつつあります。

私はといえば、相変わらずいつ倒れるのかわからない西宮の家、そうそう、テニスの沢松嬢宅のすぐ近くです、から通勤しています。ほとんど毎日のように通勤ルートは変わっています。昨日は阪急バス、今日は阪神電車が青木まで通じたからそれに乗って、明日はJRが芦屋まで通じるからJRでそこまで行って、来週は阪急が御影・王子公園間が再開するそうだから、JRで住吉まで行って、そこから代替バスで阪急御影、それから阪急電車かなと考えています。もちろん最も信頼できるのは自らの足で、バスを待つのに2～3時間待ちはざらですから、10kmぐらいいは歩いた方が速いのです。併せて、この機会に少々やせようとせいぜい歩くことにしています。被災者の中にはあれ以後喉にモノが通らないという話も聞きますが、私は全然そんなことはなく、本来好き嫌いも全くないので、とにかく体力勝負と3食きちんと食べています。お気に入りの食べ物はありませんが、量だけあります。強いて言えば野菜類が不足しがちです。酒量も減っていませんが、今は風邪気味というぐらいで、体調は良いようです。水道もようやく回復しました。ガスはまだですので、入浴は知り合いを渡り歩くか、数少ない銭湯に並んでいます。これも最近はましになって、1時間ほどで何とか入場できるようになりました。

私の住んでいた東灘区はあちこちで壊滅状態のようです。未だに大部分が整理の目途もつかないまま放置されており、道路を塞いだままになっています。先日来随分と神戸の街を歩きましたので、その様子も機会があればレポートしたいと思います。ほとんど泣きたくなくなるよう

な惨状です。

今、職員室から朝食の用意が整ったとの声がかかりましたので食ってきます。

とり急ぎ。

☆元気がなにより

「本川氏」より「木村」宛

2月16日 6時48分

最初にまずまずという状況を喜びたいと思います。

徐々に復興の方向に歩みだしつつある様子を木村さんのメールからも読むことができます。毎日の新聞やTVとは違った角度でのメール内容は、深く惹かれるものがあります。特に学校関係者としては、学校の克明な様子は非常に参考になります。

私は養護学校にいますので、養護学校の実状というものが気になります。先日学校で神戸の附属養護の新聞がコピーされて配布されました。その表現は比較的穏やかなものではありましたが、やはり惨状は相当のものと思わせる表記がみられました。なかなか映像や新聞で養護学校の様子は伝わってきませんが、通所施設の場合そこへの通所者の家族が避難している様子などが報道されています。養護の子供はパニックになっていないのか、施設や職員の確保がなされているのかとても他人事とは思えません。

今このようなことを言うのは不謹慎ですが、復興が軌道に乗った暁には、また木村さんの学校へおじゃまさせていただいて、その辺の状況を勉強させていただきたいと思っています。7年度には校舎が竣工しますので、このことを教訓に養護学校における震災対策（なにしろ区立養護は全部で2つしかない）を整備しておきた

いと考えています。

P.S.別便で送付の通り、木村レポートは確実に読者を増やしつつあります。「その2」も「勝手に回送させていただきました。」「その3」を私も待っていますが、たぶん多くの読者も待っていると思います。

☆連絡が遅れました！

「丹治氏」より「元委員」

2月23日 6時31分

2月20日午後の出張前に神戸の小学校事務研究会高岡会長（竹の台小）から電話を頂きました。

（中略）

神戸の事務研究会も活動は出来ない状態のことですが、全国大会開催のこともあり2/23には全事研・評議員会出席のため上京されることでした。

義援金活動も全事研で呼びかけていますが、それ以前に各県段階の事務職員会や市町村事務職員段階で始まっています。気持ちの表現方法や具体的支援方法が分かっていないため、当面義援金に集中しているのだと思います。宮崎大会を開催した際には、全事研としては雲仙普賢岳災害の見舞金を直接島原市の教育委員会宛に送りました。今回は教育関係にという目的を絞った義援金送付もまま成らないほどに行政組織も混乱しています。

（以下略）

☆近況ご報告

「木村」から「元委員」宛

3月16日 5時16分

理振関係のメールを拝見すると、早く状況を整えて追いつかねばと大変良い刺激になってい

ます。とはいいながらも焦りばかりが先行し、なかなか思うようには行きませんが。

事態は少しずつ改善されて行きつつあるようです。本校の避難者数も一時の4分の1に減少し、名簿上は400名足らずとなりました。学校には泊まらずに自宅に住み、食事とシャワー等だけを利用される住民が300名ほど居ますので、避難所で用意する食数は700近いようです。地震から一月あまりが経過した頃から、災害対策と学校教育の共存への模索が始まったわけですが、2月の下旬にもなってようやくのこと神戸市の災害対策本部が職員室から分離され、放送室に常駐するようになりましたので、職員室が本来の機能を回復しつつあります。

避難者の減少に併せて避難場所を体育館に統合して、教室を確保し、ようやく2月20日から複式学級(?)の2部授業が開始となり、2月27日からパンとミルクとゼリーにチーズかソーセージ等の給食が始まり、今週になって、学級ごとの授業ができるようになりましたが、午前・午後の2部制は当分続きそうです。幸いなことに卒業式は、避難者に一時体育館を明け渡していただくということで本校で行えることになりました。

行政というのは不思議なもので、緊急時には何の役にも立たないのに、ほんの少しでも世間が落ち着いたかのように見えると、俄然つまらない仕事を思いつくもので、今、私たちは膨大な事務処理にそれこそ押しつぶされそうです。サービスの整理、手当の整理、施設・備品の点検調査等が主なものですが、指示系統がはっきりしないものや、指示そのものが不明瞭なものなどが多く現場は大混乱です。

例えば、県費教職員の服務では、明確な方針が決まらないために未だ1月2月の出勤状況の報告ができていません。つまり、各人の勤務日数はおろか要勤務日数も確定していない状況です。にも関わらず、宿直や特勤等の日額手当の請求は今日指示が来て、明後日にはもう提出期限という有り様なのです。仕事に追われる余り、体調を崩した事務職員もいるように聞きましたが、教組の事務職員部長としては、情報を集めるのが精一杯で、具体的な対処もままならず歯がゆい限りです。

西宮市での仮住まいにも少しは慣れました。水道もようやく使えるようになりましたが、ガスがまだなので相変わらず銭湯に並ぶ毎日で、通勤時間の長さも加わり生活に時間がかかるのが難です。スーパーには生鮮食料品も並び、通勤スタイルもネクタイ姿が多くなりました。まだスカートは少数派のようですが、リュックスタイルは激減しました。三宮の繁華街は、部分的には壊滅的な被害で、あちらこちらで倒壊建物のため通行禁止で、それも日替わりなのでうっかりと歩けません。普段は元町から三宮までぶらぶら歩いても2~30分のものですが、最近は道の選択を誤ると、三宮にたどり着けないなんてこともありそうです。それでも、夕方になると着飾ったホステスとおぼしき女性があちらこちらのビルに向かって歩いています。瓦礫の廃墟にあってこれは不思議な光景です。開ける店をたくましいと言うか、通う客を大したものと言うか。一般的には、もっぱらかつての有名店が出す屋台が人気を呼んでいるようです。

このところ、地震の夢を見ることが多くなりました。目を向ける余裕ができたせいなのか心

理的なストレスの現れなのかはわかりませんが、夢から覚めるといつも「ああ生きている」と妙に感動します。

#### ☆連絡が遅れました

「丹治氏」から「元委員」宛

4月4日 7時3分

3月16日のMAIL読ませていただきました。

大変に忙しいなかでの連絡有難うございました。給食のこと、むだとも言える「調査」の連続、避難先住居のこと、事務職員の悲鳴、など心痛めることばかりです。神戸市の事務職員部長としての“異常時の”役割も木村さんならではの配慮のことゆえと感心しております。くれぐれも健康に留意下さい。

(以下略)

#### ☆ご無沙汰です

「木村」から「本川」氏宛

4月28日 7時2分

ご無沙汰いたしております。メールをいただいてすぐにお返事を、と思ったのですがなかなか思うに任せませんでした。何しろ仕事がすさまじいほどに忙しいのです。今もきっとあちらこちらの事務職員が、旧年度の会計処理、新年度の会計準備、そしてなによりもこの事態下のサービスの整理に追われ悲鳴を上げていると思います。それはそれは、膨大な事務量なのです。それも、朝令暮改的な通達（時にはFAXで訂正が来て、締め切りが翌日だったり）に右往左往させられながらです。

とは言うものの、確実に事態は落ち着きつつあります。遠い、狭い、プライバシーがないなどと評判が悪いとは言え、仮設住宅への入居も開始され、あるいは待ちきれずに親戚宅を頼る

とか、自力で賃貸住宅等に住むとかで本校の避難者も200名をわずかに越えるところまで減少しました。

防災指令3号（全員、全日勤務体制）は4月1日に解除され（事務職員がこれを正式に聞いたのは中旬、これに伴う事務処理の変更がまた大変）、本校のように避難者の居る学校では、未だに宿・日直体制が継続していますが、避難者への対応は原則として各避難所にある区役所の災害対策本部が行いますので、宿・日直者の職務は通常の連絡待機となっています。避難所校の教職員の負担が重くなりすぎないように、概ね2週間に一度の宿直で済むように、人数の不足するところには他校からの応援が来ることになっています。これを行き届いた配慮と考えるかどうかは難しいところです。というのは、区役所に所属する災害対策本部は、市立博物館職員と他都市からの応援ですが、原則8時間勤務なのです、それも日中の。夜間はガードマンが対応することになっています。なのに、なぜ教職員だけが長時間勤務を強いられるのかという疑問は、非常時という大義名分のもとにかき消されてしまいそうです。

すでにご存じかと思いますが、避難校に居た教頭が異動直後に「過労死」と疑われる状態で亡くなりました。本校の場合もあわやそうであったかもしれません。教頭・校長ともに（もちろん私たちも）本当によく働きました。24時間どころか1日を100時間ほどにも働きました。教頭・校長はほとんど学校で生活をしていました。3月を一月宿直し続けた教員も居ます。他校の例ですが、定年退職する事務職員は1月17日から3月31日まで1日も休まず、連日9時半（そ

の時間がその学校では女子教職員の居残り時間の限度)まで働いて、勤務状況をそのように報告したら労基法に違反するから受け取れないと言われたそうです。

働いて働いて働いて、そして死んでしまうなんて、それも47歳で。

現在、学校に残っている人たちは、平均年齢は60歳前後でしょうか。児童も居れば高校生も見かけますが、私たちぐらいの年齢は、男女ともにあまり出会いません。名簿上は居るので昼間は仕事に出かけているのかもしれませんが。男女比は名簿上も見かける人たちも圧倒的に女性が多いです。夜だけ泊まりに来るという人も未だに居るそうですが、皆さん秩序正しく生活されているようです。本校では目に見えるような諍いもあまりありません。もちろん、震災直後のような混沌とした状態ではなく、避難者の生活部分と職場としての学校とはある程度区分されてきており、生活に立ち入るのは極力さけていますので実態とは多少のずれがあるかもしれません。

本校では、自然減を大きく越えて2学級の減となりました。特例的措置とかで教職員数は1月17日数を維持しています。校舎のいくらかを避難者に割り当て、不足した教室を近くの公園に仮設するという奇妙な事態となっており、避難者は全員学校に居て、一部の子供は公園で授業を受けているわけです。

おたずねの養護学校の件は、なかなか情報が入ってきません。一次的には保護者が避難されてきたよりは地域住民の避難(本校から歩いて20分ほどの生徒数88, 教職員数70の養護学校に当初の避難者数は、何と1500名!)が主であっ

たように聞いておりますが、二次的には保護者の避難もあったかもしれませんが。現在は避難者はいないと聞いています。

私は、相変わらず西宮から通勤しています。私の住んでいた東灘区田中町は、火災こそ免れたもののどうやら最も被害のひどかったあたりらしく、通勤途上JRから見ていると、そろそろ周辺の解体撤去が始まっているのですが、無事な建築物は稀なようで、2号線までの区画は膨大な空き地となりつつあり、その中にポツンポツンと被害を免れた建物が頑丈そうに立っているという感じです。

再建の話も順調ではないものの進みつつあります。要は当方の準備資金の問題となりそうです。様々なことがありすぎたのでふさぎ込んでいた妻も最近は少し元気を取り戻してきて、(新居の)三階の一番日当たりのいい部屋は猫(引っ越しや、男やもめで不自由をかけたから)の部屋にするとか言っています。そうできればいいなと考えています。

☆拝復

「本川氏」から「木村」宛

4月29日 7時3分

依然大変な状況が続いているようですね。ただメールを読んで、変な安堵の気持ちを持ちました。それは木村さんの怒りの部分です。行政(といっても当事者能力のない集団ですが)への怒りは一つの側面は長期化する状況への苛立ちとも理解できますが、私はそうは理解しませんでした。木村さんの生活がそれだけ余裕が出てきたものと思っています。私は普段養護学校にいて、行政の無力さ、当事者能力のなさを感じています。今流行の言葉で言えば「危機管理

能力」のようなものがかくも欠如しているのかと思う毎日です。

ばかばかしい話と言えば、先日もこんな話がありました。私の勤務先のそばの区の教育研究施設の中に備蓄倉庫があります。備蓄倉庫はいかにして開けられるかという、災害が発生したら、その職員が鍵を開けるのではなく、地区の担当の区の職員が区へ赴き、そこで鍵をもらい開けに来て、さらに応援のトラックを待つて地区に配布するというのです。災害発生時にこのような措置を執ることが不可能なことはあまりにも明らかです。6時間以内に参集できる職員は30%程度なのです。まあこんな具合ですから、行政の対応というのは恐ろしくお粗末と言わざるを得ません。最もその末端を担っている者としての、反省を込めてですが。

さて養護学校の件ですが、区の計画では養護学校は避難所にはなっていません。また学校がかたまっている地域でもありますので、他の学校の体育館等があふれない限り住民を受け容れることには、行政の描いた図式ではなっていません。ただ障害者諸団体のとりまとめをしている団体の長は既に、本校を災害時の障害者の家族の避難場所にするようにとの働きかけを行政に行っています。実現すれば、少なくとも本校の在校生や卒業生の家族は本校を頼って自然に来ることとなると推測しています。本校では電気さえ通ればある程度生活できるような気がします。最大の問題点は水ですが、雨水を利用した中水システム（トイレ等に利用）があり、また体育館は空調や床暖房が導入されていますので、避暑避寒は最低出来ます。障害者にとってのよりどころとなることは必定と考えています。

私は、今年はこの学校での仕上げの年と心得て、災害時の対応も一応考えて離任したいと考えています。既に親が引き取りに来てくれるまでの時間（おおよそ6時間くらいを想定）を考えて、1食分の食べ物（彼らが食べられるものには一定の限界＝たとえば咀嚼しやすい食べ物といった＝がある）を最低は確保しないと、学校独自の対応を取り始めています。まだまだ端についたばかりですが、そうした意味でいろいろご教示願いたいと考えています。「災害時の子供の面倒？ そんなの行政の責任だ」などとはもはやみんな思わなくなりつつあるということ。

きびしき毎日が続いていると思いますが、頑張ってください。もうさすが下ろされてしまいましたが、つい先日までは私の職場の近くの小さな商店街にも、手書きのいかにも急ごしらえと言った「神戸の皆さん頑張ってください」という横断幕が、地元商店街の青年部の手で掲げられていました。

#### ☆神戸レポート

「木村」から「元委員」宛

6月8日 19時45分

ご無沙汰いたしております。あれから4ヶ月あまりが過ぎ、神戸の町にも統一地方選の活気が戻って参りました。いつもとは違って、あの無粋な宣伝カーによる名前のまき散らしも、駅や街頭での活動も自粛させられているところが多いらしく、学校の周辺も比較的静かです。とは言うものの、組合員としてはむしろそれ故に大変なところがあって、気乗りのしない選挙、選挙どころではないという雰囲気無理矢理盛り上げようとする執行部に翻弄されています。

私も、事務職員部長として心苦しい限りです。「こんな時だからがんばらないと」も「こんな時にまで」と言う声も、どちらも痛いほどによくわかるだけに辛いものです。先日、東灘区の立候補者の選挙事務所でのこと。電話動員の際、ある人が1時間ほど名簿を見ながら電話をしていたかと思うと突然泣き出したそうです。「半数近くも電話が通じない。みんな死んでしまったんだ」と。

先日久しぶりに三宮に買い物に出かけました。懇意にしている店の前に立ったとたん、中から店長以下何人かの顔見知りの店員が転げるように出てきて、口々に無事を驚き喜ぶ言葉をかけてくれるのです。関西人らしく自らの不運をネタに笑いをとろうと「家はウルトラマンの一蹴りで失いましたけど、猫と命と仕事は残りました」と思い切り明るく返事をしてみました。店員は皆微笑んでくれましたけど、店長は「そうですよねえ、命と仕事は残りましたものねえ」と涙ぐんでしまわれたので戸惑いました。

本校の避難者は名簿上は200名ですが、実際には150を切っているようです。現在もっとも避難者が多い学校では、400名以上だそうです。相変わらず教職員の宿日直体制は継続しています。避難者も教職員もある意味では疲れ果てています。7月末には避難所解消、という県や市の発表を信じる避難者も教職員も一人としていません。地震直後は、大きく取り上げられた避難者の生活も予想通り、最近はあまり話題にならないようです。しかし、現実には相変わらず体育館で教室あるいは廊下で、お互いを仕切る物もなく、電気もなく（容量の関係で使用してもらわなければならない）もちろんガスもない共

同生活をしているのです。夜は弁当1個、朝はパン、昼はおむすびかパン。この状態が未だにサハリン地震の被害者数よりも多い避難者の実態なのです。仮設住宅からもいろいろな問題があるようです。先日からすでに数件老人の孤独死が報じられています。

町の復興は、少なくとも倒壊建物の撤去という点では進行しているようです。住宅地域もそうですが、三宮などの商業地域の大型ビルも根こそぎ撤去されつつあります。傾いたり、潰れたりぼろぼろになったりした建物が残っている状態も悲惨なものですが、ほんの昨日まで人々が生活していたその場所が今は、皮肉にも広々とした空き地となり、空白化した生活空間にはなお一層の感があります。そして、その空き地に花がポツンと供えられていたり、おもちゃの自動車がそっと添えられていたりするのです。これがこの地域では日常の風景だとは余りだと思いませんか。本川さんは来神したいとのことですが、神戸の町の宿泊事情は正常化しつつあると聞きます。是非お越しくください。三宮の繁華街は活気を取り戻しつつあるとは言っても、その様子は過去を知る者にとっては自らの目で見ないと信じられないほどに一変しています。

「理振台帳」の件、お手伝いのできないままに時間が過ぎて行き申し訳なく思っています。3月末にコンピューターを思い切って一新しました。ハードもソフトもあれもこれもこの際（何の際や、と関西弁）だから、夏の旅行も今年はしないのだからとか言いながら、強引に家内決裁しました。新しさに最初は戸惑いましたが、このところは機械も落ち着き、少しは時間の余裕も出てきそうなので、仕事の分担も、可

能なようであればご指示ください。

未だに私はパソコン通信の世界に、その匿名性と排他性もしくは身内意識のようなものになじめずRO（リードオンリーの会員を言うそうです）のままです。でも、この世界を通じて地震後初めて皆さんと連絡がとれたことは、忘れられない嬉しさです。今になって、地震が精神に確かに影響を与えているのを感じます。涙もろい、暗闇が怖い、眠ってしまうと何かに急に襲われそうな強迫感とか地震の夢をしきりに見るとかもっとたくさんの人を救えたのじゃないかとかの自責の念です。弱気にならないように、あのメールを読んだときの嬉しさを繰り返し繰り返し思い出し感謝しています。

☆連絡します

「本川氏」から「木村」宛

6月20日 21時47分

メール有り難うございました。オウム事件が次第に終局へ向かうに従って、初春のあの惨事の続報も再び入ってくるようになりました。昨日も義援金の配分の問題と生活保護の関連等の特集をNHKでやっていました。また、学校事務誌も先月になりますが、阪神淡路大地震の特集を組んでおり、非常に具体的に学校の実状が伝わってきています。

だんだんと状況が理解できるようになるに連れ、学校も何らかの対応をとらなければならないという気持ちだけは芽生えてきたように思います。しかしながら、その対応はお粗末で養護学校にもかかわらず、乾パンなどを高々1食分用意するというものです。

さて、神戸へどうぞという温かいお言葉ですが、未だに西の地域には申し訳なさが手伝って

足が向けられないでいます。ただ、今年の11月の第二土曜日とその前の金曜日に教育工学関連の研究会があるということで、女房が出席する計画を立てています。その際には随行員として訪れてみようかなと考えています。実際地震が来るのは秒読みなのですから、神戸の教訓は是非とも参考にさせていただきたいと考えています。

それから被害を受けた家屋や精神的な部分の立ち直りはメールでは知る由もありませんが、どうやらコンピューター環境については復旧の鈍音高く、はやくも震災前の状況を追い抜くかのような整備の状況、羨ましい限りです。

☆お元気でいらっしゃいますか？

「本川氏」より「木村」宛

7月20日 23時28分

最近、報道機関は神戸の半年の軌跡を繰り返し報道しています。

それにつけても、こここのところの気候を考えると、避難所生活を続けている方々の、状況は想像を遥かに越えたものだろうと推察します。木村さん自身の西宮の家の生活もどのような状況なのでしょうか？

東京は（おそらく神戸も）夏季休業に明日から入ります。もっとも養護学校の実質の夏休みは（プールが総出状態なので）8月になってからということになります。4年間の校舎改築も完了し、今年は私としては、ちょっと一服の夏休みです。

丹治さんの言によれば、8/3に岐阜で再会を祝して飲もうという話。できればはせ参じたいと考えています。

☆さあ、夏休みだ！

「木村」から「元委員」宛

7月22日 19時31分

二見様、山田様（彼らの学校は今回の7月3週  
の集中豪雨でかなりの被害を受けた）

ご無沙汰いたしております。震災の折には  
温かいお励ましをありがとうございました。

丹治さん、本川さんに転送していただいたメール  
によると、今回の大雨の被害はずいぶんひど  
かったようです。少し時間がたってしまいまし  
たけれど、お見舞い申し上げます。神戸では、  
依然として本校のように避難所となっている学  
校では、教職員の過労と心的ケアの問題が深刻  
化しそうです。後始末等、お忙しいと思いま  
すが、くれぐれも無理をなさいませんように。

丹治様、本川様

メールありがとうございました。北越地方の  
大雨による被害はニュースで知っていたつもり  
でしたが、二見さん、山田さんの被害には思い  
が至りませんでした。神戸でも、地震で地盤が  
ゆるんでいるところに3日以上も降り続いたり  
したものですから、東灘区の山手で避難勧告が  
出されました。幸い何事もなかったようですが、  
TVでその様子が映し出されていて、嘆かわし  
くなりました。避難してきた住民は、なんと体  
操マットに座っているのです。この学校は六甲  
の山裾にあって地震の被害は比較的少なく、避  
難者も早急に引き上げたところですが、場所柄  
梅雨にかけて雨の状態によっては、ゆるんだ地  
盤が崩壊するかもしれないとの観測は地震直後  
からあったにも関わらず、やはり、毛布・布団  
の一枚も準備されてなかったのです。これで、  
地震の教訓が生かされたというのでしょうか。

さて、今日は7月22日（土）、なのにどうい  
う訳が出勤していました。そうです、昨夜も宿  
直だったのです。前回のメールでも書きました  
けれど、7月末で避難所が解消されるなどと思っ  
ている教職員は誰もいません。7月19日に最終  
の仮設住宅の当選者の発表がありましたけれど、  
たとえば本校の場合名簿上の避難者は59名（実  
際はもう少し多い）ですが、当選者はわずか17  
名、残り42名の避難者は、どうすればよいので  
しょうか。知り合いもなければ、仕事もない、  
医者もマーケットも遠いという「郊外」の仮設  
住宅への移転の説得を受け入れる人がそう多数  
いるとは思えません。現に昨夜も、職員室前の  
仮設電話で、知人か誰かに「仮設は当たらんかっ  
た。けど俺は、絶対にここを出えへんからな!!」  
と大声で話している人がいました。その仮設電  
話も本日撤去されますが。昨日は、4月に設置  
された大型の保冷コンテナが撤去されました。

学校としては2学期からは宿直体制は、廃止  
したい意向のようです。ただし、たとえ1人で  
あっても、避難者を決して追い出したりはしな  
い、という条件です。教職員も本心ほっとし  
ています。本当に疲れ果てています、教職員も  
避難者も。とは言っても、校舎・校地の管理運  
営上宿直の完全廃止が実際に可能かどうかは別  
問題です。

私自身の状況は、5月に申請した建築確認申  
請が、来月ぐらいには許可されるようですので、  
いよいよ金策を考えねばならない時期となっ  
ています。私は、どうも家の造作には興味がわか  
ず、設計図を見せられて、何度も何度も、「こ  
こがこうで、あそこがああで。ここがこうだか  
らあそこはああなる」というのには少しうんざ

りました。いずれにせよ、それこそ猫の額ほどの土地なのに。いっそのこと、マンションに引っ越そうと何度考えたことでしょう。地震直後にあの傾いた家を見て、ここを再建するのは私の義務だ、などと思わなければよかった。

8月の岐阜大会は日帰りでも参加をし、皆さんとの再会を楽しみにしていましたが、別な学習会と重なってしまい、立場上参加せざるを得ません。次の機会にはどんな障害も跳ね返し馳せ参じたいと思います。岐阜の様子などまたお聞かせください。

#### ☆とりあえずの連絡

「丹治氏」から「元委員」宛

7月24日 5時13分

皆様へ、そして本川様へ。木村さんからのMAIL拝見いたしました。神戸市福住小学校で現在でも“宿直”体制が敷かれており、また被災者が70人程もおられることを知りました。災害以降連日（交代であるといっても）大変なことと思います。

また、先日突然に“学校事務”編集長の山口さんから電話が入り、突然災害時の例の記事について雑誌掲載依頼を木村さん宛に了解確認をしたいと連絡がありました。そのまま木村さんの勤務地の電話番号を教えました。その後「御了解を得ました」と再度山口氏から連絡が入りました。本川さんが熱心に(?)に、全都その他に配布した宣伝のおかげですが、原稿料は“自宅の復旧の”壁紙の一部位にはなるでしょうか？

#### ☆暑中お見舞い

「木村」から「元委員」宛

8月2日 11時4分

暑中お見舞い申し上げます。どこでも暑いのでしょうか、神戸は22日の土曜日に大雨警報が出て以来、パツパツと雨がなく昨年に匹敵するような猛暑となりました。震災の関係で納涼行事の大部分も中止され、おまけにビアガーデンがない（あっても三宮では誰も来ない、塵がすごいから）ので、暑さのはげ口がありません。おまけに、今年は泊まりがけの出張もしなく、私事旅行もしないものだから、「おや、今年の夏休みはめずらしくよく顔を見ますね」とか言われてストレスはお腹あたりの脂肪となって貯まる一方です。岐阜に行かれた方は鶴飼いなどを見ながら盛り上がったんだろうなと、悔しがっています。皆さんにお会いしたかったのと、「あの」宮崎の渡辺さんのパネラーぶりを見たかったのに残念です。感想などぜひお聞かせください。（※渡辺齊己氏は元電算委員、「学校事務誌」常連—木村注）

さて、神戸市は相変わらずの状態です。もはや「現代の棄民政策」とまで言われるこの避難者対策も膠着状態という所でしょうか。一昨日も宿直でしたが、いつもは配布される朝食がどういうわけか配られませんでした。8月1日が何かの区切りになったことは確かのようにです。

私は、家にいるのも何ですので熱心に仕事をしています。24～27日までは、相変わらずのN5200研修で、声が枯れてしまいました。その機械はPTOS-MSDOSの両用機で、私たちの強い希望でWINDOWSもインストールされているので、受講されている皆さんには申し訳ない話

ですが、どうせならWINDOWSの研修をしたかったものです。

夏休みの旅行をお考えの皆さん、神戸方面へ足を向けられるならご一報ください、今のところ8月23、24日以外はたいい学校か教育センターにいます。暇を持て余していますので、喜んで観光ガイドをさせていただきます。

## 終わりに

1月17日以来本校の玄関の扉は週日閉ざされることがありませんでした。首相や知事や市長や政治家はこの扉を通らなかつたけれど、朝も昼も夜も、雨の日も曇りの日も晴れの日も、実に多くの人々をこの扉は受け入れました。

元気一杯のボランティアの若者集団、「何か手伝わせてください」と一人でやってくる青年、温かい手でまさしく「手当て」する山形からの医療グループ、「耳が聞こえないので希望の髪型を紙に書いてください」と張り紙をした理髪士、郷土芸能等の激励の一時を携えた各地の人々、歌手、人形劇団、朴訥と話す同じ働く仲間の北九州市の職員。もちろん誰よりも、家を潰され、財産を失い、親を子を妻を夫を兄を妹を亡くし、身一つで安全と安心とを求めて避難してきた人々。

そして、避難していたすべての人が退去したわけではありませんが、8月21日に、再び玄関は夜間施錠されることになりました。この玄関から、運良くもとの住まいに、あるいは思いもかけないことに新しい住まいへと足を踏み出した人々にとって、学校の印象はどのようなものであったのでしょうか。

早や次の冬を迎えつつあります。今なおこの地震に遭遇したすべての人々にとって、災害は

経験ではなく現在進行中の体験です。

私にとっては、生きる偶然さを改めて考えさせられる機会となりました。あの時以来私は「結果的に生きている」のだと、考えています。私自身は早く忘れたい事実ですが、生き残ったものの義務として、この体験を語り続けようと思っています。

そうすることこそが、今なお学校で、テントで、仮設住宅で、あるいは病院で望まざる生活を続ける人々を支えることだし、何よりも、犠牲となられた人々の魂を、例えわずかであろうとも安んじさせることができると信じています。そして、私たち自身も「希望と期待」を持ち続けようと信じています。



# あの日の私

室内小学校 藤井 由紀子

午前5時46分、未だ熟睡中。目覚まし時計は5時50分にセット。いつも強制的に起こされている。

何？ 何か衝撃で目覚めたらしいものの訳がわからない、突然グラグラッ。「ウワーッ」。後で思うに凄まじい動物的な声をあげていたよう。ベッドにしがみつき揺られながら、避難するべき？ いやなりゆきにまかせよう、このままどうかなってもそれまでの人生。恐怖と諦めと。それ以外何も記憶にない。ものが壊れる音等耳にしているはずなのに記憶は曖昧。

揺れは止まったがすぐには動けない。停電している。窓を開ける。廊下の非常灯の明かりをとおしてちらつく雪を見た、のは錯覚？ その後出会った誰からも雪の話は聞かない。部屋の中はまだ暗い、カーテンを開け窓から入る非常灯の光をたよりに服を着替える。ウロウロするだけでなにも出来ない。

明るくなる。チェストの上にあったテレビが落ちている、人形ケースが落ちている、電気スタンドも。スチールの屑入れがひしゃげている。テレビの部品は外れ電気スタンドのガラスは割れているのに、なぜかガラスの人形ケースは壊れていない。台所、冷蔵庫の中身が飛び出し、棚はひっくりかえり、足の踏み場も無い。食堂、リビング、食器は壊れ棚の上のものは落ち、あまり安定の良くなかった本箱はひっくりかえりメチャクチャ。不幸中の幸い、家具は少なかった。

外の様子を見る。誰の姿も見えない静かな朝。いつもなら7時前に出勤する。給料日なのに遅れそう。9時には着くかな。とにかく学校へ電話を、通じない。とりあえず顔を洗おう、水が出ない。洗濯機に入っていた水で済ます。駅へ、いつもなら駅へ向かう人が多いのに反対方向に歩く人が多い、不審に思いながら駅へ向かう、電車は止まっていた。家に引き返す、途中出会った人に電車が止まっていることを知らせるが、自分で確認したいのかそのまま行かれる。

車で行こう。停電でガレージは使用不可と知らされる。困った。情報を求めうろつき、警備員さんに阪神高速道路が崩れている、阪急電車が転覆している、と聞かされる。えっ？

「一階の警備員室は水が出ているのでどうぞ、電気は安全確認が出来るまで強制的に切られています、ガスはすぐ使えます」。

とにかく動けるようになるまで家にいるしかない。思い出して携帯ラジオを捜す。出てきたものの受信状態はもともと悪く、2局しか入らない。事態の放送は聞けず無事情報が流れ続けるばかり。こんな方法があるのか、でもどうやって放送局に連絡とれたの？ 何度も通じない電話をかけ続けながら部屋を片付ける、現状を把握出来ないで落ち着かない。近所の様子はと外へ出てみるが誰の姿も見かけず静かだ。家に電話がかかる。知人の声を聞きホッとすることも相手も状態はよく判っていない。お互いの無事を確認し電話を切る。

9時すぎに水が出る。電気がつく。テレビがヘリコプターからの映像を流すが経験のないことで現実感がない。エレベーターは動かないので9階から歩いて降りガレージの様子を聞きに行く、まだ動かない。駅へ行く、まだ動かない。いつ動くかわからない。家に帰ってまた片付ける。職場への電話は通じない。

昼すぎ、車が動ける。職場へ向かう。道路はスムーズに走れたと思う。後で車の渋滞がひどく乗り捨てた等聞いたが、西神から山麓バイパス長田への道はひどかったという記憶はない。

学校の周辺から南へかけての惨状を目にする。後になって目にし、聞いたものは、もっと悲惨なものだった訳で、この時点での私の事態に対する認識は甘かった。

暗い職員室に数人の職員。6時半頃には学校へ駆け付け救助に向かっている職員、午前中に徒歩で出勤出来たものの自宅に被害を受け早めに引き上げた職員、自宅は家族にまかせて、あるいは片付ける人もいないのに駆けつけた職員、家のすぐ近くに火がきて気をもんでいる職員等の情報を聞く。朝から出勤した職員は昼食も取らず救助に当たっている。

事務室はひっくり返っていてキャビネットを登り、机に登り、書棚を踏み越えて、なんとか出入りが出来る状態だった。「これでも少し片付けたんですよ」の声。そういえば小さな事務用品はもとの引き出しに入っていた。

銀行の人はもちろん来ていなかった。結局、給料を職員に支給出来たのは23日。

保健室にケガ人、印刷室に亡くなられた方、ロビー、図書室等に避難の人が…。まだ来られるであろう人のために、少しでも座り易いよう

にと、教室の床にダンボールを敷く。すでに入られている部屋も整理しようとするが、声をかけても気力のない人、体が動かさない人と難しい。

5階の体育室は落下した照明器具等で危険、4、5階の教室はとっさの時に動きにくい、階段を上るのが大変（足の不自由な人、目の不自由な人、ケガをした人、老人も多かった）ということで1階廊下に座り込まれる人もいる。

暗くなった時のための懐中電灯の準備は少なく、理科室のアルコールランプとろうそくの準備をする。後で、ろうそくは足りず半分に折って使ったと聞く。

保健室のベッドにいた年配の男性Aさん、肋骨が折れている様子。看護婦さん(?)が見てくれるが、「今病院に行っても寝ているだけで何もできないし、ベッドも無いのでこのまま安静にしているしかない」とのこと。毛布一枚で寒そう。保健室の布団はもう他の人が使っていた。隣のベッドのやはり年配の男性Bさんの毛布は三枚程で、「明石から娘が迎えにくるから来たら知らせてな」と言う。耳が不自由な方で、こんな中どうして連絡できたのか不思議に思うが尋ねられない。Aさん、「毛布空いたらまわしてな」。

その日、Bさんにお迎えが来たかどうか知らないまま暗くなり、男子職員に後をまかせ帰宅。

途中、閉店間際のコープに入る。豆腐と牛乳少しのつまみ以外何も無かった。

家の電話は通じにくいだろうと、公衆電話に並び遠くの両親に無事を知らせる。

この日から3月末まで我が家にも被災者が同居することになる。

夜テレビは亡くなられた方の情報を、被害の状況を流し続ける。西区の自宅は電気、ガス、水道すべて通っている。この状態は後日、罪悪感というか疎外感というか、神戸に住んでいるとは大きな声で言えない気持ちにさせた。被災者と話す時、住まいのことになるとうかがいやすくなる。これも贅沢なことでもたまたま大きな声で言えない。

夜も遅くなった。余震におびえ眠れず、こたつで服をきたまま、電気をつけテレビをつけ放しで横になり、それでも3時間程眠った。

18日。朝出掛ける前に水が止まる。洗濯機にまだ水はあった。前夜作っておいたおにぎりとお茶をもって出勤。暗い空に赤く大きな太陽を見る。大きな渋滞もなく8時前に到着。

保健室のAさんに掛布団を持って行ったのに、亡くなられたとのこと。ショックで言葉も無かった。夜の中に5人の方が亡くなられたとのこと。Bさんは遅くに迎えの人が来たよう。

泊まっていた職員にお茶など勧めるが、誰も食欲はない。教室を空ける作業。薄い、本当に薄いおかゆの炊き出しを手伝う。お米と水は地元の有志の持ち寄り。一人当りの量は寒い中並んで5、6回口にすれば無くなるくらいだったが、皆さん喜んでおられた。救援のおにぎりが届いたのは19日夕方ですでに堅くなっていた。

グラウンドに穴を掘り、周りをカーテンで囲み、トイレを作ったのはこの日だった。トイレといえばヘンな話、朝家を出て帰るまで12~14時間、簡易トイレが来る日まで職場では行かなかったが、これも贅沢な帰る家のある者の出来たことだった。

疲れている職員に頼み、事務室を片付ける。

氏名印が順序よく落ちていたのがおかしかった。なんとか元に戻った部屋は、19日から届き出した支援物資の一時置場になり、机と通路の確保のため、度々片付けることになった。

貴重な水とお米を預かり、家庭科室の大きな炊飯器を抱え帰宅。エレベーターは止まったまままで9階まで重いものを運ぶのが大変。明日のためおにぎりを一杯作る。救援活動のエネルギー源。またこたつで夜を過ごす。

19日。職場近くを歩き、壊れた家、信号も消え、走る車もなく、セピア色になってしまった街を間近に見る。ズンズン体が沈みこみ寒い。

避難の人に名前を聞いて回り名簿を作る。模造紙に大きく書き玄関に掲示した名簿は、安否を尋ねて訪れる人の拠り所になった。

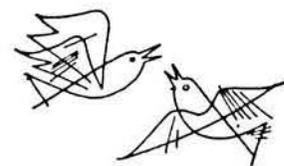
20日。遠いところから駆けつけて走りまわる消防車、救急車、給水車等を目にし涙が出る。

西区に住み被害は小さく、揺れは怖かったものの、ことの大きさを認識するのに時間のかかった私。何をすべきかわからず目の前にあることをこなすことしか出来なかった私。自分というものの小ささをつくづく感じさせられ落ち込みもしたけれど、自ら被災しながら炊き出し、物資の調達、掃除、職員への気配り等、先頭に立ち動いてくださった地元の多くの方々、自分の生活を置いて駆けつけて下さったボランティアの方々等多くの人に、大きな愛と希望を与えられた日々だった。



更地になった空間がわびしい。室内小学校，校区付近。

左側：兵庫県立兵庫高校 右側：神戸市立室内小学校（平成7年7月17日撮影）



# 大好きな神戸に

菅の台小学校 佐々真実

## 1日目 家

1月17日午前5時30分、目覚まし時計が鳴った。眠い目をあけると、あたりはまだ真っ暗だった。いつもなら目をさました途端、元気な私だが、昨日スキーから帰ってきたせいか、何だかわけだるくて、布団の中でぐずぐずしていた。「走ってからまた寝よう」と、思い切ってベッドから出て、ジャージに着替えた。

手袋をして、さあ出ようと思った瞬間、ゴォーという音がし、上に突き上げられた感じがした。一瞬何か爆発したのかと思った。すぐにすごい揺れがあり、電気が消えた。それから、何が何だかわからなかった。とっさに頭を抱えしゃがみこんで「怖いよ、怖いよ」と叫んでいた。上からは何か物がどンドン落ちてきた。隣の部屋で妹も何か叫んでいた。

すごい揺れは、とても長い時間のように感じた。ようやく揺れはおさまったが、物が上に乗っているのと怖さで、身動き出来なかった。妹が、「明るくなるまで、じっとしとこう」と言うので、何とかベッドの中にもぐりこんだ。ベッドの上にも、たくさん物が散乱していて、布団がとても重たかった。

家の外では、「〇〇さん、大丈夫か」「おばあちゃん、しっかりせーよ」という男の人の声が出していた。

母の「大丈夫？」という声が出て、「大丈夫」と答えた。母の声を聞いて、少し安心した。母

はその時、散乱している物で足を傷つけてしまった。かなり出血があったようだが、お昼過ぎにその辺に血が飛び散っているのを見て、初めて気がついた。後で聞いたことだが、地震直後、母が父に声をかけたとき、返答がなかったので「こんなにすごい地震でも、寝ているんだ」と思ったそうである。でも実際は、タンスの下敷きになって、声も出せなかったようだ。どのように脱出したかは父もわからないらしい。

何分くらいたったのだろう。少し周りが明るくなってきた。部屋の中の様子が少しずつ見えってきた。本棚やタンスが倒れ、棚の上や中にあった物すべてが、放り出されているような感じだった。これ以上散らかすことができないくらいに、めっちゃくちゃだった。ガラスの破片もあたり一面に散乱していた。

外を見ると、そこには見たことのない光景があった。隣の家の瓦はほとんど落ちて、崩れかけていた。道の向こうにあるアパートの2階は、道にずり落ちていた。そのときは、神戸がそんなにひどい状態だなんて考えてもいなかった。自分の家だけ（自分の家の周辺だけ）がこんなにひどいと思っていた。

とりあえず、自分の部屋の通路を確保しようと思い、部屋を片付けることにした。どこからかスリッパを出して履き、上にスキーウェアを羽織った。どうにか、通路が確保できた。学校へ電話をするために、廊下を隔てた隣の部屋へ行こうとした。その部屋には、電話の子機が

あるのだ。ほとんど何も置いていない部屋だったが、テレビやビデオがころげ落ち、電灯の笠が飛んでいて、やはりガラスの破片が散乱していた。やっと電話を見つけ出したが、その電話はなぜか故障していた。

1階に親機があるので、明らかにずれてしまったとわかる階段をこわごわと降りていった。階段の下は台所なのだが、ここもすさまじい状態だった。有り難いことに、1階の電話は使えたので、学校に電話した。8時半頃だった。学校には、何人かの人が来ているということだったが、自分は今日は行けそうにないこと、給料のことをお願いした。電話に出た先生に「大丈夫？南の方がひどいんだって…」と言われて、私はテレビからもラジオからも情報を聞いてなかったので、「そうなんだ」と思いながら、電話を切った。

まだ、そのときも神戸がこんなにひどいなんて思ってもいなかった。母がラジオを見つけ出して、ついてはいたが、聞こうとしていなかった。自分のことしか考えていなかった。どんなことが起こったのか、どういう状態なのか、何をすればいいのか、冷静に考える余裕がなかった。ただ“とりあえず”何かしているという感覚だった。電気の切れた冷蔵庫から牛乳を取り出して、飲んだ。

## 1日目 家の外

家の外に出てみた。目の前には信じられない光景があった。角の家が道路に崩れて道が寸断されていた。若宮商店街のほとんどが崩れていた。すごいショックを受けた。変わり果てた町の様子に呆然とした。映画か何か現実ではない

1シーンを見ているように思った。なぜか涙が出てきた。やはり、何をすべきかわからなかった。誰かが死んでいるなんて、考えてもいなかった。

後で知ったことだが、近所でも知っている人が何人か犠牲となっていた。いろいろな人が、下敷きになっている人を助け出したのを聞いた。いかに自分が、自分のことしか考えていなかったかを知り、恥ずかしさと腹立ちを感じる。どうして、あのときすぐに外に出て、誰かを助けようとは考えなかったのだろう。少しは役に立ったかもしれない。お米屋さんのおばあちゃんや近所の小学生の子も死ななかつたかもしれないと思うと、本当に悔しい。二度とこんな事は嫌だけど、もしあったなら、今度は真っ先にみんなを助けにいこうと思う。

その後もただ愕然としながら、とりあえず部屋に戻って自分の部屋を片付けることにした。何て、自分は愚かな人間だろう。

ヘリコプターの音や救急車や消防車のサイレンの音が絶えず外で鳴っていた。家ではラジオがずっとついていてしたが、違う国のことを言っているように思えた。時々聞こえてくるラジオからは、死者の数がだんだん増えていっていた。しばらくして、若宮小学校へ行った。行く途中、そこらじゅうでガスの臭いがしていた。小学校は廊下にも人があふれていた。小学校の前にあった友達の家もつぶれていた。小学校の中を探したがわからなかった。

学校にもいる場所もなく、学校にいるより、家族4人である方がいいということになり、家に帰り、とりあえず今晚寝る部屋を一つ確保することにした。2階の私の部屋の隣にある家具

の一番少ない部屋になった。転がっているテレビなどを動かし、もちろん電気掃除機は使えないので、軍手をし、散乱しているガラスを丁寧に手で拾って片付け、部屋の真ん中にこたつを置いた。もちろん、電気がないので、暖かくはないが、4人が寝るには、都合がよかった。

水も出なかったが、道路の亀裂から水が噴き出していた。そこへバケツやボールなんかで水を何回も汲みに行き、水は何とか確保した。

夕方近くなり、あたりが暗くなってきた。家の中にある懐中電燈を探して集めた。電池があまりなかったの、須磨区役所にもらいに行くことにした。区役所にもたくさんの方がいた。階段やあらゆるところに、人が毛布などを敷いて座っていた。暗い中、ろうそくの灯りがポツポツと見えた。「こんなところで寝るのはいやだ。家が残っていて良かった。自分たちも悲惨だけど、この人たちよりはましだ。かわいそうに」なんてばかな事を考えていた。区役所の職員をやっと見つけて、電池をくれるように頼んだが、「ない」と言われた。「何か飲み物か食べ物？」と聞いたが、やはり「ない」と言われた。しかたなく、手ぶらのまま家に帰った。東の空が真っ赤だった。そのときは火事の炎だとわからなかった。ラジオで鷹取のあたりまで燃えているらしいことがわかった。

## 1日目 夜

日が暮れて、闇と寒さが襲ってきた。こんなに、電気が大切なものとは考えたことがなかった。石油ファンヒーターはあったが、ガスの臭いのため火をつけることは許されなかった。その日は、牛乳とクッキーしか口にしていなかつ

た。食欲より怖さの方が勝っていた。

何もすることがなかったのと、じっとしているのが怖かったので、どこまで火事か来ているのか、見に行く事にした。さっきより、あたりが暗くなった分、東の空がますます赤くなったように思った。歩く所歩く所、ガスの臭いがしていた。ガス漏れ注意とか火気厳禁とか紙に書いて貼られていたり、ロープで通行止めになっている道もあった。電柱は倒れ、道路にも亀裂がはいり隆起していて、とても危険だった。鷹取駅の近くまで行くと、警察の人がいた。母が火事の様子を聞くと、鷹取駅も燃えているらしいということで、「これ以上行かない方がいい」と言われ、引き返した。

真っ暗な家に帰ってからは、耳だけ動かし、ラジオを聞いていた。父が、「川があるから、こっちまでは火は来ないやろ」と言っていたが、心配だった。トイレに行くのにも懐中電灯が必要だった。暗いことがこんなにも怖いものだと、知らなかった。でも、家族4人一緒だということは有り難かった。余震もずっと続いていた。夜になっても、救急車や消防車のサイレンの音は鳴り止まなかった。とても疲れていたが、寒さと怖さで眠れなかった。

## 2日目

2日目の朝、何か食料をもらうために区役所に行った。灰が庭まで飛んできていた。煙の臭いもしていた。区役所へ行く途中、おにぎりを持った妹の友達に会った。区役所でもらったという。区役所へ着くと、すでにおにぎりはなくエビアンを1本ずつもらっただけであった。その帰り、足の不自由なおじいちゃんに会った。

「何か食べるものはもらえたか」と聞かれたので、「もうこんなビンの水しかなかったよ」と答えると、「昨日からほとんど食べていない。今も区役所で、何か配っていると聞いたので、もらいにきたが、足が悪いので、みんなより遅くなってしまおう」と、とても悲しそうに話していた。何かしてあげたかったが、何もできなかった。弱いものはやはり、不利なのか。結局は強いものが勝ち残っていくのか。

暗くなってからは何もできないので、明るいうちに、出来ることはやらなければいけなかった。まずは食料・水の確保。そして家の片付け…。どの部屋もぐちゃぐちゃで、どこから手をつけていっていいのかわからなかったが、少しずつ、やっていくしか仕方がなかった。父も母も仕事に行かなければいけなかったので、私も学校へとりあえず行くことにした。妹一人家に置いておくことは心配だったので、一緒に学校に行った。

学校の周辺は、私の家の周辺の景色とは全く異なっていた。ちゃんと建っている家ばかりだった。道も波うってない。職員室に入ると、電気がついていて明るかった。さらにストーブもついていて暖かかった。水だけが出ないということであった。職員室にあった誰かの差し入れのおにぎりを食べた。熱いコーヒーを飲んだ。おいしかった。生き返った気持ちがした。

はじめてテレビの映像を見た。凄かった。ラジオでは聞いていたが、具体的にはわからなかった。自分の想像以上の映像が、画面で映し出されていた。信じられなかった。大変なことになっているんだと、とてもショックを受けた。また、涙が出てきた。色々な情報が流れているが、一

番必要としている被災者には、テレビが見られないので、伝わっていないのが、残念であった。

少しおにぎりをもらって、明るいうちに家に帰った。帰る途中、区役所へ行ってみた。パンとウーロン茶をもらった。列をなしているところなんか、戦争中の配給のようだった。もちろん実際知らないことだが…。少しずつ家の中を片付けることにした。家のほこりや外の瓦礫の砂ぼこりで、顔がほこりまみれになっていた。体も土くさいような感じがした。でも、思い切り顔を洗ったり、お風呂には入れない。気持ち悪いが仕方がない。

2日目の夜、また闇がやってきた。その日ランタンを借りてきたので、電球代わりにした。少しは明るくなった。ちょっとうれしかった。長い夜、することがなかったので、その日も外へ行くことにした。このことを妹と“探検”と呼んだ。“探検”ということ自体、遊びに近いように思える。どんな目的があると言うのだ。少し罪悪感があったが、見たかった。その日は東の方ではなく、西の方、須磨駅の方へ歩いていった。真っ暗だった。家やビルの中の電気が全くないのだから…。国道2号線沿いの家やビルも壊れていた。友達のプラモデル屋さんも焼けていた。細い路地も塀や家がくずれていて通れなかった。なんて悲惨な光景だろう。つらかった。昨日から何回泣いただろう。電気が復旧されるまで、この“探検”が日課となった。

### 3日目

3日目の朝、昨日の夕方から地下鉄が動いていたので、地下鉄で名谷まで言った。名谷に着くと、たくさんの人が、列を作っていた。何を

しているのかと思うと、みんな買い物するために並んでいるという。私は学校へ行くために来たのだが、私と妹も並ぶことにした。物がなくなるはずはないのに、一種のパニック状態になっていると思った。私の前には何百人という人がすでに並んでいた。1時間半くらい並んだであろうか。やっと店の中に入れたが、すでにパンのような火を使わないでも食べられる物は、ほとんど残っていなかった。「あんたらは、ガスや電気で料理できるんちゃうの。なんで私らに置いとかへんのかなあ」とすら、そのときは思っていた。なんて私は自分のことしか考えない勝手な人間なのだろう。ほとんど何も買わずに学校へ向かった。学校の近くでも、同じようにコープや八百屋さんの前には行列ができていた。

### 生きるということとボランティア

毎日、生活するのに、生きるのに一生懸命であった。生きるために生活していた。明るい間にできることはして、水や食料を得るために走り回り、夜は闇の中でじっとしている。人間とは本来こうだったのだ。あまりにも、文明や科学に頼りすぎていた。電気・ガス・水道、なくなってはじめてその大切さがわかった。

板宿から家へ帰る道のりは、真っ暗な闇の中を帰っていくようだった。自分の家の近くは、ゴーストタウンのようだった。公園やガレージにも人がたくさんいた。家の中は暗く、寒かった。学校は天国で、家は地獄だと思っていた。

はじめは、自分だけがどうしてこんな目に遭わなければいけないのかと、自分のことしか考えていなかったが、いろんな状況がわかるにつれ、自分がどれほど心の狭い人間であるかとい

うことがわかった。そして何か人のためにしたいという気持ちが強くなった。ちょうど学校への支援の要請があったので、まずは、それに参加することにした。ちょうど地震の1週間後であった。その頃には、大体、体制が整理されていた。物資の配給や電話の対応が主な仕事であった。絶えず電話が鳴り、職員室に物をとりに来る人が出入りしていた。日毎に電話は少なくなった分、避難している人たちのいざこざや不平不満は増えていっているように思えた。それとは別に、家の近くの学校にもボランティアへ行った。どちらの学校でもみんな誠意をもって働いていた。先生方の働きぶりには、本当に頭の下がる思いであった。炊き出しなどしていると「ありがとう」と言ってくれたりして、やってよかったと思うこともあったが、避難している人の中には、「あんたら、家があってええなあ」とか「まだ弁当こへんのか」とか文句を言う人も少なからずいた。同じ被災者なのに、何を勝手なこと言うとんやろと腹を立てることもあった。しかし、ああいう状況だと仕方がないのかもしれない。

### 私の海

電気がやっときた日、とてもうれしかった。家に灯りがついたというだけで、気持ちまで明るくなった。

その夜、近所で火事があった。一日目の火事のことが思い出された。地震のときも水が出ないために、あんなに火事が広がったということを知っていた。まだ、水は出ていなかった。もしかしたら、焼けるんじゃないかとすごく怖かった。頭の中がパニックになってしまった。家か

ら衣類を運び出していた。そのときは、無事に火は消えた。火事になった家には、誰もいなかった。原因は漏電か放火だと噂された。その日以後も火事への心配・恐怖は消えなかった。それは、家の周辺には、ほとんど誰も住んでいなくて、電気が来ても相変わらず、真っ暗なままだった。それに放火による火事の発生はマスコミでも放送されていたからである。

地震があってから、何週間か経った。瓦礫を運ぶトラックで、家の回りも周辺の道路もいっぱいだった。家の回りは建物が壊され、砂ぼこりで空気が濁っていた。ある時、須磨の海岸へ行った。驚いたことに、駐車場に瓦礫が山のように積まれていた。私が知っている風景ではない。私の海はどこに行ったんだろう。ショックでもあり、腹立たしくもあった。

水道は3月7日に、ガスは4月8日によややく回復した。やっと、以前の文化的な生活にもどることが出来た。

私は、学校にあまり被害がなかった分、恵まれていた。精神的にも随分、助けられた。学校も家も地獄だった人もたくさんいるが、精神的にも肉体的にも、本当に大変だったと思う。私はとても心の狭い人間なので、もっと大変な人がいることはわかっているけど、あまりせっぱつまっていないような人を見ると、腹が立った。

### 地震によってわかったこと

地震によって、色々なことを教えられた。まずは人間の温かさ、優しさである。遠くからわざわざ歩いてお湯がはいったポットをとどけてくれた。バイクでパンや食料を持ってきてくれた。おかずを作ってくれた。お手拭きやカイロ

など差し入れもいっぱいもらった。京都や大阪からも交通手段がないというのに、わざわざ水や食料や果物を持ってきてくれた。お風呂に入れてくれた。本当にたくさんの人に助けられ、色々お世話になり、感謝している。

しかし、その反面、人間のいやなところも知った。はじめは、命さえあれば…などと思っていたのが、今度は食べ物、おいしい物、暖かいものがほしい…、どんどん贅沢にわがままになっていく自分がある。みんな困っているのは同じなのに、後の人の事を考えずに食料をもらっていく人、我先にとばかりに色々なものを取っていく人。体の不自由な人や老人のような弱い人たちがどうしても取り残される。あっちの方が多いか少ないとか、もっといいもの、もっとたくさん、もっともっと…。どうしてそんなに欲が強いんだろう。人間というものは、次から次へと欲望が出てくる。自分も含めて、人間は卑怯である。弱い。誰かを羨んだり、腹を立ててみたり、誰かよりは優位に立ちたいと思ってしまう。困っている人のために何かしたいが、全部自分を犠牲にすることはできない。

そして、自然の恐ろしさを知った。ほんの20秒であらゆるものを壊し、たくさんの命を奪い取ってしまった。我々はぜいたくに慣れてしまっていた。人間の横柄さはますますひどくなっていた。そういうことに対して、警告を発したのかもしれない。やはり自然は偉大である。素晴らしいものだが、残酷でもある。誰も壊したり、克服したりできないものだと思う。

今、家の周辺は、空き地が多くなった。以前建物があつた所に駐車場ができたりしている。まだ、壊れかけたままの家もある。私の両隣も

全壊だったので、誰も住んでいない。人が少なくなったような気がする。みんな、どこに行ってしまったんだらう。戻ってきてくれるのだろうか。小学校の前の文房具屋のおばちゃんも、家がつぶれてしまって、今は掃除婦をして生計を立てている。家も仕事も、家族までも失った人が、たくさんいる。本当に気の毒に思う。風景だけでなく、いろんな事が変わってしまった。地震の後遺症は、まだまだ残っているのだ。しかし、新しいビルや家も建ち始めている。新しい町が出来始めている。確実に前に進んでいる。

### 大好きな神戸に

今でも、地震のことを考えると、涙が出てくる。二度とこんなことがあってほしくない。しかし、だんだんと地震直後の物を大切に思う気持ちや人への思いやり、張り詰めていた気持ちが薄れていっている。

人には想像力があって、相手を思いやることができる。想像力を働かせれば、困っている人々の苦しさや痛さが少しは理解できて、心により添うことができる。あのときは思いやりがあった。人と人が助け合わなければならなかった。人間には思いやり、すなわち愛が必要なのであるということがわかったはずなのに…。

そしてあのときは、何かしら一生懸命に生きていた。今も一生懸命だが、以前のように当然のことが当然になり、毎日を過ごしている。それは仕方ないことなのだが、何が大切なのか見失ってきているように思う。

当たり前前が当たり前でなくなったあのときに、人間の原点、本質的な所を考えさせら

れた。あのときのひたむきな気持ちを忘れないでいたい。新しい何かを創っていくことは素晴らしいことだ。本当に大切なものが、人間の温かい心であるということを中心にとめて、生きていきたい。そして、私の大好きな神戸に生まれ変わっていくことを願っている。

最後に、地震について文章を書く機会を与えてくれた研究会に感謝したい。何か地震について、自分なりの文章を残しておきたかったが、どこかへ投稿する気もなかったし、原稿の締切がなかったら、この文章は一生完成しなかったと思う。また、改めて色々な事を考える機会にもなり、本当に良かったと思う。



## 余

## 波

本山第三小学校 櫛濱康代

震災から逃げ回っていた身には、震災後の職場での混乱の時期の記憶は乏しい。とにかく、見るもの、聞くもの、殆どが私の想像の領域を越えていた。

1995年1月17日午前5時46分、突然突かれ、揺さぶられ、私は布団を頭から被り、「何だろう?」でもない、「何事だ!?!」でもない、「?!?!」と思っていた。何かパラパラ頻りに布団に落ちてきていた。

出口を確保し、靴を履き、非常持ち出し袋を掴み、手近のコートを肩に掛け、近所の公園に避難した。炎のせいか空が暗赤色の夜明け前。辺りには底知れぬ不気味さが漂っていた。ひたすらうろたえる人、冷静な人、祈る人。揺れる揺れる揺れる……。

今日は、朝のお茶当番の日なのになあ。

実家はどんな様子になっているのだろう。

肝心の小銭が無い。一度帰宅しよう。無事にまた避難できるだろうか。

見知らぬもの同士、声を掛け合う。結婚と同時に入居して7年になるが、同じマンションの住人でも、震災後初めて喋る人が大半だった。

電話で安否を尋ねるよりも、訪問したほうがいい。実家へ。自宅から800メートルほど離れた私の実家は全壊だった。しかし、両親とも軽い怪我で済んだ。私たちの様子を見に行った帰りにコンビニエンスストアで食料を調達したという父、水の汲み置きを運び出したらしい母、さすが昭和一桁・大正生まれ、逞しい。実家か

ら10メートルと離れていないJRの高架が、ぼっきり折れて地面に叩きつけられていた。

とりあえず、もう少し荷物を持ち出しておきたい。自宅へ向かう。

近所の高等学校の運動場では、ハンバーガー店からの提供を受けたパンが、無料配付されていた。両親の分も受け取り、一度実家へ戻ったあと、自宅へ。

通話可能な公衆電話を捜して走る。その傍らで、生き埋めのまま亡くなった方が1人や2人ではなかったことを、震災から数日以上経過して知った。夫は、大阪の会社に漸く電話がつながり、大阪市内の状況は少なくとも此処よりはましなことがわかった。

自宅近所の中学校のアリーナは、既に人で溢れ返っている。しかも、校舎が部分的に倒壊している。ああ、我が母校。そのため、ここに居るのは危険だと判断した。電気も水もガスも当分は望めそうにない。実家へ行ったが、結局、午後1時50分、私と夫とで御影から大阪へと歩き出した。

ほんの数メートル先に死体が転がる。至る箇所ですぐの臭いが立ち込める。その臭いの中、自動販売機で煙草を購入する族がいる。そういった、何でも有り状態の中を私たちは黙々と歩いた。また、此の街に戻ってこられるだろうか。

「西宮市役所」の「市役所」の文字に親近感を覚えて中に入ると、水が水道から流れている。周辺では、信号機も点灯している。自動販売機

で飲み物を手にできることが、この時は不思議に思えた。次は何処で入手できるのか分からない。私は、スポーツ飲料の缶を宝物のように暫く抱えて歩いた。

朝からパンとほんの少しの飲み物しか口にしていけない。空腹感は全く無い。しかし、尼崎市内でラーメン屋に入った。こんな状況の中で1人しか出勤してこなくても営業してる心意気がいいじゃないか。変だけど。店内でその日初めて見るTVに映し出される神戸の惨状に、吐き気を覚える。やはり、食べられない。不味かったせいだけでは無かろう。空腹でも満腹でも無い。

歩き続けた。

大阪市内に入ったところ、佃で路線バスを発見、乗車した。バスの揺れさえも、地震の最中を彷彿させ、ひどく恐ろしくてたまらない。国道2号線沿いを中心に、神戸市東灘区御影町から実に20キロ余りを歩き通したことになる。

何件か電話で当たり、午後8時過ぎ、漸く大阪市内のホテルに宿を取る。側には、半月後に学校事務職員臨地研修で訪れる予定だったビルがある。蛇口から水が充分に出る。ごめんなさい。時間の経過毎に五感が蘇る気がする。

翌朝の大阪は通勤の人々が闊歩していた。皆ごく当たり前のようにそうしていた。昨日の私の体験は幻なのか。朝食は、身の回りのものを購入しがてら、外で食べた。食欲は相変わらず無いのに、危機感からか、兎に角食べられる。足の豆が潰れ、歩き辛すぎる。

2日後、京都にある夫の実家に向かった。電話局のトラブルだそうで、まだ私の職場である港島小学校に電話が繋がらない。電話局の空し

いアナウンスが聞こえるのみ。午後4時、漸く繋がる。

次の日、実家に向かった。西宮北口から徒歩で行った。高等学校に避難していた。我が母校に、こんなことで、また足を踏み入れることになろうとは。

1月21日、出勤可能な職員だけ集合をとのことだったが、通勤の手立て無く、休んだ。

越前屋俵太氏の事務所から安否を気遣う電話があった。神小事創立40周年記念行事を済ませた後なのが、ささやかな救いに思われた。

1月27日初出勤。京都から片道4時間半。たくさん職免を取得しながら出勤する日々。

風邪や、判断力の低下や、価値観の変化。道路の寸断。瓦礫の山。そんな中、電柱に、誰が貼ったかわからない「一緒にがんばろう」や「物見遊山でカメラ片手に来るな！」の貼り紙にすら励まされて、通勤した日々だった。

徐々に、救援物資もボランティアも減り、被災地に関する報道も減っていった。リュックサックやカートに水や野菜や果物を一杯に詰め込んで電車やバスに乗っても、以前のように自然に手助けしてくれる人は確実に減り、轟めく車内で露骨に迷惑そうな顔をする人もいる。

カメラを手にピースサインをとる人を、少なからず目にした。被災者の虚ろな表情が、水の運搬に疲れ果てた身体が視野に入らないのか。TVで筒井康隆氏が、「世間は下町、人類は皆寅さん」と言っていた。寅さんを余り知らないが、多分、寅さんは減ってきた。

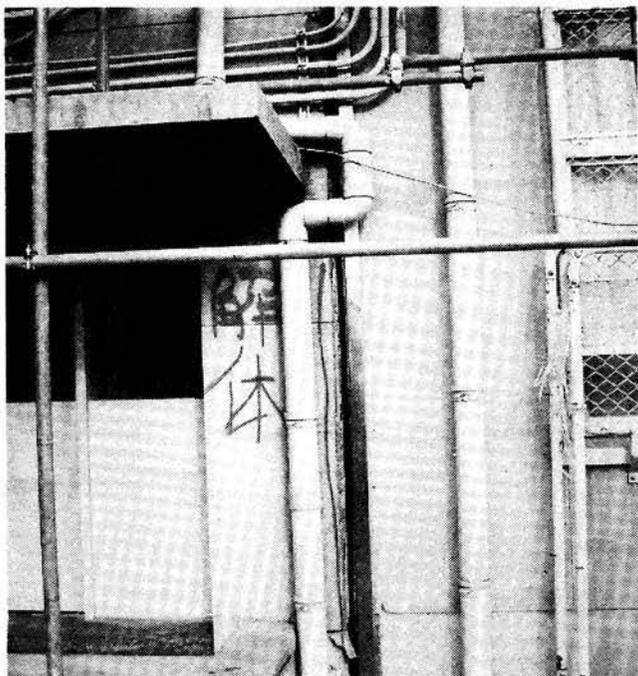
2月1日から授業再開（午前10時30分～12時）となり、職員会も頻繁に開かれていた。震災前は1,500名いた児童が、2月上旬には1,000名ほ

どに減少していた。増大する転出事務のために、全教員約60名の中で、各学年1名の転出係が新たに決められた。

事務処理方法も含め、情報がなかなか伝わってこない。何にどう対処していいのか。他の事務職員の様子も分からない。情報提供どころか情報伝達すらスムーズには行えない。先が読めない。表面的なことしか遂行できていないという気後れと緊張感と危機感と。しかし、限られた時間で処理できる範囲でしかできないという事実は如何ともし難い。だが、通勤疲れのおかげで、種々思い煩う余裕すら無い。2月27日簡易給食開始。

人事異動は今年も行われた。私も慌ただしく日本一の児童数だった港島小学校を後にした。

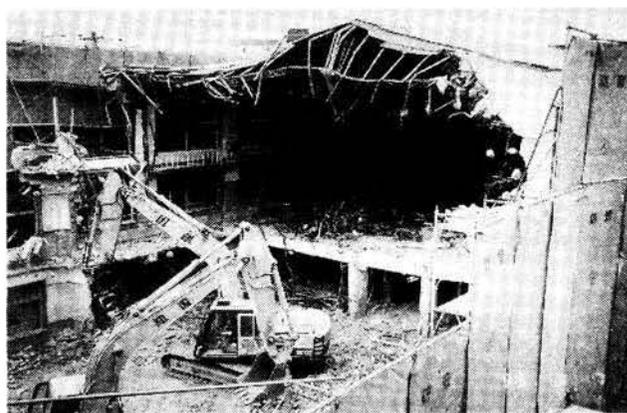
港島小学校着任の時は、事務職員複数配置校への異動ということに甘え、事ある毎にパートナーにいろいろ尋ねながらの執務が可能（ご迷惑を……）だったので、今回の気分は「初めての異動」だった。



グラウンドに広がるテント村

転任先の本山第三小学校では、ヘルメット・マスク・デイパック・トレッキングシューズという被災地ルックを止め、通常時のスーツ姿に戻って、通勤・勤務することにした。

4月6日に開催された市教委による予算説明会は、緊迫した雰囲気にも包まれていた。限られた予算を、例年以上に綿密な計画をもって執行する必要がある。担当者の説明には通常以上の力が込められていた。4月上旬は、音楽準備室の片隅で執務し、また、仮設校舎への備品の搬入作業も行った。



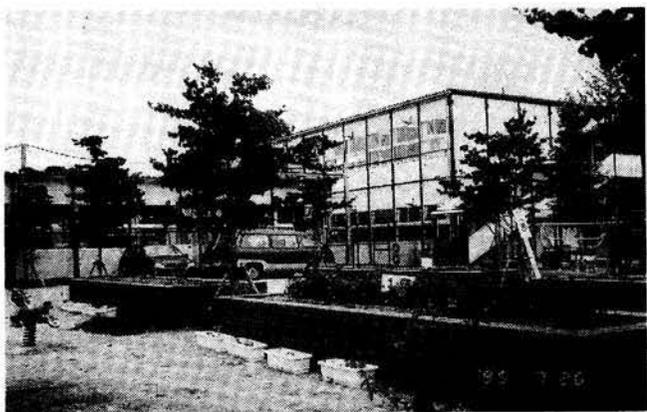
校舎の取り壊しが進む

自宅に関しては、電気は1週間程度で復旧し、水道は3月末に、ガスは4月9日に復旧した。そこで、揺れのために床と敷居との間に挟まったマドラーもそのままの、窓の開閉できない、

天井が曲がった、透き間だらけの、ひびだらけの、ところどころで階下の部屋が見える、壁が一面落下しかかった自宅に戻った。冷蔵庫や電子レンジも購入した。

前任校への通勤手段だったポートライナーも7月31日から全線開通した。ブルーやグレーの工事シートの谷間を走るそれを目にした瞬間、通勤時にかつて車窓から見た朝日に輝く海が、その時のさまざまな思いが、鮮やかに蘇った気がした。

現在、高学年の教室・給食室・音楽室・図工室・理科室・コンピューター室等が本校校舎のうち倒壊を免れた北棟にあり、低学年の教室・心障学級・保健室・管理員室・事務室・校長室・職員室が本校舎の近所の公園の仮設校舎にある。その為、本校舎にも新たに職員室や保健室が設けられた。この状態は、来年度末まで続く。



近くの公園を借りて仮設校舎が建てられた

事務室は広い。校長室と同じ2分の1教室の広さだ。備品も新品が殆ど。国庫補助対象備品がすべて納品されると、すてきなレイアウトになる。ということは、すなわち、本校舎の管理棟が完成した時、3分の1教室の広さにもしかなれば、大変狭い執務環境となってしまう。

災害によって、大事なものを失った悲しみや

同じ様な災害がまた起こるのではないかという恐れ。ふとした時の「揺れている？」という感覚。しかし、自然と常に対峙し共存している以上、何があろうとそれは、乗り越えるしかない。そして、発想の転換。元の状態に戻らないならば、新しく作る。形としては無くなったものも含め、全ての過去の資産を継承し、発展させ、魅力あふれる街づくり、教育環境作りに寄与したい。学校事務職員11年目の私にとっても、今回の災害がもたらした課題は大きい。

(学校事務誌10月号に掲載したものを再構成しています)。



# 支援体験記

有野東小学校 大南 禮子

1月25日（水）

学校給食センターへ通い始めて5日目である。

毎朝、職員朝集を終えるとわが校の女性職員は、近くの学校給食センターへ昼食弁当作りの支援に出張する。今週から授業が再開されたので、専科グループなど時間に融通のきく人達になり、人数が減った。

学校給食がストップしているので、センターの職員や近隣の調理士さん、また地域のボランティアなど大勢の方が詰めかけている。お昼には、兵庫区の学校へ届けられるそうだ。交通事情が悪いので限られた時間内に仕上げなければならない。まるで工場のような熱気である。

ちなみにこの5日間の内容を紹介しておこう。

- 1/20（金）おにぎり 15,000個  
使用米 690kg 従事者 78人
- 1/21（土）おにぎり 12,000個  
使用米 660kg 従事者 103人
- 1/23（月）おにぎり 7,800個（2コパック）  
使用米 360kg 従事者 125人
- 1/24（火）おにぎり（炊き込み）3,000個  
炊き込み飯弁当 1,500個  
使用米 330kg 従事者 103人
- 1/25（水）副食付弁当 1,500個  
炊き込み飯弁当 1,500個  
使用米 330kg 従事者 83人

一応私達の応援は、月末迄で終わったがセンターでは2月7日迄、温かい汁物も加わった出

前が続いたようだ。

1月26日（木）

昨夜、生まれて初めての宿直勤務を経験した。しかも他校においてである。本山第二小学校は、校舎が一棟を除いて立ち入り禁止の被害を受けた。3時頃学校に着いて仕事の指示を受けた。寒空の運動場には沢山のテントが立ち並び、被災の一面を知った。

一緒に来たもう一人の若い女性教師と衣類の整理をすることになった。大きなテント小屋の中に、救援用に届いた衣類が雑然と広がっていた。テントの前面を入り口にして、入用の方や持ち込みの方との受け渡しをしているが、整理ができていないので手間がかかってしまう。ボランティアの方もまだ少なく、きちんと仕分けまで手がまわらないのが実情である。

まず赤ちゃん用、幼児用、子供用、男用、婦人用とかに場所をきめて、更に下着、上着、ズボン、セーター、靴下、毛布、タオル等々にまとめて積み上げる。狭い通路の中を右往左往しながら9時頃まで働いた。

ボランティアの青年群が夜回りをしてくれるらしく、たき火を囲んでいたり、まだ余震の続くおびえで眠れないのだろうか、テントの灯はついたままの夜景であった。

特設のテント職員室で、教頭先生やPTAの会長さん、先生方と1時間位おしゃべりに入れてもらった。10時頃、いよいよ宿直の任務であ

る。ここは昼間、医師や看護婦さんが病人を診察される部屋である。高価な医薬品が沢山保管されている。夜、校長先生がここでよく宿直されるらしい。久しぶりに昨夜は自宅でゆっくりお休みになれたのだろうか。私達もひょっとして、テントで寝るのかなと思っていたので、幸せだった。朝になって洗顔のため運動場に出ると、校長先生はもう出勤されてテント巡りをなさっていた。丸一日に満たない滞在だったが、現地での朝、昼、夜を目のあたりにした貴重な体験だった。

## 2月17日（金）

北区ひよどり台にある消防学校へ救援物資の整理作業に出かけた。はてしなく広い運動場に仮設の倉庫が幾棟も建っていた。ここには、各地から寄せられた様々な救援物資が、品物別に分けて置かれている。救援物資の集積拠点である。作業が終わってから車で回ったが電気製品から食料品までまるでスーパーの保管倉庫並である。

さて、わが校より抜きの整理得手7名は体育館へ入った。一同「わっ！」と声を上げた。バスケットリングが両サイドに見えるので、体育館だと思えるが、全館が衣類の山だ。既に二人の女性ボランティアの方が作業中で、新入りの私達は仕事の手順を教わった。

何分こちらは物資の拠点だけあって、その量たるや規模が大きい。一つのダンボールに同じ種類の衣類を詰めていく作業である。一箱毎に「何が幾つ入っているか」を書き込んだ用紙を貼り付ける。ズボンでも「毛」の上等から「綿パン」「ジャージ」まで更に「大人男性用」、

「子供用」、「婦人用」などに分別する。

きれいなセーターを見つけて「うわっ！こんなに欲しいわ！」とか「これ手編みよ！」の声に思わず手を止める。でも中にはしみがついていたりして、とても人にはあげられない物も混じっていた。

午後1時に学校を出て、帰り道が渋滞の中7時過ぎにまた学校へ戻った。善意のボランティアの手が、ここでも待たれているのを知った。

## 2月28日（火）

炊き出し支援5度目の日である。いよいよ今日が最終日である。

炊き出しの前日は女子職員が家庭科室に集まって材料の下準備をする。現地では場所もそれに水さえ不自由なので、野菜を洗ったり刻んだりとはとてもできない。

昨日から給食が再開された。3月までは簡易給食で何とも味気ない。避難住民の方の気持がよく分かる。

本校職員中心の炊き出しを、これまで8回実施してきたが、その主な献立は汁物である。配給されるお弁当が冷えているので、少しでも温かい物を、また不足がちになる野菜を多くと考えると汁物がふさわしい。PTAなどの呼びかけで近隣から大根、白菜、ねぎ、人参、玉ねぎ、芋類などが沢山持ち込まれた。それらを上手に使った献立を考えながら、ひととき家庭科室に活気がみなぎる。

今日が最後だから、沢山残った大根でメニューは「おでん」と決定。大切にしたい大根をいくつかのビニール袋に入れる。カンパで買った「ちくわ」と、これまたいただき物の「こんにゃ

く」が中味だ。今まで一番多く作ったのは豚汁で、味噌が残っている。みりんを加えて練り上げ「でんがく味噌」を作った。白菜も三日前に漬けたのが丁度食べ頃になっている。

いつもは、隣の中学校から借りている「かまど」と「大鍋」を持ち込んでの出動だが、今日訪れる西須磨小学校は、それらが備わっているらしく運搬が楽だ。2月も終わりになって、学校での避難住民が、13万人から8万人に減った。今日は2～300人位とか、今までの炊き出しに比べて半分以下である。

車3台を連ねて現地に着いたのが3時頃だった。常駐してお世話をしておられる方から、卵の使用申し出があり、献立に入れさせてもらった。急きょボランティアの手を借りて、ゆで卵を作り煮こんだ。とても豪華な献立になった。

5時になると夕食支給の放送が流れる。「今日は有野東小学校の先生方によるおでんがついています」のことばも添えられていた。手渡すおひとりおひとりから、「ありがとう」「ありがとう」とお礼をいわれて、一同さわやかな満足感に浸った。

大震災とともに決して忘れないだろうし、得るところの多い支援体験だった。寒空の中、いつも着たウインドブレーカーの上下は、煮物の汁があちらこちらにしみ込んでもうとれない。特価8,800円也、強いて失った物を上げるならこれぐらいだろうか。



## ガンバレ！ K O B E

成徳小学校 大 里 啓 三

あの日、私はいつものように5時30分頃に目を覚まし、新聞を読んでいました。読みはじめて15分ほどたった頃、今までに経験したことの無い大きな揺れを感じました。その瞬間は何もできず、そばの筆筒に手をやるだけで、このまま建物ごと押しつぶされてしまうのではないかと思いました。すぐに停電し、懐中電灯を取り出して照らしてみると、背の高い家具が倒れていました。大阪に住んでいる私は、その時は、まだ、神戸がこんなになっているとは思いませんでした。2時間ほどで停電が復旧し、テレビをつけて、はじめて神戸の惨状を知りました。私の家の付近では、液状化現象がひどく、地盤が沈下して家が傾いたり、道路が大きく波打って、ひび割れていました。

「今日は給料日だ！」私は何としても学校に行こうと国道2号線まで出ましたが、すでに神戸方面はひどい渋滞で、引き返さざるを得ませんでした。家にもどり、学校と銀行に何度も電話をかけましたが、どちらも通じません。結局、学校と連絡がとれたのは2日後の19日でした。その間にもテレビは次々と神戸の状況を伝えています。自然と涙が溢れてきます。そして何もできないでいる自分に苛立ちを感じます。

阪神電車が甲子園まで開通した23日、私はリュックに食料や飲料水、ウェットティッシュなどを詰め込み、電車と代替バスを乗り継ぎ、学校に来ることができました。バスから見える町並みは神戸に近づくにつれてひどさを増してきます。

現実にこの景色を見たとき、テレビを観ては、あんなに涙を流したのに、涙ひとつ出ませんでした。涙など流している場合ではないと思いました。

学校に通じる道はどれも倒壊した家屋でふさがれていましたが、ようやく何とか通れる道を見つけ、学校に着きました。学校は避難者でいっぱいなのに、驚くほど静まりかえっていました。じっと悲しみに耐え、不安に耐えていたのでしょう。職員室に入ると、そこは安否の問い合わせで、電話がひっきりなしに鳴っていました。夜間は男子職員による宿直体制が組まれていました。宿直の日は、朝まで、1,000名近い避難者名簿のデータ修正作業をしたり、夜中の2時頃に届いた2万個もの救援物資の食器の運搬をしたりしました。

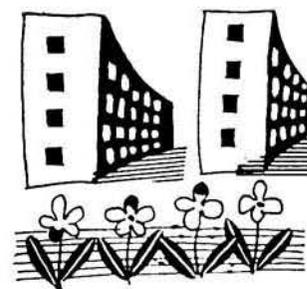
25日になって医療チームが事務室を使うことになりました。看護婦と保健所の職員が「お年寄りに精神分裂症状が現れ始めている」とひそひそ声で話しているのを聞きました。事務室は震災当日のそのままの状態でしたが、学校では一番綺麗な部屋。お年寄りのショックがどれほど大きいものであったかを思うと、哀れで涙が出てきました。私は少しでも安らげる場所を提供しようと、震災の跡が微塵も残らないように、必死に事務室をかたづけました。その日から事務室は「こころと悩みの相談室」になりました。

2月の末頃から震災関連の書類が次々と送られてきましたが、事務室はもちろん、職員室の

私の机も、地図や名簿の置き場所になっていて使用することができませんでした。締め切り日に間に合わさなければ、確実に処理しなければと、一時はパニック状態になりました。この時ほど、落ちついて仕事のできる事務室の有り難さを痛感したことはありません。情報も不足していました。サービスの取扱いはどうすればよいのか、防災指令3号はいつ解除されたのか…等々、事務職員の耳にはなかなか入ってきませんでした。

4月になって、ようやく平常の状態にもどりましたが、宿直体制は8月20日まで続きました。避難所としての役目も11月3日をもって終わりました。この震災で、全国各地から寄せられたボランティア活動もさることながら、学校が果たした役割は大いに称賛されるべきものでしょう。無くしたものは計り知れませんが、多くのことを学びました。人のあたたかさを知りました。人の痛みも知りました。普段なら顔を合わせても知らなかった地域の人達との交流もできました。神戸でも被害の大きかった私の学校のまわりでも、復興の槌音が力強く響いています。街角で出会う人々の会話の中にも震災前のような笑顔がもどってきました。

ガンバレ！ K O B E



## その瞬間

渦が森小学校 山口 仁 美

平成6年秋、猪名川町で群発地震発生と新聞やTVで報道されていた。8階に住んでいると震度1でもよくわかった。でも、なぜ猪名川町なんだろう？ いきなり大きいのがくるより、群発でエネルギーが発散されるほうがいと家族で話した。

平成6年初冬、猪名川町の群発地震は、ほぼ終息に向かったと、新聞の片隅にのっていた。

平成7年1月10日頃、新聞に近畿地方でも地震の可能性は大きいと報道されていた。しかし、その時はまだまだ先の話だと皆が思っていた。

そして、――。

平成7年1月17日、午前5時30分過ぎ、両親が早朝登山に出かける音で目が覚めた。夏にこの家に越してきてから、続いている日課だ。まだ外は暗い。もう少し眠れる。今日は三連休明けで、給料日だ。でも、起きるにはまだ早い。

トン。あ、地震だ。え？ 何、この長い縦揺れは。まだ収まらない。これで横揺れになったらどうなるんだろう。8階だから、揺れは地上より大きいし長いだろうな。震源はやっぱり東海かしら。でも、この揺れはちょっと違うんじゃない。

わ、横揺れが始まった。あ、ガラスが割れる音。玄関の人形ケースが落ちた。非常ベルがうるさい。洗濯機の中で掻き混ぜられてるみたいだ。耳元で太鼓とシンバルとティンパニーがいっぺんに鳴らされてるようだ。まだ収まらないぞ。

家がうなり声を上げた。倒れる？ まさか。

いくらなんでもこれはひどい。これが東海地震だったら東京はどうなってるの。

外がほんのり明るい。揺れは収まったようだ。東のほうに火事だ。やっぱり地震で火事は起こるんだ。

妹が起きてきた。両親がいないと言っている。登山に出かけたとは知らなかったらしい。

電気が見つからない。確か両親の部屋に携帯ラジオ付ライトがあったはずだ。比較的すぐに見つかった。スイッチが入った。NHKだ。地震のニュースだ。大阪、震度5。あれが震度5？

アナウンサーが神戸を呼び出している。『神戸、出ません！』え？ 神戸が出ない。『震源がわかりました。淡路・北淡町です。』淡路？ 東海地震じゃなかったの！

電話が鳴った。淡路島の母の友人からだ。庭の灯籠が倒れた位だという。南淡路だからかしら。それからすぐに電話は通じなくなった。

ドアもスムーズに開き、お隣の無事を確認した。明るくなるまであと少し。

両親が帰ってきた。路上で遭遇したらしい。母が頭から血を滲ませている。瓦に当たったようだ。これ位ですんでよかった。

居間はタンスが倒れ、TVが倒れ、花瓶が倒れ、家具がすべて移動していて歩きにくい。台所はもっと悲惨な状況だった。冷蔵庫が倒れ込み、食器棚のガラスはすべて割れていた。

洗面所のドアが開かない。やっとこじあける。化粧品の瓶がすべて落ちていたが、割れていた

のが一つもなかったのは、ちょっと不思議な感じだ。

やっと、外が明るくなった。今、一番日の出が遅い。散らばった物の中から眼鏡を探し、窓の外を見た。まだ、窓のそばまでは行けない。

うちが曲がってるのかしら。どうも変だ。

廊下や台所はガラスや食器が割れて、危なくて裸足で歩けない。家族総出でガラスを拾い、食器を片付け、家具を起こす。たんすが壁を直撃し穴が開いている。ピアノが壁にぶち当たった跡がある。TVはあらぬ方に飛んでいった。

片付けながら、出勤しなければいけないのだが、バスは動いているのかしら、少し遅れても仕方がないか、等とのんきに考えていた。

交通網がストップしているとラジオがいていたので、出勤をあきらめた。

家の中が少し落ち着いたので、ようやく外を見る余裕ができた。南の一戸建てが崩れていた。墓石が軒並み倒れ、電柱がすべて折れている。駅前のマンションが傾いている。爆撃にあったようだ。その時には、まだ事の深刻さが飲み込めていなかった。

やっと、外へ出た。ガス臭い。親が昼間使っていた小さな家は倒壊していた。この地震の発生が数時間後だったらと思うとぞっとした。

余震がまだ続いていた。日没になると、身動きがとれなくなる。近所の学校は人であふれているらしい。今日は皆で肩を寄せあって眠ることにしよう。幸い、我が家はどうにか持ちこたえられたらしい。情報が欲しい。

夜、たき火を燃やす人たちがいる。満月の明かりとたき火と。電気が発明される迄は夜はこ

んな感じだったんだろう。

六甲山の上が明るい。自家発電なのかしら。渦が森のあたりは電気が回復したらしい。でも、阪急より下のあたりは真っ暗だ。電気も止まり水も出ず、もちろんガスも止まったままだ。日没と共に布団に入るしかなかった。

その後、我が家のライフラインの復旧は遅々として進まず、電気はほぼ回復したと報道された日から2日後の1月下旬、水は2月下旬、ガスにいたっては3月下旬にやっと復旧した。

この間、全国から復旧にやってきてくれた関係者の方々の尽力には感謝するしかない。各都道府県名を大書したパトカー・消防車・救急車等々。とても力強く感じた。黙々と歩いて到着するボランティアの方々。神戸は大丈夫だと実感した。

今、焼け跡や倒壊した現場はほぼ更地になり、新しい家が建とうとしている。しかし、仮設住宅や待避所の解消、区画整理や集合住宅の建て替え等、問題はこれからだ。以前の面影を残しつつ、より良い神戸に再生できるよう祈っている。



運動場に地割れの傷あとが残る

## 阪神大震災に思う

甲緑小学校 山本 嘉代子

そろそろ起きようかな……。暗闇の中で目をこすりながら、立ち上がろうとした時、グラッと大きく揺れて、私の身体は爆音とともに東へ飛ばされたかのように思った。頭が襖を破って押し入れの中に入ってしまったのかな？ と思う間もなく、ガタンと大きな音とともに部屋全体が30センチ程下がり、続いてガタッ！ガタッ！と上下左右に大きく揺れ始めた。

「地震だ！」しばらくしてふとんをかぶり、頭を抱えていた私にはガタッ、ガタッと不気味に振動し続ける揺れが、大きな地震だと気づくことができた。「はやく、おさまらないかなあ」。少し小さく揺れ始めたのだろうか、そっと布団の中から頭を出すと、ガタッ！ガタッ！

「どうでもいい」。布団の中でしばらく身構えることにした。

不思議なことに、私の家族のことは全く頭に浮かんでこなかった。すっかり忘れていたと言えるだろう。まさに極限の恐怖に接した瞬間、自分自身の本性に気づいた。

1月17日午前5時46分、これまで経験しなかった阪神大震災の体験である。

10分程して、暗がりの中を恐る恐る手探りで、やっと入り口の襖を捜しあて、廊下に出ることが出来た。電気のスイッチに手をかける勇気もなく、壁板に手をあてて、ゆっくりゆっくりと階下へ。この家に移り住んで以来15年余り、いつもこの階段を降りることから私の1日が始まり、この階段を上りきって1日が終わるのであ

る。体も、足も、目もしっかりその間隔を覚えていて、暗闇の中でも意外と抵抗なく階段を降りることは可能であるが、時折グラッと揺れ始めたのには閉口した。

私は、もうすぐ9歳の誕生日を迎える雑種の芝犬を飼っている。毎年10月になると、寒さから守るために、夜だけ玄関に入れてやるのが習慣になっていた。ラギーは毎晩、玄関のマットの上で眠るのが日常である。本名は「如月」という。

階段の途中で「ラギー！」と大きな声で呼ぶと、「ギャー！」と何とも言い様のない声を出す。如月も、これまで経験しなかった大きな揺れで、声をたてることも出来ずにじっと耐えていたのだろう。普段は、少しの物音にでも敏感に反応して吠えたてるのに、今回ばかりは鳴き声も出さず、私の叫び声にはじめて大きな声を出した。「もう大丈夫よ。おばちゃんがいるから……」。私は思わず駆け寄って、如月の頭をなでてやった。鎖でつながれた小さな12キロの体にはあまりにも刺激が大きかったのだろう。おなかを起伏させて興奮しているのがわかる。私は懐中電燈を持って如月を抱きあげたとたん、急に勇気が出てきた。今までおじけずいていた自分はどこへやら、「大丈夫、大丈夫」と何度も何度も自分に言い聞かせて、2階へ戻り、早速、如月のために座布団を用意して私の手が届くところで寝かせてやった。

少しばかり揺れもおさまったかに見えたが、

時折、ガタッガタッと上下左右に揺れる。その度に如月は座布団に伏せた。私は頭からスッポリと布団を被り、如月にも被せてやった。

階段の窓からうっすらと明かりがさし始めた頃、揺れもやや間隔をおいて優しくなった。恐る恐る雨戸を開け、バルコニーから周りを見渡すと、別に変わったところは目に入らない。私の頭の中には、電柱が傾いていたり、屋根がとんだり、植木が倒れたり、何よりも目の前のバルコニーが壊れていたり等、悪いことばかりを想像していた。「ああ よかった。ラギーよかったね。助かったみたいよ」。

如月は揺れがおさまると、布団の角を探して鼻を突き出し、匂いを嗅ぎ、おいしそうに噛み始める。掛け布団のカバーが如月の歯形で2箇所破れた。

玄関より如月と一緒に外に出る。ザッと見渡したところ別に大きく変わった様子もない。西側へ回ると、予想していた通り物置が倒れていた。植え込みの中をよく見ると薄暗い木の間で、灯籠が3箇所に分裂している。春になると一斉に咲き誇るさつきの上に、無造作にも灯籠の頭が乗りかかっている。ありったけの力で重い石を動かしてやると、さつきは元の通り元気な姿に戻った。全く自然の生命力とは強いものだと感心させられた。

家の周囲を一周した後、中に入って窓を大きく開け放った。異臭はしないがガス漏れが気になったからである。電気をつけてびっくり、居間の畳一面水浸し、床の間の若松がひっくり返り、大きな壺に生けていた南天が横倒し、幸い壊れてはいなかったものの、洋服ダンスの上から人形ケースが無残な姿で落ちていた。あわて

て人形を抱き上げると、ケースは壊れているが人形は無傷、20歳の時に作った思い出深い日本人形、引っ越しの時にも持ち歩いていた人形、今では私の宝物の一つだ。本当に無事で良かった。家全体が大きく揺れ動いたように思えた大地震だったのに食器棚、レンジ台、洋服タンス、本箱等、みんな昨日のままだった。時折グラッ、グラッと小さく揺れはするものの、先程までの怖さは消えて、私はすっかり平常心に戻っていた。

今日は給料日、学校は大丈夫かな？ダイヤルを回しても話し中の信号ばかり、時計を見ると7時半を過ぎていた。急いで朝食をすませて、8時過ぎに自動車で出かけることにした。家の前の道路には、所々亀裂が見られるものの大きな段差は見当たらない。しかし、しばらく走ると道を横切ってひびが入り、道路が盛り上がっている。電柱が斜めに傾いていたり、側溝が崩れかけている箇所がみられた。遠くを眺めると、瓦が落ちて板が剥きだしの屋根や門扉が傾きかけている家が見える。道路が大きく陥没している箇所は、もうすでにバリケードで囲まれていた。

有馬口駅構内では、電車が2車両向かい合っただけで止まったまま。車で出かけたのは正解だった。さすがに、すれちがう車の数は少なく、40分程で学校に、到着することが出来た。

出勤していたのは、校長先生、教頭先生、男子の先生1人だけだったが、いつもと変わらない職員室の様子を見てひとまず安心、事務室も昨日のままで別に変った様子もない。しかし、職員室のテレビの映像を覗いたとたん、私は、今回の地震がこれまで経験しなかった、恐ろし

い地震だという事に気付いた。阪神高速道路が折れ曲がって倒れているのを、繰り返し繰り返し映していたからである。一瞬、画面の映像が本当の出来事だとは理解できなかったが、雑音の中から聞こえるアナウンサーの叫び声にも似た声で生中継だとわかった。

銀行は大丈夫かな？ とにかく銀行まで行ってみよう。男の先生が立派な自家用車で送ってくださった。途中、屋根瓦の崩れている家がポツ、ポツと見えるものの、行き交う人々が全く見られないこと、対向車が少ないことを除けば、いつもの住宅地の風景がガラス越しに見える。

銀行のシャッターは閉まったままだが、通用口の前で、2、3人が怪訝そうな顔をして並んでいる。5分程待っていると中から銀行員らしき人が現れ、本店のホストコンピュータが壊れて連絡不能とのこと。仕方なしに通帳と出金伝票を手渡して車に戻る。

「三宮周辺も、被害が大きいようですね」「この辺は大丈夫みたい」と話しながら、大通りの両端にギッシリと止められた自動車の間を通り過ぎ、やっとの思いで駅前の交差点を抜け出すことが出来た。道路はまさに車の行列である。路上駐車車の間を信号の合図通りに車が行き交う。遠回りをして有馬街道を北へ走り、学校に着いた時には一人、二人出勤者が増えていた。しかし、午後になっても、連絡のとれない職員が数人いたようである。

職員室のテレビは相変わらず、阪神高速道路の折れ曲がった映像や高層ビルの崩壊を何回も繰り返し繰り返し映していた。早朝とはいっても、大型車や自動車が何台か走っていただろうに。その瞬間、運転手の心情を思うとゾッとし

て、思わず寒気がよぎる。続いてコンクリートの下敷きになった自動車や崩れ落ちた道路上に半分乗り出して止まっているトラック、折れ下がった道路等、映画のワンシーンかと思われる光景を次々と映し始めた。これまで見たこともない画面にしばらく見入っていたが、いつまでもテレビに釘付けになるわけにもいかず、事務室にこもった。年度末をひかえ、1年中で一番忙しい3学期、今年は特に慌ただしくなりそうな予感がした。出来ることから少しずつでも片付けておかなければ……。

2時過ぎに学校を出る。いつもと変わらない沿道の風景も何となくひっそりとしていて、暗い。どんよりと曇った空、人影が全く途絶えたことも手伝って、いっそう寂しさを誘う。今にも大きな地震が襲いかかってくるような錯覚すら感じながら帰路についた。家の周りにも人影は、全く見当たらない。シーンと静まり返った夕暮れの街道を白い車が走って行く。注意して耳を傾けると、「地震による二次災害を防ぐために、ガス栓を止めます」という大阪ガスの通報車だった。以後約3週間、ガスを全く使用出来ない日々が続いた。

12時を過ぎても、テレビの画面は悲惨な震災の映像を映し続けていた。100万ドルの夜景と謳われた神戸の市街地が、無残にも暗闇に包まれ、火災発生で次々と燃え広がっていく。右に左に火の手が上がり、一向に消火している様子も見られない。「海水でもかければ良いのに」「消防自動車はどうしているの」、私はテレビの画面に向かって、叫んでいた。

明日はどんな朝がやってくるのか。火災はおさまっているだろうか。まさか、私の家にまで

迫ってこないだろう。今日一日の恐ろしい出来事をあれこれと思い巡らしながら、懐中電燈と携帯ラジオを枕元に並べて眠りについた。

ガスを全く使用できない生活が1週間程過ぎたある日、不安な日々を過ごしていた私に、サークル活動で知り合った元中学校教師の方から「お風呂に、どうぞ、お入りに来てください」と弾んだ声でお誘いの電話。震災以来、自宅の被害が少なかったのも、ご近所の方や知り合いに、毎日入浴サービスをしておられたのである。疲れ果てていた私は、暗闇の中で救世主に出会った時のように、目の前がパッと明るくなった。感謝の気持ちで胸が一杯になり、声も、受話器を持つ手も震えていたように思う。

大地震で、家屋が崩壊し、ライフラインの全てを断たれた避難者にとって、何よりも勇気づけられたのは、給水車、炊き出し隊、そして自衛隊による仮設風呂のサービスであっただろう。各地から集まったボランティアの人々の温かい励ましの姿が、避難所での生活の支えになったことは言うまでもない。

マグニチュード7.2、未曾有の大都市直下型大地震に見舞われた兵庫県南部地域は、一瞬にしてガレキの山となった。全半壊、全半焼42万世帯、犠牲者5,500人、避難者数30万人以上、あまりにも無残な光景を想像することが出来ただろうか。

高速道路、高層ビル、ライフラインの耐震性、住宅の再建等改めて地球上に住む私たちの住み方が今回の震災で大きく問われている。地球の奥底は見えないけれど、その根底にひそむ自然の恐ろしい破壊力と、はかりしれない恐怖の世界を少しだけ覗いてみたような気がする。今年

も六甲山に美しい紅葉の季節が訪れた。街路樹の銀杏は、すっかり葉を落として冬支度を始めている。



## 未曾有の経験

多聞東小学校 北野 公昭

連休2日目、明日は給料日だ。今年もしっかり頑張ろうと心穏やかに床についた。

1月17日、二条の閃光と地鳴り、間を置かず大きな激震で目覚めた。

何はともあれ今日は給料日だと思い、学校へ急いだ。辿り着いた学校は、施錠されていたはずの校舎の窓が全て開いていた。柱は大きく割れ、壁も剥げ落ちていた。

余震の続く中、事の危険性もわからず、校舎の被害状況を調べて回った。内から見る教室の状態は悲惨そのものだった。まず事務室に入ってみると、文書キャビネットは大きく移動し、引き出しは全開状態で倒れ、書類は散乱し足の踏み場もなかった。上の階が理科室で、水道・ガス設備があり、激しい水漏れのため書類の多くは水浸しとなり、乾くのに2月末日までかかった。コンピューターはほぼ定位置にあり、直接の被害はなかったが、電話回線等の障害や仮設校舎移動などで、一時期を除いて4月17日まで稼働しなかった。

教室の出入口の引き戸は、施錠された2枚1組の状態でも廊下や教室の中に叩きつけられていた。テレビ、ラジカセなど重い物ほど遠くへ(4~5m位)飛散していた。固定式スクリーンの取付金具が引き裂けている教室が幾つもあり、また前面の指導用塗板がはね飛ばされている教室もあった。このような状態のため、窓ガラスも小さく砕けていた。今、柱の被害の大きな場所は、倒壊を免れるため、所狭しと補強用

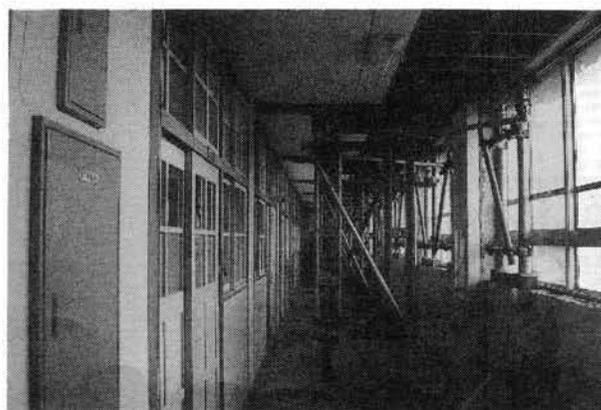
の鉄柱が建てられている。あの震災の時、この教室で授業をしていれば、想像を絶する犠牲者が出たであろうと思うとゾッとした。

この教訓として、事務室、職員室等の上階は普通教室が良いと思った。また、校舎の立体化は良いとしても、教室は出来る限り平面使用を行い、棚・テレビ等は柱や壁に固定することが必要だと強く感じた。そして窓ガラスは割れ難く、併せて小さく砕けないものが良いと思う。

本校は団地内にある学校で、児童数760名、25学級の学校である。避難された方は、多いときには250名位になり、2月中旬まで続いた。転出児童数は170名を越えたが、現在は以前の状態に戻っている。また、震災による就学援助等の受給者も160名位あり、さらに全員が申請すれば倍の300名余りになる予定である。

2月1日より授業が再開された。隣接の本多聞小学校を借りての午後の授業であった。

年度末になって、プレハブ校舎33教室が運動場一面に建ち、4月より平常授業が始まった。



倒壊防止のための補強用の鉄柱

夏のプール指導は、多聞東中学校にお世話になり、後半は本校のプールを使うことが出来た。そのプールも今はプレハブ教室の前面に建設中である。4・5・6月と例年以上に雨天が続き、その光景は水上家屋のようだった。このような現状の中で、子供たちはどうやって遊んだらいいのか分からないようだった。



運動場一面に建てられたプレハブ校舎

体育の授業等は、近くの公園3か所を特別な配慮のもとで活用させて頂いていたが、ある時一番広い公園に仮設住居が建ち、使用出来なくなった。残る2つの公園での授業となったが、学校に隣接する公園とはいえ、道路の関係で移動には徒歩5分位要する。ある日、6年生児童が、最短距離の所に通路があれば体育の時間ももっと多くなるのにと学級会で話し合い、校長先生へお願いすることになった。これは早速、関係機関への申請へと発展している。

不自由な生活を強いられている児童のもう一つの「心」を紹介してみたい。まず私の係わる会計面から言うと、窓ガラスの破損は例年だと1年間に10枚位であるのに、教室の仕様が多少違うとはいえ今年は4～7月で14枚、9～11月で27枚と急増している。また、養護教諭の話によると、校内の怪我についても1学期は7件だっ

たのが9月は12件、10月も同じように増加傾向にあるという。

自然現象とはいえ、この劣悪な環境のもとで過ごす2年間は、子供たちの将来に何らかの影響を与えるのではないかと憂慮し、心寂しく思うと共に、学校建設基準に合致した条件のもとで学べる平成9年4月を待望する。



## メモリー

月が丘小学校 西岡寿子

微睡みながら大きな揺れを感じて、夢か現実か判別しないながら、「地震だ」と思った。

大きな揺れが続く。「これは、大きいぞ」と判断できるようになって、目が覚めた。

ベッドから起き出すこともできず、ただ体を丸め、ふとんをかぶり、屋根が落ちてこないことだけを祈った。真っ暗な中、ガシャガシャと物の倒れる音が耳にはってきた。

揺れがいくぶんか緩やかになって、逃げなければと思い、玄関へ。(乱れた室内をどう横切ったのか…、記憶にない)。

ドアを開けてそっと暗がりを見渡す。寒い。室内へ。再びドアを開け今度は共有廊下に出て階下や周辺の住宅を見渡すが暗くて静かだ。

外に出ては室内に戻り、またドアを開けては周辺を見渡すことを何度か繰り返しているうちに、ドア2つ向こうの住人が出て来て、

「ラジオをもちますか」。

「いえ、何も解らなくて」と返答にならない。

「そうだ、車のラジオを聞いてみよう」と、彼は独り言のように言って廊下へ降りていった。

私は呆然自失。地震があったことは解るけれど、その先は…？

思考回路はほぼ停止状態だった。ラジオで情報を…、なんて考えも及ばなかったが、人の姿を見、言葉を交わして少しだけ落ち着いた。

室内は足の踏み場がないほど散らかっているはずだから足を怪我してはいけないと考え、ブーツを履き室内へ戻った。

まず、懐中電燈を探そう。年末の旅行に使ったペンライトがあるはずだ。

細々とした灯を便りに、散乱したワゴン棚を片付け始めた。室内では幸いなことに被害はこの棚だけ。後で解ったことだが、トイレの棚が落ち、トイレトペーパーが便器に浮いていたぐらいで、食器の1枚も割れてはいなかった。

片付けながら私は何を考えていたのだろう。いまそれが思い出せない。

冬の夜が明けるのは遅い。まして停電。

受話器を取りダイヤルするが通じない。路上からの声で公衆電話なら通じるかもしれないと知り、公衆電話をさがしに出かける。公衆電話は人の列ができていた。

結局、両親にも職場にも電話は通じず、ツー音が空しく響くだけだった。

時間は7時過ぎ、そうだ、今日は給料日だ。仕事に行かなくては…。ペンライトの電池は切れたが、空が少しだけ白み始めていた。

洗顔・着替えを済ませて駅へ向かう。

信号さえ切れている。

電車がダメなら車で…、とっていたけど信号がこんな状態なら恐ろしくて走れない。

垂水駅は真っ暗だ。地震による被害のため不通になっている旨を知らせる立て看板があった。

ああ、そうなのか。今日は学校には行けないんだ。給料をどうしよう…。でも交通が遮断されている場合は『職免』だもんね。

自宅へ引き返した。地面が揺れるたびに足が

疎む。

世の中の『今』が解らない。小松左京の『日本沈没』が頭をかすめる。解らないことの不安と恐怖。反面、開き直りの心もどこかにある。

10時半頃、蛍光灯が2～3度点滅した後、室内が明るくなった。テレビが見られる。

待ちわびた情報。しかし、この目に入ってきたのは、目を覆いたくなるような光景だった。

高速道路が、鉄道が、ズタズタだ。

そして、この災害が淡路から阪神地区に至る大震災であることを知った。日本全土が揺れたのではなかった。それにしてもたいした地震もなかった神戸が何故？ と思った。

両親に電話を入れる。何度目かでなんとか連絡が取れた。両親・犬・家ともに無事を確認する。職場へは通じなかった。

なすこともなく、時折来るやや大きな余震にびくつきながら、テレビから目を離すことができなかった。全ての局が震災報道一色だった。

コーヒーでも入れようと、水道のカランをひねるが水が出ない。水が止まった。

水は清涼飲料水の買い置きがあったし、トイレは風呂の残り湯で間に合う。食べ物もあるし調理もできる（全て電気調理器だから）。

しかし断水が続けば持ちこたえられない。また、停電もいつ起こるか解らない。やっと、「これはやばい」と思い至る。ひと事どころではない。

電池を買いに行く。単1はどこも売り切れ。いざという時にも懐中電灯は使えない。

テレビや広報車の情報から水の配給を知り、ペットボトル2本を抱えて垂水区役所へ。

大鍋、ポリタンク、水筒、段ボール箱にビニー

ル袋を入れた物までである。あらゆる容器を持った人、人、人の長蛇の列。水の容器といえばペットボトルしか思い浮かばなかった自分に苦笑してしまった。

いつ水の配給があるのか解らないままに並んでいると、自転車に乗った人が、「向こうへ行くと水が出ている家があつていくらでもくれるよ」と場所を教えてくれた。まったく見ず知らずの人とその場所を目指して歩いた。訪ね当てると、私のご近所。直線距離で100m程の距離だ。とある政党の事務所だけれど、困ったときは相身互い、政治とこれは別だ。

水を恵んでもらった帰路、弁当屋が営業している。私も1つ買おうと列に並んだ。ご飯なしで1,200円もするのに飛ぶように売れていく。人の弱みに付け込んだ商売をしている。強欲と言うか、逞しいと言うか、妙に感心してしまった。

帰宅し、再びテレビに向かう。震災後、長田区や灘区等で火災が発生。火は見る間に燃え広がった。火災現場が広範囲に及んだことと、震災で水道管が壊れたのか消防車が放水できない状態になり、火事の広がりを防ぐ手立ても無く、誰にも火を消すことができない。夜になっても火は燃え続け、暗やみに炎だけが浮かび上がっていた。倒壊と火事。被災した人々はどんな気持ちでこの炎をみているのだろうか。

後日乗ったタクシーの運転手に聞いた話。

大学生が震災で生き埋めになった。駆け付けた友人たちが助けようと、上半身まで掘り起こしたところで、火が近くまで迫ってきたため、その大学生は友人たちに「逃げろ」と言い、自分は生きながら火に包まれてしまったそうだ。

震災と二次災害。このように悲惨な話は枚挙に暇がない。これが『阪神大震災』だ。

分毎に死者や行方不明者の数が増えていく。私も何かしなければ、何か手助けは出来ないのだろうか。と思う苛立ちと、絶え間なく続く余震に怯え、不安と恐怖に身を竦ませていた。

19日の朝には水が出始めたが、職場に行くことも出来ず、余震に怯え、一人でいることが不安でたまらなくなり実家へ帰ろうと思った。

1月20日夜。疎開先の親元へ「22日に職員集合」の電話連絡が入る。電車は不通。道路も通行制限で混雑極まりない中をどうやって行けば良いのだ。

震災直後から、電車も車もダメなら徒歩か自転車しか通勤方法はないと覚悟はしていたが、私は自転車を持っていなかった。

翌21日、中古の自転車を7,000円で購入。父と二人がかりで四苦八苦して、小さな車に大きな自転車を押し込んで垂水へ帰った。

1月22日。震災後の初出勤は自転車通勤。初体験である。しかも垂水から神戸のハーバーランドまで13キロ余り。道もどうなっているか解らない。

未明、車から自転車を引っ張り出し（降ろすときは一人でも楽だった）、出発。寒いので、カウチン帽子、フード付のコート、マフラー、手袋、内ボアのブーツで完全防備をし、着替えなどお泊まり用品を詰めたリュックサックを背負った。まさに『震災リュック』である。

走破するコースは国道2号線。ペダルを踏みしめて寒風について必死で走った。

塩屋を過ぎ須磨区に入ると家がばたばたと倒れている。崩れた土壁の匂いで埃っぽい。

歩く人も自転車もバイクもやたら多い。車は無法地帯のようにぐいぐいと押し進んで行く。

長田区はむしろ焦げ臭い。

足はだるくなり、お尻が痛い。汗ばんだ身体が、寒風でゾクッとした。風邪が治りかけていたところなのに…。

兵庫区を経てやっと中央区に入る。湊小学校はもうすぐだ。

学校は流石に頑強に建っていたが、建物が隆起したのか、地盤が沈んだのか、地面と建物の間に10cm以上の段差が生じていたし、建物内はもっと悲惨だった。

廊下は段ボール箱で囲った簡易ベッドがそこに並び、職員室は見知らぬ人々でごった返していた。電話がひっきりなしに鳴り、人の出入りが激しく、みんな殺気立っていた。

職員の顔を見ると随分久しぶりに会うような気がした。そしてお互いの無事をささやかに喜び合った。

教職員は私的な面でも様々な被害を受けていた。埋まっていた人もいる。また全職員の半数は自宅が全壊・半壊であった。

喧騒の職員室から事務室へ入って、「ここは何処？」と、啞然となった。狭い5メートル四方の事務室は食料や毛布が溢れている。職員の食堂兼宿泊所になっていたのである。

幸い、機器もキャビネットも被害は無かったが、酷い散らかりよう。仕事どころではない。

本校では幸いなことに子供の被害はなかったが、家族に多少の被害があった。また、子供たちをいつから登校させるか、通学路の安全は確保出来ているか、児童のための教室の確保等、被災者の対応と併せて、多くの問題を抱えてい

た。もちろん、ガス・水道は止まっている。電気だけが使用できる。

自衛隊の給水車が運動場に常駐し、保健室に医療設備や医療スタッフが24時間体制で常駐し、簡易トイレ・レンタルシャワー室が運動場の一面に設置され…と、日を逐うごとに被災者の生活環境が整備されていった。

1月30日。須磨まで電車が通じるようになってからは、須磨に自転車を置いて須磨～神戸間の電車通勤となる。車窓からの景色は、自転車をこぎながら見るより、広く見遥かせるのでなお一層の悲壮感を受けた。あのビルもこのビルも傾き、黒く煤けている。思わず知らず涙が頬をつたって流れ落ちていた。

その後、垂水から電車を通えるようにはなっただけれど、駅では改札制限なるものが行われ改札に入る前からラッシュである。電車も1本2本と乗り過ぎさねばならない日が続いた。

しかし、私のような通勤状況はまだまだ、ましな方だった。

出勤しても相変わらず、教職員のようなボランティアのような日々が続いた。当番や自由意志で泊まったこともある。(自由意志で泊まった場合は手当を請求していない一念のため)。

避難所としての学校は教職員にもかなりの犠牲が要求される。湊の場合は自治リーダーの方々良かったこともあって、比較的上手くいていた。それでも多くの人間が集まれば、いろんな人間がいる。しかもあの異常な状況。その混乱の中で人の本性を垣間見たような気がするの、私だけではないはずだ。

ただ、あんなどさくさがあったお陰で、地域の人々と触れあうことができたことは、唯一の

メリットかもしれない。

4月、私は異動してしまった。今は、西区に勤務しているせいか、震災が随分昔のことにように思える。西区はいたって平穏だ。平穏だからこそ、あの忌まわしい記憶を脳裏の奥底に閉じ込めて、忘れることができるなら忘れてしまいたかった。正直なところ、私はこの原稿を書きたくなかった。どうしても原稿を書くためにキーボードに向かうことができなかった。しかし打ち始めると、閉じ込めた記憶が泉のように沸き出してくる。思い起こせばまだまだ書き足りないことがいっぱいある。

震災直後、生き残った人々は、瓦礫に埋まった人たちを助け出そうと必死だった。まだ被災地の外からの援助が受けられなかった頃、食料や水に飢えていたときも、持てる者は持てない者に分け与えていた。その後の日本全国、世界各国からの支援・救援。人の心は捨てたもんじゃない。人の優しさ。有り難くて涙がでた。

今、復興の言葉の基に街や交通網が復旧し、人々は個々の生活を取り戻しつつある。より早く、より豊かにと思うのであろう、いろんな意味でひと事どころではなく、自己本位に走り、他人を省みなくなっているように思える。

同じラインに立たないと、人が他人を思いやることが出来ないのはなぜなんだろう。

震災の記憶。それは、それほど被災していない私でさえ、この身体がいつまでも忘れないあの揺れの恐怖。恐怖は傷となって心に残る。この心の傷はいつになったら癒えるのだろう。

大震災によって、誰もが心に悔いや傷を負った。人の心も早く復興してほしいと、心から祈らずにはいられない。

## 1月17日のあの時のこと

本山第二小学校 齊藤啓子

初冬の寒気が身にしみる頃となり、またあの寒い冬がやってきます。恐ろしいあの時のことが思い出されます。

1月17日のあの大地震、尼崎市に住む私でさえ、この世の終わりと思うほどのひどい揺れでした。1月17日は県費職員の給料日でしたが、JRも私鉄も動かず、私はただ呆然として2～3日を過ごしてしまいました。そのような中で、県費担当の原さんは車で数時間かかって学校へ行かれたそうです。学校の被害は大きく本館は立入禁止になるほどの惨状で、本館内の事務室はロッカー等が倒れて扉が開かず、ほんの少しの間隙から教頭先生に入ってもらい机をこじ開



印刷室内部。事務室も同じような状態だった

けてようやく銀行の預かり証を出してもらったそうです。ところが、さくら銀行甲南支店が倒壊していたため、中央区の神戸公務部まで行かねばならず、動きのとれない当日は出金することが出来ませんでした。ほとんどの職員は銀行振り込みだったので、間違いなく振り込まれていることがわかり有り難く思いました。

その後、事務室の扉を開けて見ると、事務机とコンピューターの上に耐火金庫が2台倒れかかり、コンピューターは本体が二つに裂け、OAデスクは張り合わせ合板がパッキリと口を開けている状態で、もう一つの事務机はというと、背後の二段重ねのスチール戸棚の上部がコンクリート壁が抜けたと同時に前に押し出され、乗りかかるといった状態でした。これが昼間だったら二人とも死んでいるだろうと思うと、身震いが止まりませんでした。



本山第二小学校周辺

私は4日目に自転車で行けるところまで行こうと思い、出発しました。救急車やパトカーのけたたましいサイレンの国道2号線を西に走り



3月20日に仮設校舎に移るまで、  
テントの職員室だった

ました。道路までいっぱい倒れた家やビルの倒壊を見ながら、ただただ驚きと悲しみであふれる思いで通過しました。尼崎から西宮―芦屋―東灘区と西へ行くほどひどい状態で、3時間位で学校へ着いた時にはへとへとになっていました。そこで再会した学校の先生方と無事を喜び合いました。

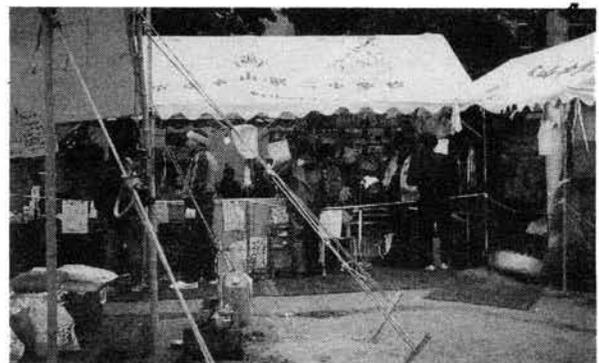
運動場にはテント村ができ、炊き出しの前には人の列、受付の電話は近親者の安否を確認する問い合わせが引きも切らず、薬を下さい、下着を下さい等々の波、その間には各地からの応援物資のトラック便の荷物の受け取り、呼び出し、ボランティアの希望者来校、戦場のようなありさまでした。私たちも事務の仕事はそっちのけで、しばらくは避難者に関する手伝いをしていました。そうこうするうちに、こんなことばかりしてはいけない、私たちの本務をと思った頃、コンテナハウスが1棟建ち、事務機器と一緒に私たちもここで仕事をするように言われました。結局、3月20日仮設校舎に移るまで、テントの職員室、コンテナハウスの事務室で仕事をしました。コンピューターが壊れてしまったので、近隣の小学校や中学校でも仕事をさせていただき、無事に平成6年度を終えるこ

とが出来ました。

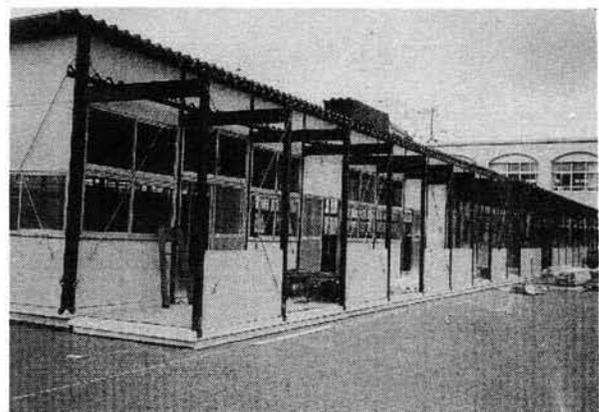
この震災では、人の死や家屋財産を失った人々など悲しいことが沢山ありましたが、一方、人々の心の温かさ、積極的にボランティア活動する人々、身近なことでも人に役立つことがあるという発見、水、ガスの有り難さ等々、人間として学ぶことの多かった災害でもありました。



運動場に立ち並ぶテント村



災害対策本部もテントだった



仮設校舎が建てられる

# 赤い月

小東山小学校 菊地幸子

1995年1月17日。誰もが忘れられない日となったあの日から、もう1年が過ぎた。

日が経つにつれ、しだいにうすれいく記憶ではあるが、あの時のことを思い出すと、いつも何故か、あの時の自分の何とも表現しようのない感情がよみがえる。それは悲しみとか、空しさとかいった単純な言葉では表現し切れない複雑な思いであった。

あの日、私はインフルエンザのため非常に体調が悪く、朝食の用意をしながら、「ああ休みたい。でも今日は給料日だし……」「そうだ、給料だけ渡したら早退しよう」などとブツブツひとり言を言っていた。そしてあの地震。何もかもがいったん頭にふっとんでしまった。

壁に手をつけて立っているのがやっとで、家族の寝ている所へ行こうと思っても、廊下をまっすぐ歩けない。地震がきたことはわかっているが何をしたらいいのかわからず、オロオロするばかりだった。激しい揺れがおさまって、ラジオをつけても詳しいことはわからない。ただ夜が明けるのをじっと待った。あの時は、長田や東灘が大変なことになっているとは全く考えてもいなかった。警報が出たときのことは知っていたが、地震があったとき学校はどうなるのか、恥ずかしい話知らなかった。

時間がたつにつれしだいに明らかになる被害の状況。そのものすごさに言葉もでない。

中央区に会社のある主人はとても出勤できないため、二人の子供を任せ、とにかく学校に向

かった。通勤途中の車から見た町は、寒々として色のない世界に思えた。

車内のラジオから流れてきた曲をぼんやり聴きながら、何故か涙があふれてきたのを覚えている。

私の職場は垂水区にあり、さほど被害もなかったため、初日から比較的多くの職員が出勤していた。避難者も当初は500名を越えていたが、日が経つにつれて減少し、1月30日、学校が再開されて間もなくゼロとなった。

学校は再開されたとはいえ、授業は午前中だけで、午後はそれぞれボランティアに出かけたり宿直にあたったりしていた。しかし私のように小さい子供がいる職員は、夕方には保育所のお迎えがあるし、夜はとても泊まれないで、結局限られた時間しかお手伝いすることができず却って先方の邪魔になるだけ。それでもテレビ等で大変な状態を見る度に、何かしなくてはいけないという思いにかられる。「こんなところでのんびりしていていいのか。何かやらなくてはいけないんじゃないだろうか」。そんなジレンマに陥っていた。

家を無くし、あるいは家族を亡くし、今もなお大変な思いをしている数多くの人々がいる。それに対して私は、もう全く地震前の生活を送り、地震の事は時おり思い出すだけ……。

そんな私には地震が怖かったとかつらかったとか言うことはできないのかもしれない。私の感じた怖さ、つらさなどその人々のものとは比

較にならないくらい微々たるものであるから。

ただ、住み慣れた神戸の町が一瞬のうちに破壊されたことへの悲しみは私も同じだ。だからせめて、どん底のような状態から自力ではい上がろうと頑張っている人々に、心からエールを送りたい。

1月17日。あの日のことを思い出す度に私の脳裏に浮かぶのは、夜、ふと見上げた空にかんんでいた「赤い月」と、車内で聴いた静かなメロディーの曲。

その曲は確かこう歌っていたように思う。

「朝がくるまで泣き続けた夜も

歩き出せる力にきっと出来る

太陽は昇り心をつつむでしょう

やがて闇はかならず明けてゆくから

…………… 中 略 ……………

希望のかけらを手のひらにあつめて

大きな喜びへと変えてゆこう

愛する人や友達が勇気づけてくれるよ

そんな言葉抱きしめながら

だけど最後の答えは一人で見つけるのね

めぐり続く明日のため

雨に負けない気持ちを

炎もくぐりぬける そんな強さ持ち続けたい

それでもいつかすべてが崩れそうになっても

信じていて あなたのことを

信じていて欲しい あなたのことを」

BY “piece of my wish” /M・IMAI

着実に歩き出している「神戸の町」。

多くの人々の思いとかけ離れた方へはどうか行かないで欲しい。

失った尊い命を無駄にしないためにも。

二度と「赤い月」を見ることがないように。



## 1月17日 それから…

千歳小学校 和田 訓子

地下鉄板宿駅から地上へ、階段を上ったあの瞬間を忘れることができない。私が30年間生きてきた街は、どこへ行ってしまったのか？

1月17日…陸の孤島状態となった西区の自宅で、何とか捜し出したラジオ付懐中電燈を手に、ただ呆然とするしかなかった。翌日、兄の車で名谷の実家に戻ったが、学校とは全く連絡が取れず、ようやく電話がつながったのは、19日の夕方だった。「可能なら出勤を」の声に翌20日、まず北へ、タクシーを捕まえ鈴蘭台に、谷上、新神戸へと出て学校に向かった。(以降、自分の足だけが頼りだった。板宿～神戸～新神戸の距離を何回歩いたろう。) そうして着いた学校は、2千人の人で校舎内外とも溢れていた。到着した時点から、電話と訪問者の対応が私の仕事となったが、2日目には既に声が枯れている状態だった。受話器を置いている時間が無いのだ。

前任校の摩耶小の場合、地震の揺れの方向に関係してのことだと思うが、倒れた備品は皆無と言っていい状態だった。17日の夕刻には電気が点いたようで、皆もパニックにはならなかったそうだ。おかげで、破損した物を片付けることに時間は取られなかったのだが、プールが屋上にあり、トイレ用の水を汲み上げるにも4階まで上がらなければならず、思わぬ所で手を取られた。物資は公平に、と言ってみても2千人だ。並大抵なことではなかった。当初は動きながら、次の行動を決めていくしかなかった。僅かながらも、職員間で1日の行動を相談する時間が持てるようになったのは24日。正確な児童

の消息を掴む作業に取りかけられるようになったのもその日だった。そして、亡くなった児童とのお別れの式を持つことができたのは、3月4日になってからのことだった。

とにかく、時間と情報が欲しかった。学校にいる限りテレビを見ている時間も、新聞を読んでいる時間も無い。対外的な人目を引く出来事は、ニュースとして流れてくるのに、対内的な真実役に立つ話は、なかなか伝わってこなかった。事務職員としての仕事もそうである。2月中旬、机に向かう時間がやっと確保できるようになっても、何から手を付ければいいのか。これはやった方がいいかもと、自分で判断し始めてみても、結局は行き詰まってしまった。

4月からの異動先、千歳小も摩耶小とは違った意味でひどい状況に置かれている。焦土の中に学校だけが取り残されたような有様だ。校区の8割が、全半壊・全半焼。350名の児童の内100名が転出。在籍児童の4割強が今も校区外からの遠距離通学を余儀なくされている。この学校で、私は何ができるのか、どうすればいいのか、異動から半年以上経ってもまだ判らない。

震災当初は、自宅に被害がほとんど無い事に一種の罪悪感さえ感じていた。当時仕事の関係で神戸にいなかった夫とは、地震の話になると意見がかみ合わず喧嘩の毎日だった。人の優しさと強さを改めて教えられた。反面、人の醜さと愚かさも見せ付けられた。震災以来、手探りの毎日だった。今も状況的にはそれほど変わっていないのかもしれない。しかし、私自身の何かは変わりつつある。そんな気がする。

## 阪神・淡路大震災

泉台小学校 柳 川 桂 子

平成7年1月16日月曜日。東京から帰った私は、明日は給料日だし午後は調査研究部会があるから、給食は早めに食べて行って…と考えながら、疲れからかいつもより早めに休んだ。

明け方、ふと目が醒めた。今、何時なんだろう？ もう朝なんだろうか？ 寒いなあ。もうちょっと寝ていたいなあ。まだ眠いなあ。でも、時計だけ見ておこう…とうつぶせになった時だった。急に身体が持ち上げられたような気がした。(あれえ?) と思った瞬間叩きつけられるように下がっていき、激しい縦揺れと凄まじい音が湧きだした。「ゴー」「ゴー」地底の底の底から響いてくる。何も考える間もない。枕元に置いていた化粧水の瓶が降ってきて頭に当たる。(痛!) とっさに頭を手で押さえ、布団の中にもぐりこみ、布団を引っ被った。枕を中に引き込み、ついでに落ちてきていた、ぶたのぬいぐるみも中に引き入れた。(何これ? 地震?) 頭の中で今起こったことを懸命に整理しようとするが激しい揺れの中では全然まとまらない。ただ早く揺れが収まってほしいとそれだけを願っていた。突然、揺れが止まった。おそろおそろ布団から頭を出してみる。と同時に今度は横揺れが襲ってくる。(えー。どうなってるの???) 身体が強ばって動けない。布団の中でうずくまるように身体を小さくすることしかできない。「カンカンカン」「ガチャングチャングチャン」屋根から、瓦が落ちていく音がする。凄まじい音がしている。(台風の強風で落ちた時でも、

あんな音はしていなかったはず…) たくさんの音が重なり、何が何だかさっぱりわからない。(こわい。早く止まって〜)。いろいろな思いが、頭の中をぐるぐる回りだす。遊園地のジェットコースターに乗って振り回されるように身体が揺れる。でも、なんとか仰向けになり、天井を見た時、揺れが止まった。まだ、小刻みに揺れている。止まりそうで止まらない。

階下から、母が私を呼ぶ声がある。とっさに返事をしようとするが、声を出すのを忘れている。もう一度母の声が聞こえる。今度は返事ができた。

「大丈夫。だけど、もうちょっと待って。まだ、上は揺れているから」。

おかまいなしに母は、叫ぶ。

「何を言っているの! 早く、下りてらっしゃい。早く!」

(そう言われても、まだ揺れて恐いのになあ。でも、とりあえず下りよう)。布団から抜け出し、一番最初に手に触れた上着を着る。周りには暗いままだけど、歩けるだろうと一步を踏み出すといつもと違う。足元をみると、部屋に敷き詰めているカーペットが、波打っている。私は丁度丸くなった部分を踏んだらしい。でも、気にはしてられない。階段を下りると両親の姿が見えない。水の音がある。台所に母がいた。懸命に、水をゴミペールに貯めている。実は、夏からの小雨の為にもうすぐ時間給水になるかもしれないという話があり、昼間は誰もいなくな

私の家では念のために水を貯めておくゴミペールを3日前に買ったばかりだった。父もお風呂場で水を貯めている。私も、水をペールに入れる。底の方には、赤サビが見えているが構ってはいられない。やっといっぱいになった。ただ、重すぎてあまり動かすことができない。外はまだ暗い。電気・ガス共に爆発の危険性を考えて使用不可能と判断。水も今は出ているが、いつ止まるかわからない。(これからどうなるのだろうか?) 心配だけが増していった。余震は、ずっと続いていた。

時計は午前6時30分を指している。

「もう少ししたら、夜が明ける。そうしたらもっと詳しい状況がわかるだろう」。

父は険しい顔をしながらも、ラジオで何とか情報を得ようとしているが詳しいことがわからない。とうとう、

「早いかもしれないが、事務所にいく」

と言い出した。母は、

「もう30分待って! せめて、夜が明けてからにして!」

と止めた。私の父は、神戸市職員であり、台風等で、警報が発令された時にはほとんど帰ってこないし、連絡が入るとすぐさま勤務に向かう。何か起きた時には、勤務につかなければならぬことを理解しているはずの母が、明らかにあわてていた。父にもそれがわかったらしく、すぐに緊急避難場所は、小学校か中学校であり、貴重品や重要書類をまとめておき、いつでも持って逃げられるような準備をしておくようにと言った。母は、うなずきながらも、気を取り直したのか、  
「朝ごはん、まだだったわね。ごはんもあるし、食べる物はあるから大丈夫」

と、言って朝食の準備を始めた。ごはんに、のり、つくだに、卵。あとは何だったのだろうか? 残念ながらあまり覚えていない。寒さと過度の緊張のためだろうか? 卵かけごはんを食べただけは、鮮明に覚えている。

午前7時。父は、母の作ったおにぎりを持って、自家用車で事務所に向かった。出かける間際になって、

「今日は帰ってこれないかもしれないから、二人で下で寝ること。それから、家が崩れる心配はないはずだけど、あまりに揺れがひどいようなら避難しなさい」

と、言い残して行ってしまった。余震がまだ続いている。座っていても、「ゴー」というなんともいえない地底から吹き上がる音がしたかと思うと、次には「グラグラ」と家が揺れている。気が付くと、アップライトピアノが前進している。50cm位だったと思うが、とりあえず押し戻す。テレビも前にせりだしてきている。母と二人で元の位置に戻し、雨戸を開けると、粉々になった瓦が目飛び込んできた。ものすごい量の瓦が割れている。鬼瓦も落ちて、きれいに真っ二つに割れていた。近所に目をやると、瓦の屋根の家はすべて何らかの被害がでている。瓦がずれて浮いた状態になっていたり、落ちて割れてしまった破片が散乱している。目の前にある破片だけでも片付けようかと思ったが、まだ余震で家が揺れているのに、また落ちてきたら大変と思いやめた。2階に上がって、弟の部屋に入ろうとしたが、暗い中で何かが光って見えている。(何だろうか?) 1歩踏み入ると「ガシャ。ジャリ」。ガラスだった。本棚が倒れて、扉にはめられていたガラスが割れ、あたり一面小さ

なガラスが散らばっていた。入ることさえ危ない。それでも、部屋の様子がわからないので、懐中電灯を照らして他の家具が倒れていないか確認する。大丈夫。次に、和室に入る。タンスが置いてあるので、動いていたり、倒れたりしていないか心配だったがここも大丈夫。テレビだけが倒れていて、勝手にスイッチが入り、なにやら声がしている。(電気は止まっていないんだ)。不気味な感じがしながらも、少し安心する。そして、自分の部屋に入った。本棚やタンスが動いてはいたが、大丈夫。ただし、部屋中に本や雑誌、それに置いていた小物が散乱していた。いつも学校に持っていくバックを探し、引っ張り出した。

もうすぐ、8時がくる。学校へ行かなくてはいけない。身仕度を整えるが、やはり落ち着かない。(学校はどうなっているのだろうか？とりあえず行ってしまおう。今なら、それほど揺れてはいないようだし、さっきよりは落ち着いてきたかなあ？いつものように行ってしまっても大丈夫だろうか？まあ、通行止めでもない限り、大丈夫でしょう！)不安を抱えたまま準備をする。(エ～イ！行ってしまえ！もうここまできたら、開き直るしかない！)

「時間がきたら、学校に行くわね」

と、母に言う。

「そうねえ。行かないわけにはいかないしねえ。気をつけていくのよ。でも、もしもの時にはどっちに避難したらいい？」

「どっちってねえ。近いほうにしたら？家から遠いのは大変だしね。私は学校にいるから」。今まで、もしもの時にはどこに避難するかなんて、そういえば話したことがなかった。なんと

なくわかっているという程度で済んできていた。でも今は違う。もしかしたら、起こってしまうかもしれないのだ。母に、もしもの時は、中学校に避難することに念をおして家を出た。原付で走りながら、あちらこちらで、いつもと風景が違っていると感じながらも、学校へと急ぐ。

警察署の前を過ぎて、校区に入った。いつもと変わらない風景がそこにあった。(あまり違いを感じないのは、なぜなんだろうか？)ここにも地震が襲ってきているはずなのに、人々はまるで何もなかったかのように見える。不思議だった。子どもが数人歩いているのが見える。学校に着いた。被害がわからない。玄関の大きなガラスは割れていない。(よかった。あとはどうなっているのだろうか？)様々な心配が一挙に起こってきた。(皆、大丈夫だったのだろうか？)職員室に入って、何人かの顔を見ただけで安心した。誰もが、

「恐かったよね。どうなるかと思った」

と言いながら、互いの無事を確認していた。

平成7年1月17日火曜日午前5時46分阪神・淡路大震災が起こり、多くの命が消えてしまった。自然災害という計り知れない規模であり、人間の力ではどうすることもできなかった。ただ、幸いにして生き抜くことができたが、命の尊さやたくさんの人々の心暖まる親切に感謝することさえままならず今までできてしまっている。時を経て、

「あの時は、いろいろとどうもありがとう」

という言葉をやっと言えようになっような気がする。ただ、私は今でも、余震の前には、必ず目が醒めてしまう。まだ、心の奥に恐怖が残っているのだろうか？自分ではわからない。

# 阪神大震災・今思うこと

西舞子小学校 山崎和子

「これ何事や！」

この世の出来事とも思われぬ大音響と共に、まるでロディオの様な縦揺れ横揺れ。天地がひっくり返ったような衝撃に、何が何だか分からないまま布団にしがみついて振動が収まるのを待った。

随分長い時間だったように思われる。その間いろんな事が頭をよぎった。

- ・いよいよ天変事変が起こったのか。
- ・このマンションが倒れるかも知れない。  
(10階建／居住7階部分)
- ・しかし身体の不自由な母をかかえて、どうすることも出来ない。死なば諸共だ。
- ・落ち着いて！ 慌てないで！ しっかりしなくては！

隣の部屋に寝ている母に声をかけ、無事を確かめた後は、またぶり返し激震がくるかもしれない恐怖と、真っ暗で様子もわからない中、起き上がることも出来なかった。

どれだけ時間が経っただろうか。その間、マンション内も街の中も物音ひとつせず、異様な静けさだった。

やっとの思いで布団から起き上がろうとしたが、色々なものが頭の上といわず一面落下していて身動きも出来ず、事の重大さに身の引き締まる思いがした。

手探りで懐中電燈をと探したが、あるべき場所に引き出しはなく、仏壇のローソクも何処にあるのか判らなかった。テレビや鏡台・タンス

はふっ飛び、上に置いてある物はことごとく落下し部屋中にこわれて散乱、足の踏み場もない状態を見たのは、やっと見付けた一本のマッチの光でだった。台所に至っては見るも無残で、食器棚の戸は全開で食器類は全滅していた。また、ポットはもとよりソースもしょう油もビンごと床に落ちて床中流れ放題で手のほどこしようもなかった。

今思い返してみても、あのガラスの破片の海の中、部屋中歩き回って、よくもまあ怪我一つせず後片付けが出来たものと思うが、その時は無我夢中で只々「しっかりしなくては…」の一心で、怪我をしないようゴム手袋にスリッパのいでたちで、段ボール箱に何杯もの瓦礫を惜しいとも残念とも思う事も無く処理した。(しかし服の下にパジャマを着たままだったのに気づいたのは夜になってからだった。)

また、奇跡のようだが、寝返り一つ出来ない母のために数週間前に購入した介護ベッドの手摺が頑丈だった事、設置場所に落下物が飛んでこなかった事等、その部屋どこに寝ていても無事ですまないところを、難を逃れたのは幸いであつた。

——親戚も知人もお互い様。知ったもの同士

助け合つての数週間——

食事の差し入れ、もらい水、食品日用品のゆずりあい、洗濯、もらい風呂等の他、壊れた家の後片付けにも手助けしあつたが、顔を合わせ

れば「皆同じに降りかかったこの災難。命あっただけでもありがたい」「世の中こんな事も起こるのだから何でも必要以上にはいらない。今まで随分物に振り回されて暮らしていたものだ」「この震災で何だか価値観が変わったようだ。いい経験だったと思う」等話し合った。

明石市は震源地の目の前でありながら比較的被害が少なく、自宅は何とか住める状態だったが、実家は戦後に建てた木造建でもあり傷みがひどくやむなく全壊にした。私たち兄弟6人をはじめ何人も人間を守り育ててくれた家を壊すに忍びず随分迷ったが、隣り近所に迷惑を掛けることになるので思い切って決心した。

とはいえ名残はつきず、壊される寸前まで何遍も足を運んでは玄関・部屋・台所と、柱にも畳にも感謝し、別れを惜しんだ。

震災後100日を過ぎ、そろそろ地震も収まったかに思えてたが、今朝から有感地震4回。たった今の地震は震度3だったとテレビで速報を出している。(註：7年5月頃)

あの17日の大震災より大きいものは来ないだろうと自分に言い聞かせて、今日ある自分に感謝しながら日々を送っている。

“何事もなく平穏に一日が終わったら、  
小躍りして喜べ”

—こんな古い言葉の意味が今は身にしみる—

## 記 録

*自宅	明石	マンション一部損壊	
*実家	明石	木造	全壊
*兄	明石	マンション一部損壊	
*義妹	明石	木造	全壊
	借家2軒	〃	〃
*弟	大久保	木造	一部損壊
*妹	明石	木造	〃
	借家3軒	〃	〃

～各自の勤務先も大きな被害を受け、今後が心配されたが失業者が出なくて幸せ  
～全員怪我もなく・火災にもあわず・住む家もある。

——今日一日を有難う——



# 震災と膨大な事務処理

山田小学校 山 田 キヨ子

## 1. はじめに

日頃の習慣で給料支給日という緊張感から、午前4時頃には目が覚め、家事も終わり、座って化粧をしていました。

その時突如、早晩前の暗闇に地響き、地鳴りと思われる轟音と、未だかつて経験したことのない激震に襲われました。床、座布団と共に全身が上下左右に大きく揺れ、今にも天井が落下しそうでした。如何ともし難く、座って息を止めて、ぎしぎし音をたてながら回る天井の四隅をじっと見ていました。まるで洗濯機の中の脱水機のごとく回っていました。一瞬、もっと大きな柱で建築していたらと思いつつ天井の動きを見ていました。

少し落ち着いてから、停電で真っ暗な中、懐中電燈とタオルを30枚位持って、倒れた生花の後始末をしましたが、花器の水で畳はビシャビシャでした。外では屋根瓦が落下し、車のガラスは粉々に割れてダイヤモンドのようにキラキラしており、車体はボコボコになっていました。

後片づけをする時間もなく家を出ましたが、交通機関も大きな被害を受け運行不能になっていました。一足先に出勤したはずの息子も、有馬街道の通行止めのため、出勤出来ず戻ってきました。そこで、息子の車に乗せてもらって、神戸市北区の山田小学校へ出勤しました。

## 2. 給料支給日

平成7年1月17日は県費負担教職員の給料支給日でした。神戸市北農業協同組合山田支所か

ら9時には現金も届き、給料支給準備及び支給も無事終了し、交通事情等で出勤されなかった職員への給与振込をと思いましたが、金融機関のコンピューターが作動しなくなっていました。仕方なく、管理職にお願いして金庫に保管してもらい、該当職員が出勤されるまで待っていました。金融機関はどこも出金出来なくなっていて大変困っていましたが、現金で給料を頂いたので助かりました。Y教諭から感謝の言葉を頂戴しました。

## 3. 災害対策業務と事務処理

本校には避難者もなく、職員は灘区、中央区、兵庫区の各校で災害対策業務に従事しました。職員が災害対策業務で出張すると、それに伴って私たち行政職員の作成、報告する書類の件数が多くなり、事務処理で忙しい毎日でした。その一部分を挙げてみますと、

- ①県費職員が避難所該当校へ支援のため出勤した場合の出張旅費の請求
- ②宿日直手当請求内訳書
- ③管理職員特別勤務実績簿
- ④教育職員特別業務実績簿
- ⑤管理職員特別勤務実績報告書
- ⑥教育職員宿日直勤務状況報告書
- ⑦教育職員超過勤務等実績報告書
- ⑧行政職員超過勤務等報告書
- ⑨行政職員超過勤務等報告書集計表
- ⑩市費職員の時間外勤務に係る報告書
- ⑪臨時的任用職員の時間外勤務報告書

#### ⑫臨時的任用職員の自宅待機期間報告

#### ⑬非常勤嘱託職員等の報告

#### ⑭臨時的任用職員及びパート職員の報告

以上のように、神戸市北区で避難者が1名もいなかった学校でも、複雑な書類作成及び手入れ等がありました。

#### 4. 授業再開

1月18日から毎日、職員会を開き、今後の学校運営について話し合いました。

1月23日から授業を再開しましたが、西宮市や神戸市東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨区、垂水区の各区からの仮入学児童の転入が毎日ありました。

#### 5. 全市防災指令第3号解除

平成7年4月1日に全市防災指令第3号は解除されましたが、新神戸トンネルの一般車通行止めは地震直後と同じく解除されず、山田小学校の南北にある道路は、早朝から夕方までガレキ運搬車が通行していました。そのため道路は渋滞し、路面にはガレキ等が散乱していました。畳、布団、扉、材木、瓦等、落下物の多かった事が地震の大きさを物語っていました。

交通渋滞のため、市バスも時間通りに運行出来なくなり、出勤するのに何倍もの時間を要していました。

#### 6. 学校行事中止

本校の校舎には大きな損傷はなかったものの、予定していた学校保健委員会は中止となりました。そのため、私の仕事においても学校保健委員会講師謝礼金を戻入するという事態になりました。

また、運動場には多少亀裂、陥没がありました。学校池も亀裂で水漏れし、鯉がアップアッ

プしていたので、鯉をプールへ移動させて池の補修工事を行いました。

#### 7. 野菜支援

本校は神戸市北区の農村地帯にあります。

須磨区の小学校などから「生野菜が不足しているのでは何かありませんか」という電話がありました。そこで早速、PTA運営委員会を開き、各家庭へ呼び掛けたところ、多くの救援野菜提供の申し出がありました。水洗いした野菜を本校で集約し、PTA役員の方々と本校職員で長田区と須磨区の小学校へ車で配達して大変喜んでもらった事もありました。

#### 8. 衛星電波受信装置

平成7年6月14日、本校屋上に人工衛星電波受信装置、3階の教具室には東京筑波への発信装置を設置しました。神戸市で2か所ということですが、全国の何百ものポイントで、何十もの人工衛星から刻々と送られてくる電波を受信し、土地のずれや動きを知り、地震予知に役立っているというものです。10kmの距離で誤差が数mmだそうです。国土地理院によると、阪神大震災後、衛星電波受信装置で測量したところ、神戸市にある六甲山の標高が12cm高くなっていたことが明らかになりました。

#### 9. おわりに

この震災で亡くなられたY先生ご夫妻の葬式が本校の校区で行われ、本校からも職員の代表者が参列し、残った職員で、参列されたY先生ご夫妻の勤務校職員の方々への炊き出しを行いました。

あの惨事、未だに忘れることは出来ません。この震災で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りいたします。

## 育児休業中の震災体験

西高丸小学校 弘内玲子

生後9か月になる、一人息子の涼太の夜泣きが続いていたので、このところ一度眠ってしまうと多少のことでは目が醒めない。しかし今朝の揺れは別格だ。まるでポートピアランドのフライングカーペットのように、上下にスウィングされ、たたき起こされた。

ただ、家の中の物はタンスはもちろん、ガラスのコップ一つ割れていなかったのも、希有な大地震だなどという認識はまったくなかった。それでも一応カーテンを開けて、薄暗い戸外を目を凝らして見た。屋根瓦がずれ、道路にも落ちた瓦が砕け散っている。電気をつけようとしたが、つく訳もない。懐中電燈は電池が切れて役に立たない。仕方なくロウソクをともし、ラジオを聞いた。震源地は淡路で、神戸全域で大きな揺れが観測されたとのこと。この時初めて、「これは非常事態では」と思い、急いで双方の両親の所に電話をかけた。食器が割れたり、ストーブのやかんがひっくりかえったりしたもの、幸いけがもなく皆無事であった。しかし、起きて地震を体験した分、恐怖は私たちより数倍大きかったようだ。主人は家でじっとしている訳にもいかず、自分の住む垂水が震源地に近いので、神戸で最も被害を受けた地域だと判断し、いつもどおり無謀にも車で出勤していった。

なんだか、ずいぶんのんびりしているように聞こえるが、地震が起きた直後は、自分の家では水道も出たし、こわれたものもなかった。マスメディアの情報も少なく、他の地区がどんな

状況なのか、見当もつかなかった。漠然とした不安をかかえたまま、何をどうしていいのかわからず、眠っている涼太のそばでじっとしている。余震はいっこうに止む気配はない。揺れる度に、涼太の上におおいかぶさる。

空は明るくなってはきたが、太陽は姿を見せず、それでも重く重い冬の空は、東の方が赤黒く変色しているように見えた。細かい黒い塵がどこからともなく舞い、空気が暗くよどんでいた。午前九時ごろには水道も止まった。ファンヒーターもホットカーペットも使えないので徐々に寒さがしのびよってくる。

主人から、近所の母の所に避難するように電話があり、徒歩15分位の実家に急いだ。実家は、壊れた食器の後かたづけがやっと終わったところで、テレビもついていた。テレビの映像は、とても現実のものとは思えない衝撃的なものだった。怪獣に踏み荒らされたような三ノ宮。山火事のように町全体が炎に包まれた長田。刻々と死者の数は増え、とどまるところを知らない。私はなすすべもなく、放心したようにテレビの映像を見守るしかなかった。画面にくりひろげられる地獄絵を見て、友人の安否が気になり電話をかけた。朝はすぐにつながった電話も、夕刻には何度かけてもつながらない。兵庫区の友人の所は「ツアー、ツアー」という話し中のシグナルさえ聞こえず、受話器の向うは無気味な静寂が広がるばかりだった。結局その日は、垂水区の友人1人の安否が確認できただけだった。

さまざまな不安と恐怖を胸に、枕元にリュックサックを置き、服を着たまま眠る。救急車や消防車のサイレンが鳴りやまない。なんだか、常に床が揺れているような感触があり、眠れない一夜を過ごした。

次の日になっても、悪夢は醒めるどころか、凄惨さを極めていった。神戸市民は一瞬にして衛生的、文化的生活を奪われ、かつて体験したことがないような、我慢の生活を余儀なくされた。ライフラインの崩壊である。

まず第一に水。突然の断水のため水を貯めておくことができなかった。あるのは風呂の残り湯ぐらいだ。最初はどこで水を給水しているのかわからず、人づてに聞きもらいに行った頃には、もう水が無くなって給水車は帰ってしまっていた。次の給水車はいつくるかわからず、復旧のめどは全くたたない。とにかく極力水を使わないようにするしかなかった。歯みがきもトイレもままならない。洗濯もできないので、多少汚れても着がえはしない。涼太のおしめも、布から紙おむつにかわった。それでもしばらくすると、お風呂には入れないこともあって、涼太のおしりはおむつかぶれで赤くなりだした。

第二にガス。食事は電気で調理できるものに限られ、水も充分に使えないのでおにぎりなど、貧相なものになった。また、冷凍食品や買い置きがあるとはいえ、いつ店が開くかわからないという心配もあった。ダイエーやローソンなど、震災後まもなく開店した店もあるが、長蛇の列で、北風の中何時間も並ばなければならなかった。しかし唯一の救いは、私は母乳がでたので、涼太の食事の心配だけはしなくてよかったことだ。

食事の方は、1週間もすればカセットコンロ

の普及でずいぶんと改善されたが、一番困ったのはお風呂だった。お風呂屋さんも営業していたが、さんざん並んだあげく、脱衣所も湯舟も人でごったがえしているとのこと。とても9か月の子を連れてはいるのは無理だ。

1週間ほどして、思いきって丹波のユニットピア篠山に、お風呂にはいりにいった。主人の車で出かけたのだが、神戸を離れるにしたがって、窓の外の風景は明らかに変わっていった。北区をぬけて三田をすぎるところには、道は美しく舗装され、家々は行儀よく建ち並んでいる。店は所狭しと商品を並べ、パチンコ屋までが、昼間だというのにネオンをきらめかせている。今さっきまで見てきた、神戸の風景はいったい何だったんだろう。まるっきり別世界だ。あたりまえのことなのだけれど、なんだかとても腹立たしく、理不尽なことのように思えた。

しかし、久しぶりにはいるお風呂は格別で、体中にうすくはりついていた汚れの膜が、はがれ落ちて行くようだった。それになんといっても、水を思うぞんぶん使えるのがいい。体だけでなく、抑圧された生活の中で、知らず知らずのうちにたまったストレスまで、洗い流されていくようだった。私たちは一泊だけして、再び神戸にもどった。

しばらく連絡のとれなかった友人も、4、5日後には皆無事だとわかった。この震災で一人の肉親も友人も失わなかったことを神様に感謝したい。地震当時9か月だった息子も、今は1才7か月になっている。大地が揺れ、多くの人々が悲鳴をあげたあの一瞬にも、スヤスヤと眠っていた我が子は、平成7年1月17日に起こった大地震を、少しも覚えてはいないのだろうか。

平成7年1月17日

太山寺小学校 中川幸子

その日の朝、私はムシの知らせ(?)か5時半に目が覚めトイレに行った。トイレから出てきて、目覚まし時計が6時に鳴るので「もう、ひとねむり…ッ」と思い、布団にもぐりこんだ。横になりすぐに眠りについたかに思えた。するとその時、はるか海のかなたからドッドッドと背中を押し上げるような感じがしたと同時に、身体が10センチほど宙に浮いたような気がした。それからが恐怖の連続で、ガタガタ、ミシミシ、グラグラ、マンション全体が揺れている…。私には1分ぐらい続いたように感じた。布団の上にはしゃがみ込んだまま両手は筆筒を支えてるつもりだが全然届かない。とても立って歩ける状態ではなかった。マンションの場合すぐにドアを開け外に出るようにと前々から聞いてはいたけれど、いざとなったらとてもそんな余裕はなく、腰抜け状態だった。幸い私の寝室の筆筒だけは倒れることなく、枕元へガラスの人形ケースだけが散乱しただけだったが、リビングでは本箱とテレビ、台所では食器棚が、和室では筆筒が2棹倒れ、洋間はグチャグチャに足の踏み場もない状態であった。

しかし不思議なものであんなに家具が倒れたにもかかわらず全然倒れた音は記憶にないのである。いまだにそれを思い出そうとしてもプツンしたままである。それともう一つ不思議なことは、倒れた食器棚から飛び出た食器で高価な物だけが壊れ、180センチの高さから落ちた物でも語弊があるかもしれないが戴き物は壊れていないのである。

暗闇の中なんとか玄関まで行こうとしたが、

倒れた家具をいくつか越えて行かねばならず、その度に私の体重の重さが家具を壊しはしないか心配だった。「懐中電灯は確かここに…」と思っても、そのボックスさえも倒れていて見つからないし、あとは夜が明けるのを待つしかないと思った。だんだんまわりが明るくなってきたら何と想像を超えた悲惨な状態で何から手をつけてよいかわからず、ただ呆然としていた。

そこへ友人からの電話、また家具を越えて電話のそばにへたりこみ、「もしもし…元気よ…」とそこまで言うと涙が出てきた。友人のありがたさがひしひしと感じられた2件の電話だった。我に返った時、「ああ、今日は給料日」ということを思い出した。余震が続いている中とても出勤できる精神状態ではなかった。家から電話をしてもパニック、私は「そうだ、公衆電話ならかかるかもしれない」と、何の根拠もなく思いついた。しかし我家は9階、エレベーターが駄目なので転がるように降りていった。公衆電話にたどりつくともう何人ががいて「なかなかつながらないよ」と言っていたが私は学校へ電話をした。「中川です。私は元気ですが、今日は休ませてください」とここまで言うと「ツーツー」と一方的に切れてしまった。それから9階までの階段を上がり、壊れた食器やガラスの破片を片付けていて、ふと気がつくと10時になっていた。その間お水も飲まず、何も食わず、トイレも行かずただただ黙々と夢中でガラクタと闘っていた。

今では家具に転倒防止ポールをし、枕元には懐中電灯を置いて寝るようにしている。

## 雑 感

### 小東山小学校 八 尾 信 子

あれから10ヶ月が経ちました。

年末が近づいたせいか、テレビでも各局が今年の重大ニュースをまとめスペシャル番組を放映しています。

昨日も1月17日以降の上空からの神戸の様子が、続々と映し出されていました。倒壊した家屋、容赦なく迫る火の手、鳴り止まぬサイレン、将に恐怖心を呼び戻され、胸が痛くなってしまいました。

そして今、悲しみや苦しみ、幾多の重圧を乗り越え、力強く立ち直ろうと頑張っている姿に、改めて感動を覚えました。

「公私」ともに、幸い被害が少なかった方だと思いますが、あの体験は、心に深く刻み込まれています。

「私」について少し触れさせていただくと、この春、長男が中学校を、長女が小学校を卒業しました。ともに震災を体験しての卒業式でした。

小学校は被害がほとんどなく、例年通り体育館で、ところが中学校は、特に体育館の被害が大きかったので、運動場での式になるかもしれないと言われていました。しかし、突貫工事のおかげで、体育館のフロアのみを使用して執り行うことができました。

私も公私ともに何回か卒業式を経験していますが、この度は今までとは気持ちの上で全く違っていました。

もちろん平服で出席しました。

我が子の式だからというようなことだけではありませんでした。各校が黙祷で始まった式場は、とても厳かな雰囲気となっていました。そして、その場にいる全員が、この日を迎えられたことを深く感謝していたと思います。この震災で亡くなった他校のたくさんの友のことを思いつつ、「頑張ろう」と、たくましく巣立っていってくれました。

「運」によって生かされたこの子たち、そして私たち、「命」についてそれぞれが実感したことと思います。

同じ神戸に住んでいながら、私はすでに普通の生活に戻っています。しかし、六甲小学校などでまだまだ避難所生活の続いている方があります。仮設住居に入居できても、新たに色々な問題が起き、解決されずにいます。被災した職員の中には、今ごろになって体調に変化が出てきた職員もいます。

何の力にもなれない私ですが、1日も早くすべての人が、平等に、もとの「普通の生活」に戻れることを願って止みません。

# 地震のこと

夢野小学校 辻井裕子

あの日は、中央区の母のところに行きました。二階で、洋だんすの前に私が、和だんすの前に母が寝ていました。揺れとともに両方のたんすが倒れてきました。私は気が付くと、扉の開いた、たんすの中に頭を突っ込むようにして、たんすをささえていました。母の方は、三段重ねの一段目が足元に、二段目が体に少しかかるようにして落ちていました。お互いに直撃をまぬがれたので大事にいたらずにすんだのでした。揺れがおさまって、二人で筆筒を起し直しましたが、何度思い出してもぞっとします。

余震のたびにびくびくしながら、外が白みはじめるのを待っていました。とりあえず衣服を着込んで、くつを履いて家の中の食べ物を寄せ集めていました。ラジオ番組のパーソナリティの方が、“今日は、自分の命を守ることに専念してもいいのではないか”という意味のことを強調して言っていたように思います。学校のことや仕事のことが気になっていましたが、結局連絡も出勤もしませんでした。

翌日の午後になって出勤してみると、学校は避難所になっていましたが、職員室や事務室が本来の部屋として確保できていました。その分仕事はしやすい状況にあったといえるでしょう。端末機も落下転倒せず無事でした。

ただ、自嘲的に振り返ってみると、器としての施設設備は何かもちこたえているが、スタッフの一員として何をしてよいか、何をすればよいか、とまどうことばかりでした。マニユ

アルがないと動けない自分、立場、能力。まさにいかんともしがたい事実をうけいれざるをえない、情けなさがつりました。

地震のあったその週の週末には、地下鉄が限られた区間とはいえ、動きだしました。母共々に、西区の私の家にもどりました。場所によってこんなに違うのかと、改めて驚きました。電気、ガス、水道、これまでと変わりなく使えることの有り難さをしみじみ感じました。その日から数週間ほどだったでしょうか、お風呂に入れるという、この上ない状態だから、我が家まで来れる親戚や友人に、お風呂が提供できました。この震災で、お風呂を提供できたということが、唯一、人の為に役に立てたかなと思えることです。

この地震で、まざまざと見せつけられた自然の力に畏怖するとともに、自分と職場或いは仕事へのスタンスや人とのつながり、絆というものを考えるようになったと思います。

# 1月17日の記録

道場小学校 小 西 京 子

地震が起きたとき、私はふとんを頭からかぶって、じっとしていました。しばらくして揺れがおさまってから、ふとんをかぶったまま、義母の部屋へ行き、家族が無事であることを確認してから、今度は風呂場へ飛んで行き、浴槽に水を溜め始めました。

水道水が出なくなるかも知れないと考えたとき、家には30代の私たち夫婦だけではなく血圧の高い病人もいるのに、どうしようと、不安と恐怖の気持ちでいっぱいになりました。

私が風呂場にいる間に、義父が、古いラジオを出してきて、居間でその古いラジオをとり囲むようにして、家族ですわりこみ、聞こえにくいラジオの音を、必死で聞いて情報を得ようと思いました。ラジオを聞いていると北区はまだ被害が少ない方だったということを知り、驚きました。とにかくその日は、遅刻をして、学校へ行きました。

学校では、来ることのできた職員だけで、職員会議があり、職員室のテレビは、ずっとつければなしの状態でした。またこの日は、給料日だったので、来ている先生には、こんな日だったけれど、何の支障もなく普段通り、現金を手わたすことができました。現金は非常に有難いと、先生から有難がられました。

夕方、帰宅し「地震直後に外へ出ようとしてぎっくり腰になった」義母を、病院へ連れて行ってあげて、病院から帰って簡単な食事を食べたあと、義母の部屋で、おふとんを敷いて、家族

いっしょに寝ることにしました。主人の方は朝ごはんを食べて、お茶の入った水筒をもって出勤したきり、いつ戻れるかわからないと判断し、とにかくこの家では、私が一番しっかりしなくちゃいけないんだと、自分に言い聞かせていました。

私の住む北区は三田市の近くだったので、家の方は、大きな被害はありませんでしたが、義母の精神的ショックが大きかったらしく、急に血圧が上がり出し200近くになったりする日も、地震以降ありました。体を動かすことのできない病人などが、家族の中にいる人は、本当に大変だったと思います。

今回の地震で、自分が災害に対して無防備だったことに気づき、日頃から災害に対して、備えておかなければいけないんだなと思いました。



## 伊豆大島近海地震から17年目の震災と東京訪問

伊川谷小学校 小川久人

1978年1月14日、小学校6年生だった私は、普段の土曜日と同じく12時20分頃に下校した。丁度校門を出たとき、他のクラスの友人が、「小川、さっき地震があったのを知っているか？」と声を掛けて寄ってきた。それを聞いた私は、「本当か。俺は知らんぞ」

と答えるにとどまった。こう答えたのは、歩いていた私には気が付かなかったためである。結局、この時東京は震度4だった。

帰宅直後、私は両親に、「さっき地震があったって本当か？」と聞いてみた。そうしたら父は、「あったぞ」と答え、更に、「伊豆の方で被害が出ているとニュースで言っていたぞ」とテレビを見ながら付け加えた。テレビを見ると、何と伊豆半島南部の被害の大きさが目に入り、更に落石が観光バスに直撃した様子が映し出された。また伊豆急行や国道145号線の交通網も寸断されていたし、新幹線も運転を見合わせていた。またこれは後年知ったことだが、鉾山のさい堆積場のえん堤が損壊し、猛毒のシアンを含む泥流が川に流れたという。これが「伊豆大島近海地震」で、マグニチュード7.0、死者25名、負傷者211名、家屋全壊96戸、半壊616戸を出した。この地震の影響は半年間に及び、直接的な被害を受けなかったとはいえ、私が初めて体験した大地震であり、その後の防災思想の原点ともなった。

話は少し遡るが、私は1977年4月に東京都保

谷市立東小学校に転校した。4月の始業式の日には校舎を眺めていたら、東側にある奇妙な階段に出くわした。後にわかったことだが、これが「非常階段」で、5年間過ごした板宿小学校にはそれらしきものはなかったのが、驚いたわけである。

それだけではない。校舎内では各階の出入口にも「非常口」の表示がされている。これにより児童は何気なく非常口を知ることができる。また各学級には「学級旗」が備えられている。この学級旗は、教室を移動する際に必ず持ち歩くのである。また避難訓練時には教員がこの旗を持って学級の先頭に立ち、学級の位置を明確にしていたり、休憩時間時の訓練の際には、児童が集合しやすいようになっている。

更に避難訓練も必ず「火災」「大雨」そして「地震」と三種類共する。またビデオ等も上映し、災害の恐ろしさを学習するのである。つまり東京では、いつ災害が来てもおかしくないような訓練を普段からしているのである。これが私にとって大いにプラスになり、17年後の今回の震災に役立ったことは言うまでもない。

時は流れ、1993年8月8日、私は北海道へ旅行した。私は青森駅から札幌行きの急行はまなす号に乗っていた。丁度登別駅に差し掛かった頃、本来通過する筈の登別駅に列車は停車した。その時車内放送が流れた。

「只今地震が発生しました。路線の点検をしていますので、しばらく停車します」と。

私はこの時、「えっ！」と思ったのである。実はこの旅行をする1ヶ月前の7月12日に「北海道南西沖地震」が発生し、北海道南西部、とりわけ奥尻島が大きな被害を受けたり、鉄道の一部に不通区間があったのを知っていた。その後鉄道は復旧したものの、私には一抹の不安があった。それが偶然にも的中してしまったのである。幸い大きな被害もなく、急行はまなす号は約15分停車した後、札幌駅に向けて運転を再開し、この停車時間分の遅れで札幌駅に到着した。その後は地震の不安はあったものの、何事もなくほぼ予定通りに行えた。これが「北海道南西沖地震の余震」で、2度目の大きな地震体験であった。

3度目の大地震の体験が今回の「阪神・淡路大震災」である。伊豆大島近海地震から丁度17年目が過ぎたばかりであった。ただ少し違っているのは、過去2回はいずれも震源地からかなり離れていた場所で、かつ自分自身が移動していた時に経験したものであるのに対し、今回は完全に震源地に近かったし、ほぼ静止状態だったのが異なっている。

1月17日、私はいつものように5時30分に目覚め、TBSの「あなたにオンタイム」を見ていた。デスクの眼が終わった頃、激しい揺れが襲ってきた。私はすぐに「地震だ！」と感じ、布団に潜った。そしてテレビも消え停電となった。私は暗い部屋の中でラジオを探し、スイッチを入れた。そうしたらまた大きい揺れが来て、また布団に潜った。そして6時に完全起床し、暗い中で朝食をとった。幸い私の部屋は、机の上に手紙が、入口の鉄道模型と本が若干落ちた程度で、家全体としてもほとんど被害はなく、

物が若干落ちた程度だった。

夜が明け近隣を見渡しても何も被害がなく安心していた矢先、川の対岸の家が火事になっているのを見た。私は小学校6年生の時、「地震で恐ろしいのは火事です。地震が来たらすぐに火を消しなさい」と教わっていた。これは中学校3年間でも同様だった。それはさらあらず、関東大震災の教訓によるものだった。関東大震災の被害の大半は火災であることは有名である。それが目の前で起こっていたのだから驚いた。

7時30分、いつも通り出勤するため家を出たが、普段通っている三木街道が前述の火事のため通行止めとなり、やむを得ず板宿駅経由で行くことにしたが、そこで見た光景は、前日迄の風景とは全く異なっていた。山陽電鉄板宿駅の上りホームと駅舎は崩壊し、更に太田町2丁目の交差点は信号機の停電による渋滞、道路の陥没、家屋の倒壊が続いていた。離宮植物園前を通らず離宮道経由で行ったためか、順調に走行できたため、8時50分頃に学校に到着した。

学校に着くと何人かの職員が来ていて職員室での作業をしていた。見ると書庫が落ちていたのである。一方事務室はというと、書庫が落ちていた以外はファイリングキャビネットが開いていただけだった。しかし落下した書庫の扉のガラスがファイリングキャビネットに当たったのか割れており、破片が散らばっていた。校長室も額縁が落下し、ガラスの破片が散らばっていた。職員室での一通りの作業を終えた後、事務室の作業にかかった。その頃電気が復旧し、散らばったガラスの破片を片付け、書庫を元の位置に戻した。一部の職員は校舎の見回りをし、私はすぐに銀行へ給料を受け取りに出掛けた。

給料を受け取ると学校に戻り、給料の仕分け作業を行った。そして学校に来ていた職員に給料を渡したが、来られなかった職員の分は金庫に入れて保管した。

仕事を終え帰宅すると、電気は復旧していたが、水道とガスは止まっていた。電気は復旧していたので、電子レンジが使えたため夕食は温かい食事ができた。その後普段通り就寝した。

翌18日も普段通り出勤した。出勤してみると学校の水道は止まっていた。水の確保もままならない状態になり、近くの学校に連絡し、水の確保をした。ところがその帰り道、普段なら40分で行ける道が大渋滞のため5時間かかって帰宅した。この反省から、翌19日から部分復旧をしていた地下鉄を利用して通勤することにしたのである。

19日以降、仕事の合間をぬって食料の買い出しと水の確保に走った。連日給水用のボトルを持っての通勤は大変だったが、車利用の通勤よりは時間が正確なため、苦もなく成し遂げられた。給水車が毎日学校に来ていたが、この給水車のタンクに書いてあった名前を見ると何と「飯能市水道局」と書いてあった。震災の支援とはいえ、私たちのためにわざわざ埼玉県飯能市から来てくれていたということで、なつかしさと感激にひたってしまったのである。

22日の夜、東村山市に住む友人から電話がかかってきた。彼は連日報道されていた被害状況を見て電話をしてきてくれたのである。彼は私が無事だったということを知ってほっとしていた。また彼の会社（松屋）あげての支援活動をしていることを伝えてくれた。このことに対し、私は深く感謝をした。電話は長時間にも及んだ。

23日以後、学校は授業を再開した。そして御蔵小学校への支援活動と宿直勤務が始まった。そして山陽本線の復旧に合わせるかのように、仕事終了後の銭湯通いも始めた。またこれに合わせ、震災で中断していたジョギングも再開した。その後家では水道が1月27日に、ガスは2月20日と、徐々にではあるが、震災前の生活に戻ってきた。なお学校での水道とガスの復旧は比較的早かった。また自動車通勤も3月3日に再開した。

4月に入り、宿直勤務は終了した。そして東海道本線及び東海道新幹線の相次ぐ復旧により、5月の連休明けの東京訪問を計画した。この月に発行された「月間ランナーズ」を読むと、5月14日に皇居で「第1回阪神大震災義援金マラソン大会」が開催されることを知った。かねてから皇居周回コースを走ってみたいという希望を持っていた私は、早速10kmの部に参加申し込みを行った。

東京では3月以降、世間を驚かす物騒な事件が多発していたが、これにもめげず、5月13日に東京へ旅行した。埼玉県狭山市に住む友人に連絡を入れ、東京ドーム前の宿泊するホテルのロビーの前で友人と再会した。

私は早速、友人が希望していた神戸新聞社発行の震災報道縮小版を渡し、新宿へと向かった。中央本線の各駅停車の車内で、今回の震災の被害状況等を伝えた。丁度四ッ谷駅を発車し、御所トンネル（四ッ谷駅西）に列車がさしかかった頃、1月18日の経験を話した。以下はその一部である。

（私）「横山（友人の名前）、地震が発生したら、移動手段に車を使うな」。

(友)「そう言うけれど、交通機関が動いていない時には、自動車しか使えないのではないか」。

(私)「僕が身を持って体験したのだから間違いではない。普段40分位で行ける道が5時間近くかかったのだ。それに信号機が故障したり、道路が陥没したりしているし、更に救援活動に支障を来す。こんな時はバイクや自転車の方が速いぞ」。

これらの会話は延々と新宿駅到着どころか、下車後とりわけ食事をする場所迄続いた。

食事中も、また終わった後も震災の話題は続き、結局23時迄かかった。その後新宿駅で別れ、私はホテルに戻り翌日の大会に備えた。

翌14日、私は「阪神大震災義援金マラソン大会」参加のため、皇居北側の竹橋公園に行った。受付で私は主催者に神戸から持ってきた「美し都、We Love KOBE」のステッカーを渡した。スタート前に1分間の黙祷をし、その後スタートとなった。うれしいことに、スターターは私が渡したステッカーを胸に付けてくれたのである。10時丁度にスタート、私は10km(2周)に参加。1周目は快調だったが、2周目になり、首都高速道路代官町入口付近から震災による練習不足がたたったのか、スピードが落ちた。千鳥ヶ淵手前付近で、渋谷から皇居迄走ってきたという女性が私に追いつき、それからゴール手前の平川橋付近迄併走となり、無事にゴールインしたが、タイムこそ平凡だったものの、皇居周回コースを走れたこと、震災後初めて走った大会であることを考慮に入れると、満足感が十分に得られた。この大会はTBSが取材にきており、昼のニュースで放送された(ただし東京ローカル)。

その後私は吉祥寺へと向かい、吉祥寺駅から西武鉄道池袋線保谷駅前行きのバスに乗った。このバス路線の沿線に、武蔵野市立第四小学校と保谷市立保谷小学校がある。(他にもあるが、道路に面しているのはこの2校である)。この両校は車窓から見えるが、両校に共通して言えることは、校門の前に避難できる地域名の地図の案内板が立っていることである。道路の上にある避難指定場所の看板もあるが、学校の校門の外にもあることで、念には念を入れているようで、私は感心した。神戸の学校にどうして校門の前に避難地域地図がないのか不思議でたまらなかった。そう考えているうちにバスは保谷駅前に到着。約30分間のバスの乗車は終了したが、十分な収穫が得られたバス乗車であった。そして一路帰神した。

毎年最低1回は東京へ行っているが、今年は大きな収穫が得られた。帝都高速度交通営団(営団地下鉄)発行の「メトロニュース3月号」には、今回の震災の教訓を真摯に受け留めるという記事が書かれていたし、被災者への義援金を集めるためのマラソン大会の企画(これは9月にも開催された)等、東京の人々が今回の震災を人事とは思えないような態度で接してくれたことだった。人の心の温かさに感謝している次第である。

伊豆大島近海地震から丁度17年目。奇しくも同じ時期に起こった今回の阪神・淡路大震災。小学校6年生の時にテレビで見た伊豆の惨状と今回の神戸市の惨状は大きさこそ違えど、地震による災害であることには変わりない。これらの教訓が今後役に立つものが大きいと思う今日この頃である。

## 当時を振り返って

住吉小学校 福元 雅子

避難所になった学校は、自分の職場でありながら、まるでお客さんになってしまったような気持ちでした。「通勤」というよりも「痛勤」といっていいほど（片道3～4時間かかったりしました）の状態でしたが、家に帰れば普段通りの生活ができましたので、避難生活をされている方には申し訳ないような気持ちにもなりました。そんな気持ちから、なんとなく後ろめたく感じて、化粧もほとんどせず、長い髪もしばらくは束ねていました。

また、全国からの救援物資は、本当にありがたかったのですが、校舎にあふれかえった物資を見て、学校再開へは遠いと感じました。

2月の下旬頃からは、年度末とも重なり、特殊業務手当や宿日直手当、通勤手当、災害見舞金など普段とは異なる事務処理に四苦八苦していました。

いくら忙しくても、おめでたいことの事務処理なら苦痛ではありません。でも、同じ職場の職員や、職員の家族や、学校の児童が亡くなっているのに、その事務処理に追われて、ひとりひとりの死をゆっくりと悲しんでいる時間や、心のゆとりがなかったことが、今になってより一層、悲しく感じられます。

## 震災を機に

長楽小学校 水島 直美

1月17日、激しい振動により目覚めた。

その日の午前中は、恐怖と驚異とでア然として過ごした。心のほんのすみっこで（今日は給料日だけど…）と気にはしながらも（振込みだからいいか、こんな状況で学校に行けっこないや）ということで3日間も、休ませてもらった。（今から思うと、なんと無責任な…と反省している）。

20日は、市費の給料日だし今日こそはと、歩いて出勤した。

学校に着いて初めて事の重大さに気付いた。

“学校”というところは、児童が勉強したり遊んだりするところであり、事務職員としては、職員や児童たちにとって、より良い環境をつくる仕事という認識しかなかった。

しかし、この震災で“学校”は、地域の人々にとってもかけがえのない大切な場所であり、事務職員の仕事も、職員に給料を出し、物品を購入するだけではないんだとつくづく感じ、今までの自分を深く反省した。

4月1日、このような状況の中、採用となり、忙しさの中であわただしく過ぎてしまったが、すこし落ち着いた今考えると、震災により苦しかったりつらかったりしたけれど、すごく大切な事を学んだと思う。これを機に、今までの甘えを捨て、前向きに仕事をしていきたいと思う。

そして、この年に公務員として職をもてたことを幸せに思う。

## 地震…自身…自信なし

御影北小学校 増田美由起

「とにかく一度学校へ集まって下さい」と、21日、土曜日に学校から連絡がありました。子供二人を祖母に預けて、とにかく西宮から自転車で出勤です。通れるはずの道が通れず、崩れそうな家の間を縫って2時間ほどかかってたどり着くと、避難所となっていた学校は、人と物であふれかえっています。学校の建物自体は思ったほど被害が少なく、事務室も書類が落ちて散乱しているだけ。紛失したものもなく、ひとまず安心。さあ、とにかくまず救援物資の運搬です。そして、引切りなしにかかってくる安否確認の電話の対応。避難していらっしゃる方への連絡。2週間ほどそんな生活が続きました。

2月に入ると避難所としての組織作りがほぼ出来上がり、学校も再開し、わずかに安定した空気が戻ってきました。そんな中でサービスの取り扱いetc…の通達、事務連絡が舞い込んできました。久しぶりの本来業務です。仕事出来る喜びというものを少し味わいました。

が、それもつかの間、次々とやってくる錯綜した情報でてんでこまいです。その上に本来、1、2月で片付けるべきものが出来ていないため事務処理がどっさり残っています。何が何だかわからないまま3月を過ごし、新年度を迎えました。結果的には9月に避難所を解消。この数か月間の中で、事務職員は職員の一人である、という認識を強くしたと同時に、職員として人間としてとっさの判断力がとても問われた時期だったと思いました。

## 何も出来なかった…

雲雀丘小学校 市枝 賀子

ハワイでの挙式と旅行を2日後に控えた早朝の出来事でした。幸い私の家は高台にあったため大きな被害がなかったのですが、窓が開けるとすでに火の手が4～5箇所上がっていました。もはや私は挙式や旅行のことを諦めた…というより忘れていたという方が正確だったと思います。そんな中、「一生に一度のことやのに。行けるとこまで行っておいで」と言ってくれた両親の言葉に、「行ってもいいの？」と後ろめたい気持ちになったのを覚えています。旅行会社に問い合わせても、「自己都合によるキャンセルになります」との冷たい対応に驚くだけでした。その後、学校へ行き校長先生に旅行へ行きたいとの旨を申し出ました。幸い学校の被害が小さかったこともあり、「気をつけて行ってきなさいよ」とのお言葉に甘えて、当日出金できなかった給料等お任せしたものの、後ろ髪をひかれるような思いで翌日から出発させていただきました。

ハワイに着いても、神戸から来ている…と言うと出会う人の反応は普通ではなく、改めて震災の規模の大きさを感じ、こんな所にいていいのかなぁ…と罪悪感にかられる日々でした。

帰国後、すぐに学校へ行くと避難者数もわずかで職員は物資の整理や、児童の連絡先などの情報収集に追われていました。職員室も事務室もほぼ正常に片付いており、何もなかった自分が情けなくなったのを覚えています。大きな被害を受けられた方々には申し訳なく、今でも震災当時の話になると情けなさや罪悪感を感じざるをえません。

## 1年がすぎて…

会下山小学校 河内 節子

納得するにはあまりにも大きな自然の力でした。ふわふわと夢の中を歩いているような気持ちはずっとつきまとい、自分が見たもの、したこと…、何もかもが信じられず、得体の知れないものでからだじゅうがあふれ返りそうでした。最近になってようやくそれら一つ一つを消化する作業が私の中で始まったように思います。今たしかに言えることは、いのちというもの、生きるということについての考え方が変わってしまったということだけです。

## 今、振り返って…

多聞台小学校 松井 智子

「阪神大震災について」…原稿依頼を受けていざ、書こうと紙面に向かって思うように手が動かない。震災後、約1年たとうとしている今思うことは、生まれてはじめて味わった強烈な思いも、やはり時間と共に薄らいでいくということ。

ボランティア活動を通じて、「私のこれから生きる道は看護婦だ」と言って、教職を捨てて看護学校へ飛び込んだ元同僚。また、近所の仮設住宅で菊作りなど力強く生活しているお年寄りの方々。私の回りではそれぞれ自分を見直し、新しい目標に向かって進んでいく強靱な精神力が感じられる。「もっと何か私にできることがあったのでは」と冷静に反省する自分に、正直言って何か“さみしさ”を覚える。この何百年に一度あるかないかといわれる“不幸な出来事”から私自身何か得るものがあったのだろうか。

## 大震災の思い出

枝吉小学校 仲野 浩

大震災の事を思い出すと今でもぞっとする。いつも6時に起きるのだが、あの日は5時30分頃、一度目が覚めた。そしてまたうとうとしていると、突然家が激しく揺れて、本当に家が壊れるのではないかと思った。怖くてふとんの中でじっとしていると、家内が雨戸を開けて外に出た。庭の灯籠がひっくりかえっていた。揺れがおさまったので、すぐに2階の子供を起こしに行ったが家具も倒れていなくて無事だった。外壁もあっちこちに亀裂が入っていたが、幸いにも屋根瓦は壊れていなくて助かった。ガラス戸棚の食器も倒れていた。それでも家族全員が、ケガもせずに済んだのが何よりだった。しかし、家族を亡くされた方や家が全壊になった方には、なぐさめの言葉もない。まだ年月はかかるだろうが、一日も早く元の美しい神戸の町になる日を待ち望んでいる。

## 阪神大震災で思ったこと

桜の宮小学校 田中 恵子

この度の震災で幸い私の家は無事でしたが、私の学校の職員では、全壊または全焼が7名、半壊1名、一部損壊それまでいかなくても家の壁に亀裂が入った、ガレージが壊れたとか、私の二男も半壊、親戚が、知人が…と至る所で災害に見舞われ、それはひどい状態です。話を聞くたびこちらが気が滅入り、被災された方が、早く立ち直ってほしい、早く元に戻ってほしいと願わずにはいられませんでした。

そして普通に生活出来ることがどんなに有り難いことかと思ひ感謝の毎日です。

## 阪神大震災を体験して

長田小学校 浜田 和彦

地震の当日は、車で出勤しました。自宅が停電したので、震災の情報がありませんでした。

学校へ到着し（当時は西区でした）テレビで神戸市の被災状況を報道していましたが、どうしても信じられずテレビの中だけの話であればと思いました。

その後の業務内容は、自分の無力さを感じたことが多々ありましたので、あまり思い出したくないことばかりですが、平成7年1月17日（火）、雪が少しばらついた寒い朝だったような気がします。

## 思 う こ と

高羽小学校 安部 里美

あの日、思ったこと、

- ・ 災難は、誰の身にも起こり得る。
- ・ やりたい事は、我慢しない事が肝要。

最近では、

- ・ 災難は、忘れた頃にやってくる。
- でも、ちょっと忘れつつある今日この頃。
- ・ 人生やりたいようにできたら苦労はない。
- やっぱり現実には厳しい!!

このように思っているのも、私自身、大きな被害にあわなかったからでしょう。被災して大変な思いをされている方々、本当にごめんなさい。

## 愛

志里池小学校 嶋田 和子

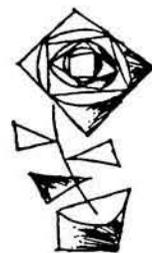
いくつになっても どんな時にも夢多かれ



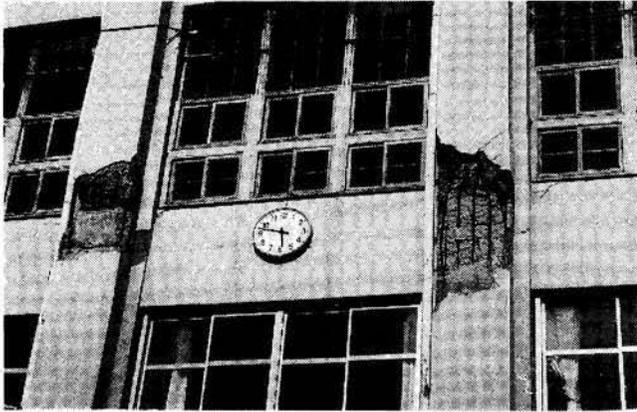
浮きあがった運動場



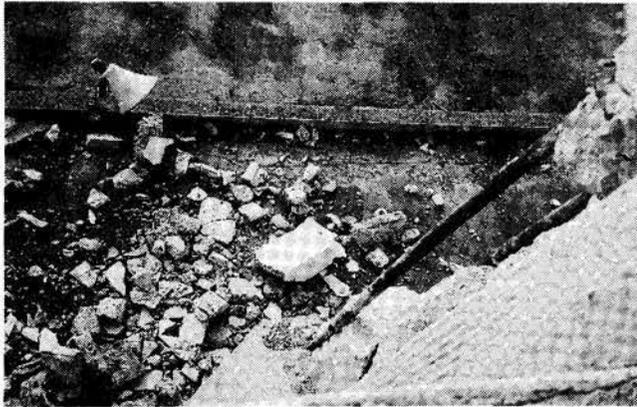
学校にも床屋さんのボランティアが来られた



## 本庄小学校の記録



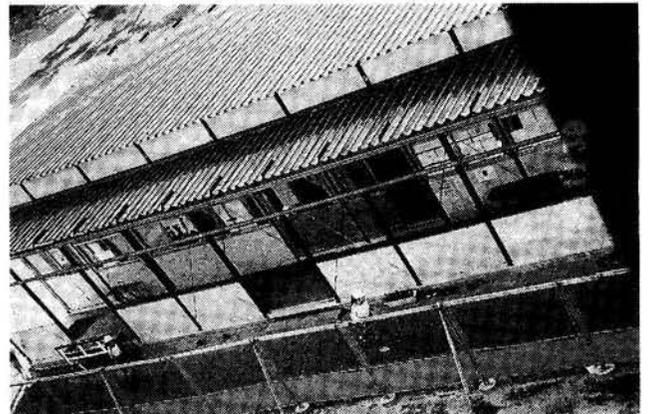
5時46分で止まった校舎の時計



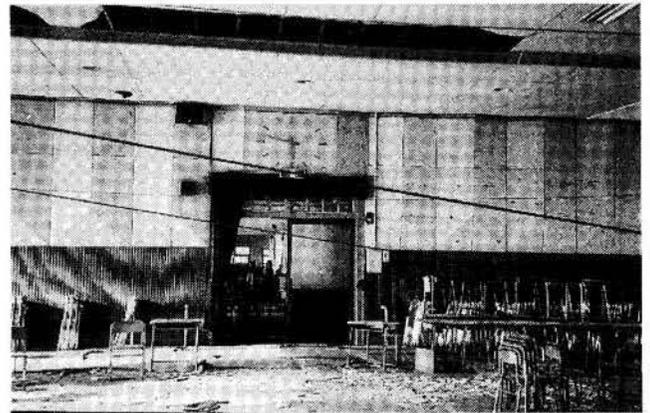
崩れ落ちた校舎



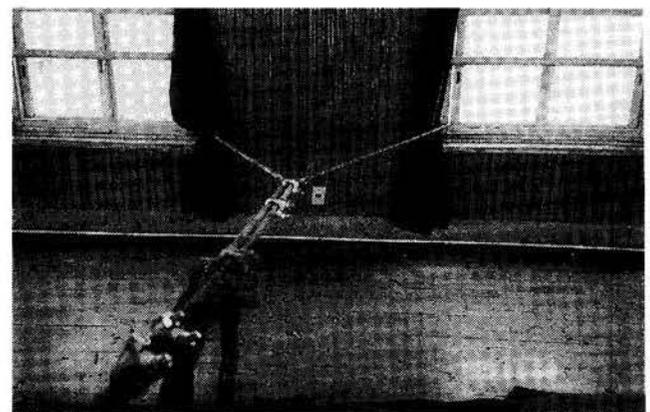
ジャッキアップしている東校舎



立入禁止ゾーンと仮設校舎の空スペースで体育をする子供たち



足を踏み入れると怖い。床はミシミシといい、大きな圧力がかかって建物がふくれている。もちろん立入禁止の講堂。



講堂を支えるワイヤー

## 大震災について思うこと

鷹匠中学校 宮松克育

### はじめに

阪神・淡路大震災は死者5千5百人，負傷者3万4千人を超え，家屋など倒壊，焼失数は14万戸以上に達し，関東大震災以来の震災となった。学校施設，学校教育そのものも大きな被害を受け，教職員34名，児童・生徒・学生485名が犠牲になり，被災した学校施設は，1,095校にも上った。このような大規模災害時において，学校がどのように動き，事務職員として自分がどう動いたかを事例を通して考えていきたい。

### 1. 本校の罹災状況と復旧

本校は，震災直後より新館，西館，飛鷹館を開放し，ピーク時には約900名の避難住民を収容した（住民が全員学校を離れたのは，11月23日）。施設面については，南館を除き，すべての校舎が被害を受け，建て替えなければならない状況である。本館と西館，新館と東館を結ぶ渡り廊下と東館は既に取り壊された。

本校の敷地は，池を埋め立てて建てられていたため，運動場が液状化現象をおこし，しばらくの間使用不能となった。プールは，亀裂が入り当日の午前中にはすでに水が抜けていた。

ライフラインの復旧については，電気が九州電力の電源車により22日，水道が被災住民用に1月30日に1ヶ所，ガスについては震災直後よりいまだ復旧の見込みが立っていない。

また，本校の教職員43名中，全壊10名，半壊9名，一部損壊10名となり何らかの被害を被ったのは，全体の半数以上となった。

### 2. 当日からの状況

当日は，一番に管理員が到着したが，すでに正門，北門の周辺は避難者で一杯，とりあえず校舎内に入ってもらったがパニック状態であった。校長，教頭はじめ8人ほどの教職員で対応した。2，3日は避難者の対応に追われていた。その後，校長・教頭が各教室を回り，「われわれ教職員は生徒の安否確認などの職務がある。避難者の色々なお世話は，本来区役所から職員がきてしなければならないのだが，それもこのような状況ではあまり期待できない。せめて救援物資や食事などの仕事を分担してやっていきたい。われわれも被災者，立場は一緒だという共通理解をして欲しい」と説いた。その結果，20日には，各教室の代表約30人に集まってもらい，救援物資の仕分け，食事の分配，班長の選出，各班の役割分担をそれぞれ決め，自治組織ができあがった。

### —— 当日の記録より ——

- 1995年1月17日（晴）
- 午前5：46 阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）M7.2のため休校
  - 出勤18名（教職員3名連絡取れず）  
宿泊3名（教頭，技術職員，臨時講師）
  - 学校被害 外部フェンス・石垣→倒壊（校舎東側，プール北側，校門南側南面全部），運動場地割れ，東館1F全壊，新館1F西廊下・西館1F教室の柱亀裂，本館1F調理室柱半壊，校長室・事務室・会議室・印刷室の床浮き上がり，渡り廊下全壊，玄関崩壊
  - 避難住民 約500名（飛鷹館，新館・西館の教室開放）
  - 遺体安置所 なかよし教室，第1理科室  
第2理科室 計34体
  - 生徒等安否 1年2組 生徒死亡  
保護者関係 6名死亡
  - 伝言板設置

### 3. 授業の再開

#### I. 生徒の実情把握について

第一回登校日(1月23日)安否確認、諸連絡

学 年	1年	2年	3年	合 計
在 籍	262	262	277	801
登 校	104	99	128	331(41%)
死 亡	1	0	0	1
不 明	6	14	20	40( 5%)

第二回登校日(1月25日)安否・被災状況確認

学 年	1年	2年	3年	合 計
在 籍	262	262	277	801
自 宅	82	72	95	249(31%)
校 区 内	43	33	49	125(16%)
市 内	42	67	63	172(21%)
県 内	40	29	20	89(11%)
県 外	48	58	47	154(19%)
死 亡	1	0	0	1( 0%)
不 明	6	3	3	12( 2%)

#### II. 授業について

- ①使用可能教室の確保
- ②水洗トイレなどの水の確保
- ③指導體制の確立、通学路の確保

(正面、渡り廊下の撤去など)

以上の条件から二部制(月曜～金曜の午前中は3年生、午後及び土曜日は1年生と2年生が隔日に登校)をとり、授業時数は2時間で、2月8日再開となった(3月より授業時数は各3時間に変更)。

なお、生徒数は1月16日現在801名であったが、授業再開時には、約630名となっていた(12月1日現在709名)。

卒業式(3月14日)は、近くの私立の学校のホールを借りて行われ、269名(277名中)の卒業生を送り出した。

#### III. 教室について

職員室・事務室などの仮設管理棟と仮設教室は、運動場の南部分と学校西側の公園北部分の2ヶ所に建設された。4月15日に引っ越しを完了したが、ライフラインについては次の表のように回復した。

	ガ ス	水 道	空 調
運動場側	6 / 28	6 / 28	6 / 29
寿公園側	6 / 28	6 / 27	7 / 9
南館	-----	2 / 13	9 / 2
生徒昼食用給湯設備は、9月30日に完了 理科室、家庭科室等の水道・電気関係工事は、10月6日完了。			

#### 4. 市教委との文書交換について

本校と市教委との文書伝達方法は、

- ①技術職員(管理員)による市教委への文書搬送
- ②メールカーによる文書搬送(週2回)
- ③端末機による文書管理システム(随時)
- ④ファックス、電話(兼用で2回線)

となる。しかしながら震災直後は、①、②の方法では、震災による交通網の途絶・渋滞、市役所の一部損壊に伴う安全面の不安から搬送ができなかった。その後、①は3月20日に、②については5月1日より各区に文書収発の基点校を数校設けることにより一部稼働した。

③の端末機については、停電のため一時使用不能となった。電気の仮設とともに再稼働したが、パソコン通信のメリットである双方向の情

報伝達が、押印などの都合で十分な活用には至らなかった。

④については、ファックス機器が落下による破損などにより使用不可能となったが、民間企業の寄付により1月29日に交換された。2回線しかない学校の電話は、発信規制がかけられたり、避難住民の安否の問い合わせなどにより、パンク状態になった。そのため、発信規制のない公衆電話（無料）が1月19日に2台設置（被災住民との併用）、また1月30日には市教委より携帯電話が校長に貸与され、生徒の安否などの確認作業や緊急連絡時に非常に役立った。

#### 5. 情報の収集について

服務などの取り扱いについては、県教委・市教委とも想定していた以上の震災であり、また学校施設などの復旧対応や他部局への応援などにより、既存の取り扱いでは十分に機能できなかった。そのため組合が現場の要求をいち早く取り入れ、両教育委員会との交渉を粘り強く行ない、その交渉結果（教育情報や服務・福利厚生等についての情報）が市教委に先駆けて組合側から流れてくるような状況であった。

#### 6. 情報の伝達・交換について

教育委員会や組合から流れてくる情報を確実に教職員へ伝達する方法として、交通手段がなくなり徒歩で通勤する職員や、通勤手段があっても通常の何倍もの時間を費やして出勤する職員のために、通常8時25分より開始していた職員打合せの時間をずらし、口頭での連絡を避け、できる限り文書化することにした。事務室から教職員への連絡についても、できる限りわかりやすく文書化するよう努めた。

学校の避難者への連絡については、連絡メモ

などを統一し、避難場所別、五十音別の名簿をコンピュータで作成・管理し、誰が対応しても同じ条件となるようマニュアル化した。

#### 7. これからについて

神戸市の避難所としての学校園数は、191校園、避難住民136,295人（ピーク時）、社会教育施設は、12施設、避難住民2,267人（ピーク時）という状況の中、避難住民と共存する教育活動が全校再開されたのは、震災から39日目にあたる2月24日であった。この間、「学校施設の再建」「神戸の教育の再生」「教職員定数の確保」など緊急を要する重要な課題があり、これからも、防災拠点としての施設の考え方、仮設教室における教育条件整備、教職員・児童・生徒の心理面へのケアなど中・長期的に取り組んでいかなければならない課題が山積みされている。一方、事務職員にとって災害に伴う服務・福利関係の特例措置、それに付随する諸手当の申請や帳簿の作成、教育環境整備の復興予算措置に伴う調査・根拠書類の作成など緊急を要し、特別な事務処理が煩雑かつ膨大になった。このような状況であっても、的確に情報の伝達や迅速な処理方法の確立を、教育委員会と共に真剣に考えていかなければならない。危機に際して、教育委員会と協議をし、自然災害だけでなく、大規模な事故災害や社会的不安をもたらす恐れのある事件へも的確に対応できる危機管理マニュアルの作成、条例・規則などの法的な見直しや、あいまいな責任所在の明確化、よりよい教育の再生と創造に向けて努力していかなければならない。このことが、全国から差し伸べられた温かい援助の手にお答えすることになると確信している。

## 語り継ぐ明日へ

六甲アイランド小学校 鈴木 仁 美

あの日以来、ベッドに入って寝入りばなに、グラリと揺れたような気がして目が覚めることがよくある。地震情報にも発表されないし、多分気のせいなのだろう。これもPTSD（心的外傷後ストレス障害）の一つなのかなと思う。

1月17日午前5時46分

あの朝、垂水区の自宅で夢うつつであった私は、ベッドから振り落とされないように必死でしがみついていた。ようやく起き上がって見た電気のない冬の夜明け前は、漆黒の闇と身も凍り付くような冷気に包まれていた。次々と襲い来る余震の中で、体がガタガタと震えはじめた。消防車か救急車のサイレンは絶えず鳴り響き、東の空からは黒い焼け焦げた塵が降ってくる。

幸い3時間後に電気だけは復旧し、テレビをつけるとその惨状はとてつもない我が家の比ではない。しかも震源は家から見える淡路島だという。うるさいほどに飛び交うヘリコプターは、そのせいだったのか。ベランダから目をこらして北淡町とおぼしきあたりを眺めるが、もちろん目に届く惨状ではない。ただ、あそこに、そして私が見知った街で、家を、そして命を失い、まだ瓦礫の中に埋もれたまま助けを求めている人がいる、というのは悲しい事実であった。テレビが提供する映像を、次々と増え続ける死傷者の数を、絶望的な思いで見つめ続けた。

今日は給料日だ、出勤しなければと思う。しかし電車はない、車もない、自転車すらない。連絡しなければと思う。電話は通じない。回線

が混雑するから電話はかけないようにと、テレビは繰り返し放送している。私がかけた電話が、混乱の中で学校の迷惑にならないだろうか。学校の状況も、支給されるべき給料も心配だが、今はそれどころではないようにも思う。無事な地において、何もなし得ない自分がもどかしい。

2日後に激震の東灘区に住む友人が、一旦避難した北区ひよどり台から徒歩でやってきた。妊娠4ヶ月、夫は海外出張中であり、頼るところはない。彼女は、まだ煙がくすぶる長田を抜け、崩れかかった山陽電車の線路を歩いて4時間、ようやく我が家にたどりついた。身重の体で、水や当面のものをつめた重いリュックを背負い、憔悴しきった彼女を玄関に迎えたときには涙が出た。テレビに映し出される避難所の学校の体育館で、公園で、路上で、毛布にくるまり震えている人々に私は何も出来ないが、今はせめて私の出来ることをしよう。

六甲アイランドでは

学校により早く出勤できたのは、地震後6日目の月曜日であった。やっと車の手配がつき、友人の夫の運転する車で学校に送ってもらったときは、片道に4時間半かかった。はじめて間近で見た神戸の街は、家が、ビルが、道路が崩れ、または焼け落ち、街全体からうめき声が聞こえてくるようだった。

幸い学校に大きな被害はなかった。あの激震の東灘区にありながら、そこだけぽっかりと整然と立ち並んだ六甲アイランドは、瓦礫の街を

見続けてきた目には新鮮な驚きだった。ただ、旧市街と島を結ぶ唯一の動脈、六甲ライナーの線路はあまりに華奢で、海に崩れ落ちていた。

職員も、もちろん児童も保護者も全員無事だった。全員の無事を確認した最初の職員会で、校長は感極まって涙ぐんだ。久しぶりに見る顔はまだ全体の半分ほどだが、口々にお互いの無事を喜びあい、それぞれの体験や家の状況を語り合った。全壊の家から命からがら逃げ出し、近隣での救助作業に奔走したこと、瓦礫の中に数時間埋もれていた恐怖、そして教職員もまた被災者として、避難所で寝泊まりしていた。

他の学校とは違い、本校が避難所となって多くの住民を受け入れたのは、地震翌日の夕刻、御影浜のガス漏れ事故で、東灘区南部と六甲アイランド北西部に避難勧告が発令されたときだけだった。そのときは、一時2,000人を越える住民が学校に避難してきた。宿泊した住民は、最高69名だった。しかし、着のみ着のままでも何もかも失ってきた人々ではない。避難所となった学校は、その業務に従事してきた教職員は、どれほど大変だったことだろうか。

その後、東灘区の救援物資の供給基地に指定され、昼となく夜となく届けられる物資の受け入れのため、災害待機する教職員の宿直体制は3月末まで続けられた。

学校は1月30日に再開し、2時間の授業が始まった。まだ出勤できない教職員もいたし、多くの児童がライフラインの途絶や交通状況のため島から避難しており、当初の出席人数は全校児童の4割にも満たなかった。「仮」という転出入事務は、異例の事態に処理方法に明確な指示のないまま事実が先行していった。

## 通勤が大変だった

六甲ライナーの代替バスが運行を始めたが、1時間待ってようやくバスが来るということもある。そんなときは道路や橋が渋滞しているのだから、乗ってからも住吉—アイランド北口間、通常10分の所要時間が1時間半かかることになる。他の交通機関も運行していない中で、さまざまな代替バスを乗り継ぎ、ひたすら歩いての通勤は往復7時間かかった。職員集合は一応10時となっていたが、必ずその時間に行けるとは限らない。ハーバーランドから六甲アイランドまで普段は観光で運行されていたシーバス（船）が、私の通勤手段となった。始発の船に乗船するため、寒風吹きすさぶハーバーランドの岸壁で、帽子を耳までかぶり1時間半待つ日もあった。

そうして出勤しても、仕事らしい学校事務の仕事はない。仕事をしようにもオンラインは稼働していないし、市役所も県庁も混乱を極めている。指示もないまま、何をしなければならないかは自分で見つけなければならなかった。避難所となっている学校への支援派遣も始まった。私は学校に留まり本校の仕事に従事したが、今困っている事務職員の仲間に、何か助けとなることは出来ないかと考えていた。

## 震災からの復興

ライフラインは確実に復旧していった。垂水の自宅では、水道は1月26日に、ガスは2月下旬に復旧した。学校では、電気が震災当日の夕刻、水道が2月7日、ガスは2月8日であった。六甲アイランドの全世帯の復旧が完了したのは、2月12日だった。神戸の街には全国からきた工事車両があった。極寒の日も雨の日も、黙々と

働いている工事の人々には、自然と頭が下がった。電気も、水道も、少し遅れたガスも、どこかで一生懸命復旧してくれた人がいるからだ。

震災から1ヶ月、2ヶ月が過ぎ、通勤の困難さはともかく、学校はいつもの年度末の忙しさを迎えた。通勤もJRが灘まで、阪急が部分開通したり、4月にはようやくJRも全通し、次第に改善されていったが、肝心の島へのアクセスは8月末まで回復せず、私たちを悩ませた。

しばらく放置されていた学校事務も、急に忙しさを増した。教職員の勤務も、予期されなかった事態に、特殊業務や超過勤務が実績のあとから命令が出て、手当を支給することになった。あの混乱のさなかで、どう把握して請求しろというのか。支給基準や運用は次々と変わる。今日指示がきて、明後日には調書を作って提出ということもある。通勤手当や住居手当は、震災前の手当額が保証されることになったが、住所が変わったり、交通手段の変更では通常と同じように届を提出しなければならない。普段でも3種類の交通機関を利用して通勤している私は、震災前の状態に回復するまでに5回通勤届を書き直した。市教委の指示通り正しく処理しようとすれば、事務は煩雑を極めた。交通機関の復旧のたびに通勤届を出し直す教職員も根をあげたが、事務担当者の私も大変だった。

新設2年目の学校は、校舎に大きな被害はなかったが、埋立地特有の地盤沈下を起こした。校舎の周辺では、思いがけないところに小さな子供ならすっぽりはまってしまうような大きな穴があいた。教職員総出で危険個所の点検をし立ち入り禁止のロープを張った。安全な学校に戻すため、補修や工事が続いた。液状化現象の

泥が乾いたあとは、糊のように張りつき、さらに細かい塵となって島を舞った。

### 新たな課題

学校では、新年度にはいるまでに、転出していった児童のほとんどが帰ってきた。そして、いつもの年度当初と同じ職員会が続き、教育目標や年間計画が審議されるのを、震災の被害の大きかった長田区の小学校から赴任してきた教頭は、別世界のようだと話していた。この教頭の出勤簿は、地震の日から3月末まで、日曜日も祝日も週休日もなく、出勤印のない日は4日しかない。2月は1日も休んでいない。

六甲アイランドには、仮設住居が立ち並び始めた。家を失い、経済的にも困窮し、心に傷を負った子供たちの受け入れも、学校の新たな課題となった。地域柄、今まであまり意識されることのなかった就学援助や教育扶助、さまざまな奨学金の手続きも、今すぐに学習できる用意も、みんな子供たちの学習権を保証するためのものだ。

### 学校は子供たちのものだ

震災から半年が過ぎた頃から、いろいろなところから震災記録が刊行され、学校にも寄贈されるようになった。文書事務担当者として、真っ先にそれを手にする私は、ほとんどのものに目を通した。新聞記事の縮小版や報道写真集にあの頃のことを思い出し、今さらのようにいつ地震がきても不思議はない危険な地面の上で、私たちは生活していたのだと知った。私たちが無知だったのか、誰かが警告していたのか。

震災を詠んだ短歌集は、涙を流しながら一晩で読んだ。ティッシュペーパーで拭い続けた目は、翌朝ただれてしまっていた。子供たちの作

文集は、係に渡す前に学校で読んだ。淡々と書き綴られた文章は、子供たちの身に降りかかった災害の酷さも、家族の愛情も、そしてそこからたくましく生きぬく力も、余さず伝えていた。子供は未来への歓びである。学校は、その子供たちのものであり、私たちはその子供たちを育てるために学校で働いているのだ。

総合教育センターのパソコン通信に、2月5日に西灘小学校4年2組の教室に避難されていた方が、教室を空けるときの黒板に残されていた言葉が、載せられていた。

あ り が と う  
ひ と と き の  
安 ら ぎ を  
気 持 ち よ く  
す ご す こ と が  
で き ま し た 。  
わ た し 達 も  
が ん ば り ま す 。  
き み た ち も  
が ん ば っ て  
く だ さ い ね 。  
そ し て  
や が て は  
日 本 の  
将 来 を  
に な う  
心 の や さ し い  
豊 か な 考 え を  
も っ た  
若 人 に  
な っ て く だ さ い 。  
ほ ん と う に  
あ り が と う 。

一同より

学校は子供たちの学習の場である。非常時には地域の核として、学校は多くの住民を受け入れ重要な役割を果たしてきた。しかし、学校はいつでも子供が帰って来られる場所であってはならない。不幸にして住む場所を失った人々は、悲しく怖い思いをしながら、良識と感謝の気持ちを忘れず、復興と未来を子供たちに託したのだ。

この言葉は、本来の仕事ではないながらも、人として学校職員として精一杯の努力を続けてきた私たち教職員にとっての何よりのねぎらいであると同時に、学校が子供たちのものであることを思い出させてくれるものだった。自分たちの教室に戻ってこの言葉を目にしたとき、子供たちの心にも何かが残ったに違いない。

#### 学校事務職員の震災記録文集に寄せて

9ヶ月たった今でも、震災のことを考えると胸が熱くなる。市民も学校も教職員も頑張った。学校や教職員の本務より被災の事実が先行した。その中で、神戸市の学校事務職員として、私たちも自分の出来ることに一生懸命だった。もう二度と起こって欲しくない、経験したくないことだが、今、ありのままの姿を記録し、後の世に伝えていくことは、この震災を乗り越えた私たちの時代の責務だと思う。

もう思い出したくない、あの情景を思うと胸が苦しくなるという人々にも、無理を言い、奮い立たせてこの文集は完成した。震災後の事務は多忙を極め、学校施設の改修に、削られる予算に、学校事務職員の苦悩はつきない。その中で、自らの思いを語り、また手記を寄せてくれた多くの神戸市の学校事務職員の心意気を思う。

# 阪神大震災 空からの記録



兵庫区松本地区



阪神石屋川駅周辺



阪神高速の倒壊



阪神高速西宮出入口東側

(航空写真提供 バード・アイ)

## 編集後記

あの日が巡ってきました。

忘れることの出来ないあの日から、早くも一年経つのですね。

私たちは特異な経験をしました。

二千年に一度とも言われる直下型の大地震をです。

あの日を境に私たちはこれほど意識したことはなかったのではないのでしょうか。

親として

子として

人間として

そして、学校に勤務する職業人として

それぞれの思い、体験を風化させることなく記録に残すことにしました。

思い出すには、余りにも辛いこともたくさんあったと思います。

それを敢えて語り、あるいは文章に表すことに協力してくれた方々へ感謝します。

そして私たちの神戸が一日も早くあの美しい街並みを、そしてそこに住む人々を取り戻すことを願って。